

## 宗方小太郎日記，大正 3～4 年

大 里 浩 秋

### 1. はじめに

本所報 No. 37 に宗方小太郎の明治 21 年の日記（但し中国滞在時期のもののみ）を載せ、No. 40 に明治 22～25 年、No. 41 に 26～29 年（但し 27 年 6 月 27 日から 12 月末までと、28 年 3 月 23 日から 8 月末までを除く）、No. 44 に 30～31 年、No. 46 に 32～33 年、No. 47 に 34～35 年、No. 48 に 36～38 年、No. 49 に 39～40 年、No. 50 に 41～42 年、No. 52 に 43～44 年（但し 43 年の欧米旅行時期を除く）、No. 54 に明治 45 年（途中で大正元年となる）～大正 2 年の日記を載せた。今号ではその続きとして、大正 3～4 年の宗方の手書きの日記を活字に起こすとともに、解題を付すことにする。

前回までと同じであるが、お断りすべきことをいくつか記す。解読できなかった文字は□で示した。また原文のカタカナは、西洋の固有名詞、外来語の表記を除いてひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えたが、日本人の名前の漢字は原文のままにした。私が付す解題中での原文の扱いも同様である。日記の解読と入力作業は、本学中国言語文化修士課程修了（文学修士）の増子直美さんに手伝ってもらった。さらに、日記中にある日本語の歌の解読は、歴史民族資料科学研究科田上繁教授の御指導を得た。

なお、予めお断りしなければならないことがもう一つある。下の 2 の文中に二か所数日分の欠如がある。これは、原資料を撮影する際の不手際によるもので、今後の補充を期す。

### 2. 大正 3 年 1 月から 12 月までの日記

大正 3（1914）年の日記は、この 1 年分が一綴じになっている。

前年秋から滞在した熊本で新年を迎え、その中旬には上海に渡り、2 月 12 日から「軍艦笠置に便乗」して南中国の「巡遊」に出発し、舟山列島の普陀を皮切りに南下して、寧波、馬祖島、福州、厦門、香港、澳門、広州、澎湖島と回り、3 月 25 日に上海に戻っている。その間の各地での見聞は、それまでと同様に詳しく記録しているが、とくに福州、厦門、澳門、広州、香港について記した内容は、それぞれの都市の産業の特徴やそこへの日本人の定着ぶりなどを伝えており、また、上海に戻ってからまとめた海軍あて報告第 411 号の、広東における都督府、政党、旧保皇党、国民党派、新聞発行の現状に関する詳細な内容は貴重であり、南中国「巡遊」の狙いはその辺の情報収集にあったことを思わせる。

4 月 20 日長崎着で帰国、25 日には家族と共に東京に着くと、まず娘の入学する女学校を決め、さらに、芝公園近くに家を借りて住むことになり、熊本の家はそのまま維持して、その後中国から日本に戻ると、東京、熊本両方を行き来していることが知れる。この時東京には 6 月半ばまで滞在して、様々な人物に会うのに忙しく、同文会の会合にも参加している。4 月からは手当てがひと月に付き 100 円増額

されて 300 円となった。また、外務省からは引き続き毎月 200 円の資金を得ており、そのうちの 150 円を宗方が使っていると受け取れる（5 月 17 日の日記）。

5 月 2 日の日記に升允の名前が初めて登場し、「東京に來り一家を賃して居る」と書き、その後も時々彼に関する記述がある。升允（1858～1931、蒙古鑲藍旗人）は、1905 年に陝甘總督に就任するも 1909 年に失職、1911 年に起こった辛亥革命の際清朝から陝西巡撫に任命されて、甘軍を率いて闘ったが撤退を余儀なくされ、その後は清朝の復辟を狙う宗社党の活動に参加している人物である。日記中には、その後 10 月 14 日に上海で「姚文藻を訪ひ升允に贈るべき釀金千七百五十元中より四百元を受け取り」宮島大八經由で升に届けることにしたとあり、さらに 12 月 21 日と 22 日にはそれぞれ 1200 元と 938 円余を白岩龍平經由で升に届けることにしたとある。あとの 2 回は誰から受け取ったものかに触れていないが、おそらくは 10 月に姚から受け取った資金と同様、清朝復辟を狙うグループが準備したものと考えられる。5 月 2 日の日記にはまた、東京には「国民党の亡命者」が「二百余人」いるが、孫文・陳其美と黃興の間に意見の不一致があること、国民党としては、河南を中心に反乱を起こしている「白狼をして持久の策を取らしめ」て、袁世凱打倒の機会を作ろうとしているのではないかと推測している。

6 月中旬に熊本に戻り、鹿児島で西郷隆盛の墓に参った後、7 月 18 日に上海に渡り 11 月 6 日まで滞在した。その間、それ以前と同様に姚文藻としきりに会ったり、手紙のやり取りをしており、回数は多くはないが鄭孝胥とも姚らと一緒に会っている。彼らの清朝復辟の動きに注目し、関係を深めている様子が見て取れる。8 月初めには第一次大戦勃発について記し、中旬には日本政府がドイツに最後通牒を発してドイツ軍を青島から追い出すべく日本軍が出撃する準備をしている状況に始まり、23 日には両国の「関係断絶し交戦状態に入」り、9 月 24 日付けの海軍あて報告 419 号では、日本軍の青島攻撃により中国各地の新聞が「排日を鼓吹」している様子を伝え、それが一般の民心に悪影響を及ぼすのではないかと心配する者がいるが、それは「決して介意するに足らざるなり」と述べている。時間が飛んで日本に帰る船で「青島陥落」を聞き（11 月 7 日）、熊本で「青島陥落の祝賀会」があった（11 月 10 日）とするが、この戦争に関しては宗方の出番はなかったようで、日記では日本軍の動きを追うだけの淡々とした記述になっている。

10 月末に義父が亡くなったことで海軍軍令部の同意を得て 11 月に想定外の帰国をするまでの上海滞在中の動きをあと 2 点記す。1 点は、8 月末から射的場に足繁く通いだしたことである。前から鳥類を狙う狩猟には、中国でも帰国中でも暇を見つけては出かけているが、それに加えて射的に熱中し始めたのである。もう 1 点は、10 月 1 日に東方通信社を創立したことである。このことに関連する日記中の記載としては、9 月 26 日領事館で「創立費三十五元を受け取り」、10 月 1 日「波多をして幹理せしむ」、10 月 6 日「創立披露の爲め」中国側新聞の記者と「根津、上海日報、上海日々等の諸人を招待し」、10 月 25 日領事館で「経費二百二十元を受け取り」がある。前々から領事と話していたことがこの時に実現を見、外務省の資金で運営されていくのである。宗方は社長に就任して、1923 年に亡くなるまでその任にあった。

11 月 8 日に長崎に着くとすぐに熊本に向かい、義父死去の後始末に加わった後上京し、海軍その他に顔を出した後、12 月 14 日長崎から上海に向かい、上海でその年を終えている。

次に、この年に書いた海軍あて報告の号数と日付を、『宗方小太郎文書』（原書房、昭和 50 年、以下、『文書』と略称）のそれと対照しつつ日記から拾いだす。

1 月 24 日、「報告を作り」とあるが、『文書』にはない。2 月 11 日、4 月 8 日、いずれも「報告を発す」とあるが、『文書』にはない。4 月 16 日、第 411 号「両広の政況」（『文書』の日付は 4 月 14 日）、4 月 17 日、（極秘）第 412 号「大官の猜疑」、8 月 6 日、第 413 号「張勳の屈強」など。8 月 8 日、9

日、いずれも「報告を発す」とあるが、『文書』にはない。8月30日、「欧州戦乱と日支両国の関係」、上海社会科学院歴史研究所（以下「上海」と略称）にあり日付は8月29日、『文書』にはない。9月2日、第417号「劉廷琛の宏論」、9月7日、第418号「山東省の戒嚴区域」（『文書』の日付は9月8日）、9月25日、第419号「支那の排日熱」、第420号「袁世凱の心迹に対する一種の疑問」（『文書』の日付は9月24日）、10月9日、第421号「参政院大会議の魂胆」（『文書』の日付は10月8日）。11月3日、「報告を発し」、12月28日「報告を作る」とあるが、いずれも『文書』中にはない。12月31日、第426号「清帝復辟問題 附支那の現勢」（『文書』の日付は12月30日）。

大正三年正月元日起

日誌

正月元日 快晴。元旦の儀式を了し午前藤崎神社を拝し知人を回礼し、正午物産館の名刺交換会に出席す。会者約千余人。是日細雨時至晴。井手、平山、古莊等十余人の賀客至る。

正月二日 陰天、風烈。終日在家。永原、津野列来訪。

正月三日 風雪。終日知人を歴訪して正を賀し、最後松倉、阿部野を訪ひ、薄暮家に帰る。

正月四日 晴。午前佐々干城、古閑信喜両氏来訪、留て中食す。午後松倉夫婦来訪。昨日来内外の知人に年賀状を発す。

正月五日 微雨。各地に年賀状を発す。浅井寅喜に致書す。宇野、吉田敏行、友野盛、不破昌材、阿部野等来訪。午後長江を訪ふ、在らず。

正月六日 晴。午後零時半の汽車にて宇土に赴き法華寺城山の先塋を展し、浅井寅喜宅を訪ひ小談。去て子爵邸に行雅君を候す。出獵不在、支那筆紙を贈呈し田中重と暢談。四時の汽車にて熊本に帰る。途に浅井の我家を訪ふて帰るに会す。春日に松倉を訪ふ、在らず。

正月七日 大風雪、午後に至て逾々烈しく頃刻にして銀世界と為る。

正月八日 晴。山田珠一來訪。夜石原来訪、高田玄明の真蹟を贈る。

正月九日 晴。亀雄、郵船長崎支店、波多、東和に致書す。夜菅村夫婦、津野、永原来訪。是日午後鎮西館を訪ふ。

正月十日 陰天、微雨。午前出て理髪。帰途阿部野、緒方を訪ふ。岡本源次、松倉親敬来訪せりと云ふ。

正月十一日 晴。午前大江、古莊、井手に至り告別。午後浅井寅喜宅の結納品を送て山田珠一宅に至る。山田の長女を浅井の長男の為に娶るなり。四時半辞帰。夜長江虎臣来訪。

正月十二日 晴。午前親戚知人を歴訪して別を告ぐ。古莊嘉門翁来訪。午後片山伊太郎、河口介男来訪。長江より其獵獲物山鳴一、鶉一、玉鳴一を贈り来る。夜津野、永原来訪。永原、米著の真筆一枚を贈る。

正月十三日 陰霾。午前知人を訪ひ別を叙す。池部崔彦来訪、留て中食を共にす。松倉来訪。夕刻赤星知事、石原、久野、菅村、古閑来訪。朝来行李を收拾す。明朝辞家、支那に赴くを以てなり。井手、大野謙に致書す。昨日薩摩桜島爆発百余人の死傷有り。鹿児島全市の住民皆遠地に避難せりと云ふ。熊本も朝来降霾如霧、屋瓦皆白。夜宇野貞度より黄中、景樹、知紀、三大歌人の真蹟を合装せしもの一軸を贈り来る。

正月十四日 陰天。是日家を辞し支那に遊ばんとす。早起行李を戒む。武藤嚴男氏来訪。八時家門を出て上熊本に至る。赤星知事、山田珠一、井手、小早川、岡本源次、佐々布、阿部野、友野、田中、菅村、長江、古莊等来り送る。九時発車、林千八と同車、佐賀に至り相別る。三時早岐にて急行車に換坐し五時十三分長崎着、土佐屋に投ず。熊本留守宅、吉田大佐、鳥居、土屋、田中に発信す。

正月十五日 陰。留守宅、菅村、岡本源次、迫に発信す。午後二時半八幡丸に上る。三井上海支店長小

田柿、並に山中定次郎、安部、山本等同船たり。十余年前の相知王紹棠と相遇ふ。夜に入て波浪稍高。

正月十六日 微雨。波浪頗高。

正月十七日 陰。午後三時上海着。増田、齋藤、津田、波多、井手、佐原、西本、川本、川口、神尾等来迎。東和、(この後1ページ欠)

正月二十一日 (の続き部分) ひ豊陽館に橘三郎、上海日報に井手を訪ひ帰る。平岡小太郎、並に海軍大尉小川子郎、其兄平吉の添書を携へ来訪。

正月二十二日 半晴。午前豊陽館に名和司令官、飯田参謀長、小松、水落両参謀を訪ひ、去て増田を敲き共に出て弓術倶楽部に至り、帰途佐々布、佐原を訪ひ佐原の処にて中食す。他出中名和司令官、飯田笠置艦長、小松、水落両参謀、並に宮崎民藏等来訪せりと云ふ。夜島田数雄、佐々布、川口来訪。

正月二十三日 快晴。午後波多来訪。二時小川、藤井を伴ひ姚文藻を訪ひ、帰途河野を敲き平岡を訪ひ帰る。有留重利来訪せりと云ふ。夜同文書院熊本出身学〔生〕高山、立石、以下七人来訪。

正月二十四日 晴。午前副島、河野来訪。河野より其英国にて新造せし二連獵銃一挺、並に附属品全部を余に贈与す。午後有留、佐々布来訪。佐々布に銃一挺、並に附属品一切を譲る。河野の新銃を入手せしを以てなり。迎英輔、迫良隆の信至る。迎に復書す。山成来訪。宮崎民、佐々布、高島来訪。晚平岡小太郎宅の晚餐に赴く。春日丸船長永末、並に川本同座たり。九時帰る。海軍への報告を作り午前一時就寝。

正月二十五日 晴天。是日杭州に出獵せんとす。詰朝獵装七時半平岡と馬車南門外車站に至り八時半の汽車に乗ず。高島、三田と一行四人たり。午後壹時長山門着。拱宸橋線に換坐し大東公司に至り小舟を賃し食料を調へ二時半開船。郵便局官舎前を過ぎ船を停て深津暹と立談。深津事を以て偶々此に来れるを聞き一叙して相別る。カーデン埧に泊す。

正月二十六日 陰、微雨。午前六時半上陸、打獵、無所獲。十時半半山の舟次に帰る。此地山南の小事集にして人戸二三十有り。中食後和睦聯橋方面に向ふ。無所獲。四時船に帰る。晩食後開船、臨平に向ふ。夜半達す。夜腹痛甚。

正月二十七日 晴。前七時出獵。雉子一、小鴨二、鳩二を獲、喬司にて中食。五時臨平の舟次に帰る。臨喬間距離十二清里。

正月二十八日 晴。七時上陸。臨平の北方に獵す。午前五位一、鳩一を獲正午帰船、中食。二時半平岡、高島と三人「プーヤーマヲ」に至り夜鴨を打ち真鴨二羽を得七時半帰船。三田は是日午前の汽車にて上海に帰れり。

正月二十九日 陰。前五時結束。プーヤーマヲに至り鴨を獵し真鴨一羽を獲、昨夜打つ所の二羽を収めて帰船。八時四五分臨平発の汽車にて上海に帰る。十二時半達す。馬車を賃して寓所に帰る。入浴後風邪の気味有り心気不佳。夜波多、佐々布来訪。獵獲品の一部を河野に贈る。長江虎臣、中西正樹、田中、兼高、高瀬武次郎、古閑信夫の信札に接す。

正月三十日 晴。風邪。午後波多来訪。田中清司に致書す。五時河野宅の晚餐に赴く。橘、平岡、秦、今井等同座たり。十時帰る。

正月三十一日 晴。東洋協会に去年六月至十二月会費三円五十銭を送致す。上海日報を訪ひ正午帰る。午後出て佐原篤介を訪ふ。是日正金より銀五十元を受取る。隈元武次、香月梅外に致書す。夜宮崎民、佐々布、高島前後来訪。名和第二艦隊司令官より案内状至る。

二月一日 晴天。午前理髪。増田、津田、秋元、波多を歴訪。正午佐原宅に会食す。島田、西本、神尾、波多同座たり。五時帰る。岡本源次、松倉善家の信片至る。農商務技士松川潔来訪せりと云ふ。

二月二日 晴。松川潔、荒田来訪。岡本、松倉に復書す。午後大倉洋行を訪ひ、帰途平岡、山成を敲き四時帰る。秋元少佐、津田大尉、名和第三艦隊司令官の招宴に六三亭に列し、十時帰る。



二月三日 晴。波多来訪。根津一，阿部野利恭に致書す。夜佐々布来訪。

二月四日 晴。吉田大佐に致書，軍艦笠置に便乗広東行の事を通告す。午前川口市之助来訪，近日長沙に出張すと云ふ。之を留て中食す。山田修作来訪。姚文藻の案内状至る。秦より高麗参油二盒を贈り来る。池田郡蔵来訪。六時佐原宅の晚餐に赴く。島田，西本，波多，西本，神尾等同座たり。十一時帰る。

二月五日 半晴。午前増田を訪暢談。豊陽館に至り名和司令官に名刺を留め波多を訪ひ帰る。熊本宅，並に前島眞に致書，南游の事を報ず。六時姚文藻の招宴に赴く。同座は沈子培，曾植，王旭莊，増田，齋藤，佐原，西本，波多，神尾等なり。九時散ず。

二月六日 晴。大井五郎，原田棟一郎の信片至る。午後篠崎，佐々布を訪ふ。

二月七日 雨。午前村上貞吉，波多来訪。午後平岡，池田来訪。田中清司の信至る。石橋藤次郎来訪，昨日来着せりと云ふ。五時出て川口市之助を大倉に訪ひ其湖南行を送る。夕刻川口来訪，長沙村山正隆，大河平隆則に添書を与ふ。

二月八日 陰。午前増田，橘を訪ふ。午後二時の小蒸気にて軍艦笠置に至り司令官，参謀，副長を訪ひ便乗の事を商し，五時帰る。迫良隆の信至る。眞島次郎来訪。夜小笠原来訪。

二月九日 晴。午前齋藤恒，橘三郎，佐々布を訪ひ帰る。

二月十日 半晴。午前理髮。増田，有吉，村上，古谷，佐原，井手，波多を訪ひ帰る。正金より銀百七十八元を受取る。洋服代二十七元を福記に支払ふ。有留，井手来訪。晡時河野来訪。成田鍊，隈元康眞，東洋協会の信至る。夜賀来敏夫。

二月十一日 半晴。午前有留，眞島，副島来訪。行李を軍艦笠置に送る。熊本宅，海軍に書信，並に報告を發す。迫に復書す。大瀧八郎，波多博来訪。午後宮崎民蔵の信至る。明日より第三艦隊旗艦笠置に便乗南支那を巡遊せんとす。行李收拾す。島田数雄来訪。増田中佐，齋藤少佐来訪。夜日比野副官，西本，佐々布来訪。海軍南游の旅費百五十円を送り来る。

二月十二日 晴天。是日軍艦笠置に便乗南支那を巡遊せんとす。早起行装を理す。大瀧来訪。八時半東和を出で郵船棧橋に至り九時の小蒸気船にて軍艦笠置に乗ず。司令官，艦長，参謀，副官と中食を共にし十二時半出港，呉淞口外に錨泊す。是日天気放晴，夕陽甚好。入浴後司令官室に至り参謀長，参謀と談じ十時就寝。

二月十三日 健晴。午後二時大戢山附近を過ぎパーカー群島に至る。海色始て青く大小の島嶼星羅棋布す。午後六時舟山列島の一なる「ホール」島附近に錨泊す。普陀山の北十五海哩〔の〕位置なり。終日名将言行録を読む。入浴後日本服に改め司令官の室に至り談ず。

二月十四日 陰天。午前六時半錨地を發し普陀山に向ふ。此辺島嶼星羅所謂舟山列島是也。艦上一望千帆曉風に懸り甚佳暱たり。八時普陀着，九時上陸。海岸禪院白華禪院を歴観して三聖堂より普濟寺に至る。大寺の一なり。金山の道路石を斲し山上樟樹多風致聞く所に及ばず。正午船に帰る。是日第一艦隊摂津を旗艦とし金剛，薩摩，筑後，石見，周防の六艦入港礼砲の交換有り。四時半より名和司令官，飯田参謀長，小松，水落両参謀，日比野副官と第一艦隊司令長官加藤中将友三郎の招宴に列す。艦長，参謀長以下二十二人同座たり。八時二十分水雷艇にて帰る。雨。

普陀に三大寺，五十院，五百庵有り。法雨，恵濟，普濟を三大寺と為す。我慧鐸和尚の開基にして其初て建立せる観音庵なるもの今尚存す。開基の年代は唐代に在りと云ふ。

二月十五日 晴。午前六時半普陀拔錨。第一艦隊の錨地を一週して別を告げ鎮海に向ふ。十時蝦岐門水道に入る。右側の岩山を桃花島と為す。溪谷の間墟落散点林石溪山の趣倪画に彷彿たり。十時半水道二分大分左する者は象山港の門戸，右方の連山を舟山島と為す。定海県城は右方に在り。午後一時鎮海着。二時半艦長，小松，水落両参謀，並に副官と小蒸気にて寧波に向ふ。荒田氏鎮海迄出迎，四時半江北岸着。招商局碼頭より上陸，荒田の官舎に至り晩支那食の饗を受け，十時辞して中村旅館に投宿

す。此地曾游屈指正に二十四年矣。食事前諸子と江北岸に散歩し新江橋に至る。十時中村旅館に投宿。入浴後十二時就寝。小松參謀と同室たり。

二月十六日 晴天、霧太深。前五時起床。茶を吃し六時四五分旅館を出で、甬江を度り江東の常関前に上陸し、長斌橋に至り税関の「ハウスボート」に搭ず。時に七時十五分也。運河に就て東南行八時五十分呉郷集を過ぐ。運河兩分左方の水路は育王山に通ず。十時五十分大涵山麓を過ぐ。松竹掩生風致甚可也。左方育王寺の塔を望む。前面に太白小白の諸山有り。十一時十分小白鎮に至り天童中院に於て山轎に乗り天童に向ふ。此を距る十五清里山阪を越へ一時半天童寺着。道の兩側老松列を成し京都大徳寺の趣に似たり。天王殿を入り仏殿に進み院内を巡覽す。規模宏大、稀看の大寺なり。僧徒の数四百人と称す。前住職八指頭陀は近今の名僧なりしが昨年北京に客死せり。寺門を出で古天童に向ふ。松竹林を成し風致故山に似たり。古天童は往昔山水の災を被り寺院流失せしを以て今は只だ一小堂を存するのみ。天童中院に帰り道を転じて育王寺に至る。五時十分着。寺院の構造天童と大差無く境内清浄一塵を着けず。昔時我阿部仲麿の留学せし所なり。六時宝幢鎮の舟次に帰る。夜一行七人鶏を割て会食す。十時四五分寧波着、中村旅館に投じ十二時就寝。

天童山は寧波を距る東南六十清里陽堂郷の太白里に在り、晋惠帝永康元年義興禪師の建立する所。

相伝ふ、太白星童子に化して常に師の傍に侍す。故に称して天童、又た太白山と謂ふ。禪宗五岳の一にして浙の名山たり。南宋の紹興四年京都建仁寺の開祖千光国師の此に留学せしを初とし、宝慶年間越前永平寺の祖道元禪師亦た此に修業す。後鳥羽法皇の皇子実崇義尹亦此に留<sup>□</sup>せりと云ふ。

二月十七日 微雨。朝荒田来訪。十時坐轎新江橋を度り寧波城に入り、繁盛の市街を過ぎ、天封寺に至り天封塔に上る。十二層なり。唐代の建る所。城隍廟を觀て天王教の仁慈堂を參觀す。嬰兒を育し之に職業を授たる者なり。十二時旅館に帰る。一行の飯田艦長、小松、水落兩參謀、日比野、中村兩尉、外一人と荒田を加へて中食し、午後三時半の汽船にて笠置に帰る。熊本宅、波多に信片を發す。

第一艦隊參謀長佐藤少将鐵太郎より無線電信に接す。曰く前日旗艦宴会の時先生たるを知らずして高教に接する能はざりしを遺憾とす。責てもの思やりに此に一電敬意を表す。

余亦た笠置の無線にて黃海航行中の第一艦隊旗艦摂津の佐藤少将に復電して曰く、

貴電多謝す。当日切に高教に接せんことを期待せしに匆匆の際坐るに其機を失ひしを遺憾とす。

入浴後例に依り參謀長、參謀と司令官の処に閑話し、散後日誌を作り十二時寝に就く。

二月十八日 晴天。午前七時鎮海拔錨三都に向ふ。十時蝦岐門水道を過ぐ。左舷桃花島有り。溪谷の間壙落隠見、林石の門多く見ざる所。黃昏波浪漸高。九時入浴、就寝。

二月十九日 陰、霧深。午前七時半左舷近く東列島を望む。海賊の根拠地なり。燈台有り。十二時三都澳の口門に入る。十二時四五分港内の税関前に投錨す。人戸百三十許。一時半上陸、閩海関、三都分防局、茶税局、電報局、郵政局有り。洋房八戸、外国人の居住者七名に過ぎず。溪間松林の間李花雪の如く、麦綠葉黃恰も四月の季候に似たり。土人の墳墓は多く山腹に在り。其状琉球の墓地と同じ。三時半帰艦。

三都は明治三十二年五月通商地として開放せられし者にして福寧の管下に属し、港湾广大、艦隊容るるに足れり。産物は茶、靛、陶器等を太宗とす。福州に至る七十哩。

二月二十日 快晴。無風海平不波。前十時三都の錨地を發し湾内に深入し低島を一週して三都澳口を出づ。兩側の山奇形万状松竹林を成し、幾道の飛泉山腹に懸り李花雪の如く溪間に粧点し、風致名状す可からず。二時四十分羅源湾口に入り、三時下宮村の前面に投錨す。三時半上陸下宮に至る。二百余戸の漁村なり。七時帰艦。夜更雨。

二月二十一日 陰。風大にして浪高し。午後一時拔錨。馬祖島に向ふ。此を距る四十一哩、午後五時馬祖島の西に泊す。西方閩江の諸山を望む。此より馬尾に至る二十哩。夜食後士官室に於て講話を為す。司令官以下士官一同列席、一時間にして終る。

二月二十二日 陰。八時馬祖島を發し九時半閩江に入る。門口に当り兩山犄角の状を成す。砲台兵營有り。金牌門と謂ふ、兩側の山景致甚佳。閩安門に至れば水路漸く窄く、左右の山上旧式の砲台有り。此辺江幅六百米突に過ぎず。十時五十分羅星島に達し拔錨す。江口より此に至る二十二哩、福州を距る十哩に過ぎず。十一時土谷副領事、前田彪以下六七人來迎。正午前田等の小輪船に便乗福州に向ふ。一時半南台に達す。右方鼓山を雲煙の間に望む。南台の閩報館に投宿す。少憩、前田と出て領事館に土谷領事を訪ひ、三井に津田、商船会社に赤石右一、東瀛學堂に三屋大五郎、台灣銀行に山瀬肇、日本人俱樂部に陸軍大尉郷田兼安、公隆洋行に小園江隆哉等を訪ひ、蒼前山を一週して歸る。夜郷田大尉來訪深談、午前一時に至り就寢。

二月二十三日 陰。頭痛甚。朝司令官一行を江干に迎ふ。午後広東會館を見る。司令官一行來訪。閩報館に於て一同撮影。松浦医士保來診。藥を用て一睡し午後六時領事館の招宴に赴く。司令官以下主客二十人許。十時散ず。是日故人橋本少佐齋次郎の墓を展す。

二月二十四日 晴。是日福州府城を觀んが為名和司令官、飯田艦長、小杉、日比野、服部、前田、有留諸氏と轎に乗じて領事館を出で、万寿橋を度り南関の市街を過て南門を入り于山白塔寺の定光塔に上る。福州全景襟帶の下に在り。東門街に至り旧滿州八旗駐防地を一巡し將軍衙門を一見し南門街の聚春園に中食す。結構宏大、上海の無き所。食後旧総督衙門前を過ぎ骨董舗を巡覽し硯、墨架、宋碗等を購ひ、五時歸る。

二月二十五日 快晴。是日鼓山の湧泉寺に游ばんとす。午前十時小汽船にて南台を發し十一時山麓に達し上陸山轎を賃して上る。一行は名和中將、並に海軍士官十余人、前島、郷田、足立以下数人たり。閩山第一門を入り東際橋を度れば磴道蜿蜒逾々佳境に入り、滿山の松翠緑滴らんと欲し、兩側巨岩絶壁上古今人の題字甚多し。十二時半半山亭を過ぐ。午後一時聽水亭に達す。行厨を開て中食す。亭は溪間断崖の下に在り、林泉迷邃甚だ賞すべし。陳宝琛の別莊なり。食後磴道を攀て湧泉寺に至り院内を巡視す。五代以前の建立にして規模宏大、天童、育王の兩寺に比すれば稍や遜色有りと雖ども風致清雅遠く之に過ぐ。實に閩越の名利なり。我弘法大師も曾て此寺に修業せしと伝ふ。現に五百余人の僧有り。山上一望福州南台の全景襟帶の下に在り。四時半山下に達し司令官一行と別れ前田、郷田等と南台に歸る。郷田、前田と會食。前田と連名にて知人十余名に信片を發す。内人、並に清子に信片を致す。

二月二十六日 陰。是日軍艦笠置に歸らんとす。午前十時閩報館を辭し小輪船にて發す。本日正午旗艦にて「レセプション」の催有り。福州居留民を招待す。到る者土谷領事、前田、郷田、以下二十余人。四時散ず。前田、土谷等と握別す。

#### 福州

福建省は揚子江西江兩流域の間に介在して一の獨立せる地勢を形成す。閩江、晋江、龍溪の三江に沿て福州、泉州、彰州の三平野を為す。此の平野には米、甘蔗を産し山間の傾斜地には茶樹を栽へ山地には木材を出せり。右の三江は本省の大動脈にして、殊に閩江の流域は福建の北半部約二万平方里に亘り、幹流は江西に發源し延長約三百哩に及べり。閩江口より南台に至る三十二哩大船は多く馬尾に錨泊す。馬尾より南台に至る九哩水浅ふして大船に入るに能はず。干潮時小汽船と雖ども通じ難し。馬尾は金牌門より十二哩の上游に在り（江口より二十哩）江の左岸に位す。江中に羅星島有り、高塔一基有り。遠望目標たり。通濟橋を以て馬尾と通ず。福州は人口三十二万。閩江の北岸十二丁の地点に在り。城北の山を越王台と謂ふ。高樓有り、鎮海樓と名く。城南の丘陵は于山にして白塔一基有り。城西に烏石山有り。形勢甚雄大なり。南台は一に泛船浦と謂ふ。其高地は即蒼前山なり。外国人は多く此に住せり。外人の総数六百内外にして内日本人百五十名、台灣籍民二百五十名。商館は三井、台銀、大阪商船等にして、旅館には大和館有り。日、英、独、仏、伊等の領事館有り。閩江の中流に小島有り。南北より各一の石橋を架して福州南台間の交通に資す。是れ即

有名なる万寿橋にして長百四十丈、元時の架する所なり。福建の産物は茶、木材、竹、紙等にして、野菜、果物、樟腦、煙草、漆器之に次ぐ。輸入品は海味、土布、卵、生絲、絹布、阿片、麦粉、綿絲。福建に於ける米国人の勢力は逐年増大し来るの兆有り。其勢力の根本は教育と慈善業にして南台に於ける鶴嶺英華書院、並に城内に於ける同書院の現生徒は各二百人以上にして卒業生の数已に千人以上に達し内地の各学堂と聯絡し、又た基督教青年会は三千以上にして其勢力甚盛なり。福州港対外輸出入貿易額千七百万両にして対内外貿易総額は三千五百万両、此中輸出千九百万、輸入千六百万にして年々百五十万の輸出超過。

二月二十七日 雨天。午前十一時馬尾拔錨。十二時半長門砲台前を過ぎ十五節の速力にて航行。外洋に出れば波浪頗高。五時海壇島を右舷に望み、七時針路を転じ燈台を右方を見て航行す。夜波浪頗る高し。

二月二十八日 晴。前八時厦門に入港し外港の鼓浪嶼附近に投錨す。軍艦須磨、並に駆逐艦不知火此に錨泊す。須磨艦長白石直介氏に遇ふ。支那軍艦海圻、肇鈺此に泊す。夜司令官室に談ず。

三月一日 快晴。前八時の小蒸気船にて鼓浪嶼に度り内港の龍頭渡頭より上陸。領事館に菊池領事、船津書記生を訪ひ暢談。去て画葉書を購入し十一時半の定期便にて笠置に帰り服装を改て午後領事館のアットホームに列席せんとす。船遂に来らず。因て領事館に午後の茶会を辞し樞洋行に中食し、午後道に有留に逢ひ相携て鼓浪嶼を一週し、山上巨岩の上に踞して厦門の全景を俯瞰す。島嶼甚列風景甚好。途中郵便局に至り内人、清子、長江、平岡、有吉に信片を發し四時の定期便にて帰艦。是夜領事より晚餐の案内有り、往かず。

#### 厦門

厦門は龍溪河口に横はる一島にして周廻三十五哩、人口十二万。鼓浪嶼と海峡を隔て相對す。恰も馬関の門司に於けるが如し。市街は内港に面し山を背にして一角海中に斗出す。日英の專管居留地有り。鼓浪嶼は周廻三哩の一小島にして各国領事館、商店、郵便局、海底電信局等多く此に在り。外国人総数約二千三百人、内邦人二百五十、台湾籍民千五百人、英人三百六十、其他諸外国人二百名にして我商店の重なる者は台湾銀行、三井、三五公司、商船会社等にして外に博愛医院、西本願寺別院有り。産物は茶、紙、砂糖、煙草等にして一年間の貿易額は二千万両。内輸入千七百万、輸出三百万にして輸入超過千七百万両の巨額に達すと雖ども、南洋諸島其他各地に在る海外移民より毎年千九百万両を滙送し来るを以て輸入超過の損失を償ふて余有りと云ふ。此の地方より南洋に出稼する者一年約五六万人の多数に上れり。漳厦鉄道は厦門対岸の嵩嶼を起点とし溝東橋迄二十哩間竣功せしも資本不足の爲め延長する能はず。此の既成線は毎日二回つつ汽車を往復せしめつつあり。嵩嶼より漳州に至る三十哩。旭瀛書院は東亜書院の後身にして台湾籍民の機関たる台湾公会の経営する所。校長は日本人にして台湾総督府より任命せる者にして他に台湾人の教師三人も総督府より資助せり。現生徒の数は百三十人なり（書院は厦門に在り）。同文書院は米国人の経営する所にして厦門島の高地に在り。生徒の数二百人有り。

厦門、金門兩島は明末鄭成功が水軍の根拠地、形勢甚壯。鼓浪、厦門の兩島奇岩怪石の巨大なる者山上に兀立し甚だ奇觀たり。殊に鼓浪嶼の居留地は榕、松、林を成し怪石屋の如く其間に点綴し、洋樓參差として林表に聳へ風致画くが如し。点検後入浴、司令官の処に暢談。十一時就寢。

三月二日 晴天。増田、加藤兩中佐、齋藤少佐、前田彪、波多博に信片を發す。晌午旭瀛学堂学生三十余人笠置に来て參觀す。正午司令官より菊池領事義郎以下五人を招て会宴。二時散ず。夜司令官の処に会谈す。（厦門漢字新聞は全閩日報、南声報の二種なり。發行数各千枚）。二月二十六日趙秉鈞北京に於て毒殺されしとの無線電青島より当港碇泊の独逸軍艦に達せりと云ふ。

三月三日 晴天。午前六時半出港、香港に向ふ。是日風死波平、海天一色、上海發後第一の好晴也。午後四時南澎群島を右舷に望み薄暮汕頭港口を過ぐ。是夜新月如鉤、夜色不可狀。司令官室に談ず。



三月四日 半晴。午前七時香港々に入る。両側の山上砲台，山下に造船場有り。七時半港内に進み砲台並に各軍艦と礼砲の交換有り。今井総領事義郎，大井中佐来艦。午後一時半有留と上陸，海岸通りコンノート路，クギンス路を横断し花市街（フラワーマーケット）香港日報社に松島宗平を訪ひ，案内者を頼みて有名なるケーブルカーにて千八百尺の頂上に登りピークホテル前にて車を下る。軌道中傾斜最急の処六十五度の急勾配を有せり。往復車資五十仙なり。ケッテル路を過ぎ香港島の背面を望む。島嶼星羅景致甚好。山の最高峯を「ビクトリヤマウンテン」と云ふ。惜むらくは帰途を急ぎ登る能はず。ホテル附近の山頭に立て眸を放てば，香港九龍の全局襟帯の下に在り。四時下山総督官舎，公園前を過ぎブラックヒーヤ棧橋に來り五時半の定期艇にて帰艦。夜船上望香港島，燈火満山群螢の如く繁星の若く夜色極て佳。

三月五日 快晴。午前七時定期にて上陸，有留と共に永樂碼頭に至り泰山号に乗り澳門に向ふ。八時開船，船中にて朝食す。香澳間里程四十哩。一等船賃一元半。針路西南に向ふ。九時左舷に長洲埠を望む。山下人煙頗る密，山上洋房十余戸一列に相連る。是日海上静穩，船群島の間を縫て行く。恰も我瀬戸内海を航するが如し。十一時十分澳門着，十一時半上陸。先づ聖保羅寺院の廢址を見る。紀元一六〇二年の建立に係はり一八三五年火災に罹り，今は只だ其前面と数十階の石段とを存するのみにして，廢礎断壁光景荒涼古色掬すべく，恰も羅馬古城址を見るの感有り。「アルゲート」は市内小丘の上に在り。巍然高く聳へ三門を開き石柱十本有り。前面に聖母聖徒の像を置けり。本寺院の工事は邪教禁制の時亡命せし日本人の経営に係はると云ふ。澳門の名称は土人が阿媽港と呼べるを葡萄牙人訛伝して「マカオ」と為せし者にして，阿媽港には阿媽なる一豪傑を紀念せし者にして，彼は日本より渡來せし者と伝へらる。去てカモエンス公園を觀る。是れ葡国の詩豪カモエンスを紀念せし者にして，迷濠古雅甚だ趣致有り。公園を出て上車澳門政庁を見海岸を一週し，一時半泰山号に帰り再び出て賭博場を觀る。澳門はモナコ，ジヨホールと共に世界三大賭博公許地の一にして，其の歳入の百四十万弗は賭博特許税と阿片税を以て大部分を占む。今日澳門の生命は實に賭博公許の為に維持されつつ有り。賭場には銀号又は銀牌と称し三層の高樓軒を連ね出入織るが如し（人口七万九千人，内葡国人三千九百人）。此地は實に十五世紀末東は日本より西はモザンビックの間に於ける布教文化の中心にして政治上尤も浅からざる關係を有せし処にして，明の嘉靖八年葡人の租借以來支那に於ける唯一の外国貿易港として，又た東洋に於ける歐洲文明の前進根拠地として無比の繁榮を極めしも，時勢の変今は只だ憐れむべき殘骸を留むるのみ。午後二時出港，船中にて中食す。五時半香港着，永樂碼頭より上陸，車を驅て香港日報社松島を訪ふ。七時同文書院出身者の招待に日本人俱樂部に赴く。同座は松島宗平，山下彦五郎，田中壯太郎，西田善藏，丸山，香取，清水，池田，前川，有留，大中等なり。九時半散ず。有留と松原旅館に投宿す。

三月六日 陰。松島來訪。九時半今井領事，田中書記生を領事館に訪ひ，歸途松島に告別し旅館に帰る。午後篠原祐喜來訪。三時十五分の定期にて帰艦。

三月七日 半晴。朝七時笠置を出て司令官，參謀長，副官一行と香港に渡り，汽船河南号に乗り八時拔錨廣東省城に向ふ。九時半零丁洋を過ぐ。小島有り，零丁島と名く。文天祥の所謂惶恐灘辺說惶恐，零丁洋裡嘆零丁，もの即此處なり。十二時珠江々口の大角頭島に至る。左舷江中の二島，並に右側の山上砲台有り，連珠の如し。此辺江幅廣大，恰も揚子江口崇明島附近に似たり。午後一時中食。行く三十分にして江中三角洲有り。第一門と名く。水道兩分兩ながら船を行るべし。右方の水路を取て進む。兩岸小山断続相連る。二時黃圃汎を過ぐ。左舷小山の麓江に沿て人家相連。左方の山上砲台有り。支那艦底瑞，並に汽船二三隻此に泊す。此辺二三の扁洲有り，水道又二分す。前面九層の高塔を望む。右方の水路を取て進む。三時右方に広九鐵道の車站を望む。此より船舶輻輳江面を掩ふ。水路幅二百五十米突許，兩岸人家稠密，左は河南にして右は長堤なり。三時二十分長堤の碼頭に達す。赤塚總領事，吉原洋三郎，大井中佐，須田少佐以下來迎。軍艦嵯峨の小蒸氣にて沙面の居留地に至り上

陸，領事館に入る。適々広西都督陸榮廷，同民政長張鳴岐，広東鎮守使龍觀光，同民政長李開侁，同警察庁長鄧瑤光等坐に在り，出て之に面接す。茶話少時一同と共に撮影す。午後五時半より司令官以下，並に赤塚領事等と連轡広東都督龍済光の招宴に城内の旧督鍊公所の督署に赴く。門に至れば隊伍を排列し楽を奏して一行を迎ふ。龍都督中門に立て一一握手し入て座に就く。盛饌歓待至らざる無し。龍今年四十七歳巨眼にして色黒く容儀粗野小節に拘はらず，識見経綸両ながら言ふべき者無しと雖ども，骨格強健にして蛮勇有り，亦た一人物たるを失はず。是夜都督，幕僚の宴に陪せし者は憲兵司令官金鎔，都督の長子龍体軋（十七才），混成旅長殷爾駟，警察庁長鄧瑤光，副官余家駒以下文武官七名。十時辞帰。台湾銀行支店吉原氏に宿す。

三月八日 陰。午前十時一行と共に轎に乗り沙面より長堤に出で，デパートメントストアの先施公司を見る。四層の高樓にしてエレベーターの設け有り。百貨陳列規模の大，支那第一と称す。屋上展望台を設く。之に登て一望すれば省城の全局指顧の間に在り。靖海門を入り骨董舗を巡覧し象牙細工を購ひ，西関第十甫の文縁に至り支那料理を食す。結構壮大院中に水榭を設く。食後華林寺に至り五百羅漢を見る。マルコポーロの像有り。此寺の建立千四百年前に在り，有名なる古刹なれども修理到らず，虎山，天童に及ばざるに遠し。正西門を出で回教の寺院懷聖光塔寺を見る。唐代の建立にして構造他の寺院と同じからず。奇形の塔有り，古色掬すべし。現に省城に於ける教徒五千人有りと云ふ。五時帰寓。六時赤塚領事を訪ひ寛談。八時俱に出て日本倶楽部の招待に臨む。十時帰寓。吉原と談じ行李を整へ十二時就寝。

#### 広東

広東省城の人口は二百五十万と言ひ或は百五十万と号し其实数を知るに由無しと雖ども，水上生活の十万人を合せ約百三十万内外の譜に在る者の如し。省城は珠江を隔て南岸の河南と相對（河南人口十万）す。城内は豪商巨賈軒を並べ二三層の高樓櫺比相連り街路狹窄にして幅六七尺に過ぎず。外国居留地は珠江北岸の沙面に在り。区域其狭し。居留外国人四百四五十人，内日本人百四十名にして日本倶楽部の會員たる者三十五人に過ぎず。広東の輸出入貿易総額は一億五六千万円にして，内輸出六七千万円，輸入一億万円。輸出品の大宗は生絲の四千乃至五千万円を筆頭とし花蓆の三百万円を第二位とす。輸入は棉絲布と石炭，麦粉，沙糖，洋火，海味，雜貨等なり。広東は手工芸の發達せし所なるが，近年漸く器械力を利用するに至れり。広東の兵力は五万と称すれども其实三万五千に過ぎざるべく，重要な地位は龍済光の旧部済軍を以て之を占め他兵を混ぜず。陳炯明時代の軍隊は都て之を解散せり。第一革命以來濫發せし紙幣は約三千一百万円に上り，現に一円の紙幣は硬貨の六十錢に兌換されつつあり。香港広東間水路九十哩，船賃特等六円七十五錢，七時間にして達す。九龍広東間汽車里程百哩，車資四円，四時間にして至るべし。

#### 香港

香港は英国皇領殖民地の一にして其領土たる香港島及び九龍附屬地より成り，別に九龍半島，大瀝島，其他の租借地之に属す。英国が此地を領有せしは千八百四十一年即清の道光二十二年にして阿片戦争の結果なり。南京に於て和議を講じ，清国は英国に対し償金二千二百万兩を支払ひ同時に上海，広東，福州，厦門，寧波の五港を開けり。所謂南京条約なる者是なり。今を距る七十余年前迄は此地は実に寥落たる一漁村に過ぎざりしが，英国の經營其宜しきを得忽にして外国貿易の覇權を握りして澳門を圧倒し遂に東洋第一市場の位置を占むるに至れり。香港は九龍附屬地と相對し周回二十七哩，面積三十万哩，海拔一千乃至千八百呎の山稜にして平地を見ず。其北岸を埋めて東西五哩のウキクトリヤ市を置く。普通之を香港と称す。人口二十二万余，政庁，並に会社，銀行等の所在地なり。九龍半島突端の附屬地は面積四方哩，人口五万，九龍とウキクトリヤ市の中間は即香港港にして東西の両口有り。九龍の後方約二百八十六方哩及び大瀝島，其他の諸島嶼を挙げ千八百九十八年に九十九年間の租借を為し，之を総称して新領土と謂ひ香港總督の統治に隷す。島嶼の總数

大小約三千、総人口四十四万五千人。

外国人一万二千人。英国陸軍千九百五十四人。

印度兵二、〇一五、海軍（東洋艦隊乗員を合す）六、一八〇。

香港は勅任<sup>ガバナー</sup>総督一人有り（現任者サー・ヘンリー・メー）。行政参事会の幫助に依り殖民地全部の行政を掌る。参事会は六名の官吏議員と二名の勅選市民議員より成る。別に立法参事会の設け有り、総督之が議長として立法の事に与る。立法参事会は左の議員より成る。駐屯軍司令官、民政長官、検事総長、財務局長、土木局長、支那人取締長、警務総長、勅選市民議員四名（内二人は婦化支那人たるを要す）、市民議員二名。

香港の駐屯軍は英兵及び印度兵四千名より成り、主として要塞砲兵隊工、歩兵にて組織し少将一人之が司令官たり。

学校は官立と認可の両者を合し六十七校、生徒六千。外に私立校二百四十、生徒九千人。香港大学は一九二二年の開校にして百二十余万円の寄附金を基本とし程度尤も高し。皇仁書院は古き歴史を有する中学程度のものにして生徒六百名、主として支那人教育を目的とするも外人子弟も多く在学せり。香港大学長エリオット博士の言に曰く、本大学をして東方に於ける学術上の礎石たらしめ新嘉坡より浦塩に互る広大なる地域に於ける学生を吸収すべし、吾人は迷信に代るに科学を以てし停滞に代るに進歩を以てせんとす、是れ豈に一大事業に非ずや、吾人は実に世界の他の大学に於て比すべき無き有望の前進を有するものなり云云。

英字日刊新聞は四種にして、漢字新聞の数、並に発行紙数左の如し。

華字日報（袁世凱に属す。紙数三六〇〇）、循環日報（三〇〇〇）、共和報（康有為の機関。一五〇〇）、大光日報（五〇〇）、中外新報（勢力有り。七〇〇）、世界公益報（一四〇〇）、真報、月刊香港雜誌（親米排日）

千九百六年の調査によれば、香港は出入船舶の噸数に於て世界第一の地位に在り。一九一一年度に於ける出入は五十四万余隻、三千六百万噸（漁舟を除き戎克を含む）。内外洋航路に従事する船舶のみにして一九一一年度に一日平均二十六隻の出入を見たり。香港は上海と共に支那対外貿易の大部分を取扱ふ所にして其の中継貿易の総額は年約五億弗に巨額に上れり（以上福州香港地方の紀事は大野恭平氏の南方支那より抄録せしもの少なからず）

雜抄

福建廣東両省人の海外に出稼するもの三百余万人、支那の輸入超過一億兩は此等移民の送金にて補償せらると云ふ。支那全国の輸出入総額は年七億万兩乃至八億五千万兩なり（支那に於ける互市場四十八ヶ所）。香港在留日本人は千五百人にして三月四日入港当〔日〕日本汽船の錨泊するもの十八隻の多きを見たり。粵漢鐵道は広州省城より連州に至る百二十八哩間竣功し、筭尾卯作技士として之に従事せり。

三月九日 陰。午前五時半結束、吉原宅を辞し大井中佐の寓に至り、飯田参謀長と共に江干に至り三井の小汽船に搭じ広九鐵道大沙頭車站に至る。領事官補赤松祐之、三井主任津久井、米内山、吉原陸軍少佐、須田善澄以下数人来送。大井中佐、津久井両氏同車たり。七時の汽車にて発す。一路水田相連山延水緩、恰も郷園の風致に似たり。沿道橄欖、梅等の樹木甚多。八時一五分河を渡りて石龍頭を過ぐ。広九線第一の大駅にして人口三万許、地勢平坦なり。九時に至て沿道山丘起伏平地漸く少し、樟木頭、石馬駅を過ぐ。両側の山次第に迫り溪水清冽掬すべし。十時深圳駅を過ぐ。広東省城此に至る七十五哩、此处より九龍に至る二十五哩は英国の租借区域に属す。行く少許大浦を過ぐ。左方に海湾を見る。二隧道を通過し十一時九龍車站に達す。直に軍艦の汽艇に乗り笠置に帰る。津田大尉静枝に面す。大井中佐の後任として広東に赴く者なり。練習艦津輕入港。五時四五分香港を発し馬公に向ふ。

三月十日 陰。午後四時左舷三四の小島大海の中に点在するを見る。南澎列島はなり。

三月十一日 半晴。午前八時澎湖島に入る。馬公要港司令官釜屋中将忠道、同參謀長田中耕太郎、陸軍要塞司令官千秋少将、澎湖庁長澤井瀬平以下来て旗艦を訪ふ。司令官室に於て以上諸氏に面す。此処日清戦役当時従軍の地曾游回首正に二十年矣。午後司令官と要港司令部に釜屋中将、田中大佐を訪ふて帰る。是日釜屋司令官より晚餐の案内有り。五時半上陸、要港附近を散歩し、六時半宴に赴く。同座は名和司令官を主賓とし第三艦隊幕僚、澎湖庁長、千秋少将、要港幕僚を合せ二十余名。席上熊本主計中監佐伯敬悉に面す。九時散ず。汽艇にて笠置に帰る。是夜陰歴二月望月、月明如水。澎湖の群島金波漾曳の間に隠見し、風趣名状す可からず。古来澎湖は月を以て名有りと云ふ。帰艦後入浴、衣を改め甲板に出て涼を納る。十二時寝に就く。

三月十二日 晴。正午旗艦にて要港、要塞両司令官同幕僚を招宴、余亦席に列す。夜に入て甲板に出て月を賞す。

三月十三日 微雨。熊本宅、並に広東米内山に致書す。午後三時有留と上陸媽宮に赴き蔓細工を購ひ、去て澎湖庁、郵便局、小学校の前を過ぎ紀念館前の公園に休憩す。附近に軍艦松島沈没の紀念塔有り。巨大の砲身を以て之を造る。又是一片墮涙の碑也。全島内地人軍隊を除き一千五百人。要港附属の軍艦は須磨、並に駆逐艦三隻のみ。六時要港參謀長田中大佐耕太郎の宴に臨む。名和司令官、並に熊本人佐伯敬悉同座たり。十一時辞帰、風濤險惡辛ふして笠置に帰る事を得たり。

三月十四日 陰、強風。是日港外にて射的の予定なりしも風波甚しく実行する能はず。広東米内山に借り所の調査書を書留郵便にて返却す。

三月十五日 陰。風波少しくも衰へず。昨日来艦内に在りて上陸する能ず。

三月十六日 陰、微雨。風力衰へず。海軍々令部竹下少将に発信、広東地方の概況を報ず。九州日々小早川秀雄に旅行の概要を通信す。終日在艦。

三月十七日 陰風。終日在艦。夜司令官室に談ず。

三月十八日 陰。終日在艦。夜田中參謀長来艦。会食後司令官室に歓談、十時散ず。

三月十九日 陰天。是日射的の為に港外に出動の予定なりしも浪高くして出る能はず。不得已射的を中止し午後出港象山湾に向ふ事となれり。十時艦長と上陸要港部に田中參謀長、佐伯主計長を訪ひ告別。余一人留て田中大佐の処に中食し時事を暢談し、午後笠置に帰る。田中氏亦旗艦に來り送別。午後五時澎湖島馬公を發す。波濤澎湃北風と相打ち鞆鞆声有り、艦体動揺殊甚。七時食後就寝。

三月二十日 快晴。午後一時東引島の右側を過ぐ。本日福州前田彪の韻に次す。

北馬南船三十春、絲々髻影老風塵、相逢忽別情何尽、一夜篷窓夢故人。

三月二十一日 濃霧。午後二時浙江省象山湾沖に錨泊。霧深くして入港する能はず。

三月二十二日 快晴。風波全収。午前八時錨地を發し舟山列島の中に入り十一時錨泊。午後三時スチープ島燈台の沖に至り夜間射的の準備を為す。五時晩食、八時二十分より射的開始。距離七百乃至八百米、兩舷の三吋砲を以て探照燈を照らし数十回の射撃を為し十一時半終る。入浴後司令部にて司令官以下と夜食を取り一時就寝。昨來往日旗艦に講話せし所を草稿し參謀に出す。旗艦にて之を複写し各艦に分送せんとす。

三月二十三日 陰天。午前八時より射的開始の予定なりしも濃霧の為中止。依然スチープ島沖に泊す。

三月二十四日 陰。午前九時半より午後一時半に至る迄射的開始。四時、七、八吋砲を以て八九百の距離に於て射撃。二時より降雨。夜十時拔錨上海に向ふ。十一時夜食。五古一篇を作り之を扇面に書して小松參謀の室に遺留す。閩江口即事一首前田と澎湖島田中耕太郎に寄す。

馬江即事

春風吹動閩南志、來泊閩江第一関、潮落海門雲影遠、布帆斜帶夕陽還。

辭軍艦笠置之前夜書留居室贈小松參謀直幹

相識雖不久、默契見神交、同舟共濟誼、恰似黍與膠、君去室無主、維鳩入鵲巢、



遷喬意甚適，對案啓塞茅，閩山與浙水，詩思費推敲，歸帆千里夢，憶君望雲梢。

三月二十五日 陰天。午後一時前吳淞に達し仮泊，潮を待つ。軍艦津軽の出口するに逢ふ。二時半拔錨黄浦江を遡り五時楊樹浦に達し六時拔錨。七時司令官以下士官一同に告別し艦を辞し三菱の汽艇に郵船碼頭に上陸す。波多來迎。有留，波多と上車東和洋行に歸る。島田數，佐々布來訪。軍令部より四，五，六月分手当て，並に特別慰勞金三百円を送り来る。岡本源次，松倉，菅村，佐々布遠，小川子郎，武井大助，岡幸七郎，山内崑，長江虎臣，大瀧，田中耕太郎，田中兼高，香月梅外等の信に接す。陸軍大佐小沢徳平の計，並に徳永格夫人の計に接す。高洲太助の隣室に在るを聞き行て之を訪ふ。

三月二十六日 晴。昨來春寒料峭。午前河野久太郎，井手，西本，松川潔，副島綱雄等來訪。午後波多來り一，二兩月分外務省の分三百二十円を交附す。一時半有吉，金万，村上等を領事官に訪ひ，去て上海日報，増田，齋藤恒，平岡，篠崎等を歴訪。新築俱樂部を一覽し，転じて佐原を敲き歸る。夜伊藤源七，小笠原陽雄等來訪。田辺為三郎より其詩集を送り来る。

三月二十七日 晴。熊本宅，菅村，岡本，松倉，岡幸七，大瀧，荒田武郷，長江，香月，田中耕太郎，迫に致書し，小澤宣義，徳永格に其父，並に夫人死去の弔詞を發す。海軍山岡副官に慰勞金三百円の領収，並に四，五，六三ヶ月分手当の領収証を發し，別に一書を致す。前田彪，友野盛の信至る。之に復す。是日民団課金十二月至三月四ヶ月分を納む。午後波多の処に至り蔵田大尉の為に書三枚を作る。夜堤，佐原來訪。

三月二十八日 晴。蔵田大尉へ昨日の書四枚を送る。午前増田，大井両中佐を豊陽館に訪ふ。大井中佐は広東より帰朝を命ぜられし者也。有吉に名刺を留め歸る。大井，齋藤少佐，上野貞正來訪。正午春日丸に大井，村上夫婦，川本，永末等の帰国を送り上海日報に島田と談じ，午後一時四五分の汽艇にて軍艦笠置に至り司令官，艦長，參謀以下を訪ひ四時辭歸。河野，秦，阿部を歴訪し六神丸，筆を購て歸る。松川潔來訪，近日北支那に赴くに付き紹介を依頼す。漢口，天津，北京の知人に紹介の名刺を与ふ。

三月二十九日 雨。午前九時河野と馬車にて有吉領事を訪ひ其帰国を送り，十時俱樂部にて執行せる故公爵近衛篤磨公の十年祭に臨む。午後海軍大尉大中熊雄來訪。其杭州に付き深澤暹に紹介状を与ふ。東亜同文書院第十期内地旅行紀に序するの文を作る。神尾茂來訪。

三月三十日 晴。午前副島來訪。十時波多の処に至り蔵田大尉の為に揮毫し，去て佐原を訪ひ正午歸。午後波多來訪。三月分外務省の経費を受取る。長沙成泰の信至る。同文書院學生二名來訪，昨所作の序文を与ふ。二時名和艦隊司令官，飯田笠置艦長，水落參〔謀〕來訪。夜西田畊一來談，十二時及て去る。名和司令官近日帰朝に付き七古二十三韻を賦し其行を送る。

三月三十一日 晴。有留重利來訪。名和司令官の帰朝を送るの詩を書し有留に托贈す。其詩如左。

送名和第三艦隊司令官

二月春光初動日，感公盛情坐浮城，火輪破浪下申水，遙指海南千里程，  
天童松籟普陀鍾，行々聽尽辭四明，三都羅源兩勝絕，風光入神画不成，  
羅星塔下泊船夕，閩山隱々一抹橫，泛船浦畔訪故旧，鼓山迷處酒共傾，  
淹留累日興未盡，鼓浪嶼辺鼓浪行，九粵煙波何處是，□山送□香港迎，  
高閣浮海如蜃樓，繁華百年壓南瀛，一帆又向羊城飛，零丁洋上說零丁，  
回首崖山茫不見，千古興亡棋一枰，五羊城下見疆吏，主賓獻酬不計觥，  
沐猴而冠韓生笑，都督風丰何猛獍，曉出羊城賦歸歎，澎湖迢々一水平，  
曾遊二十年前地，觸目風光感慨縈，將軍台上宴散時，月照媽宮夜欲更，  
歸程遙望吳雲去，風帆無恙到淞營，忽聞召命下將軍，東望帝京返旆旌，  
會者定離雖有數，別後定知鄙吝萌，大樹遺風公獨在，不怪將壇馳盛名，  
春風嫋々吹淞水，長堤十里草菁々，好折申江一枝柳，欲寄河梁別離情。

福州前島に右の長篇を録送す。篠寄来訪。阿部野利恭，東亜同文会の信至る。夜佐々布来訪。

四月一日 雷雨。午前正金，台湾兩銀行に到り海軍よりの送金を受取り，増田に抵り東京海軍よりの旅費を受取て帰る。午後上野貞正を訪ふ。軍令部竹下少将勇の信至る。田中兼高，迫良隆に致書す。夜賀来，秦来訪。

四月二日 陰。午前上海日報社に至り銀貨を金貨に兌換す。神寄正助来訪。晡時平岡，神寄来訪。雨。

四月三日 雨。上海日報を訪ふ。午後蔵田大尉来訪。友野盛，迎英輔の信至る。迎に復書す。

四月四日 陰。午前平岡，佐原を訪ふ。内人の信至る。之に復す。増田中佐来訪。

四月五日 晴。日曜。午前七時より平岡と江湾附近に獵す。獲る所無し。正午帰る。神寄来訪。午後二時半より三井藤瀬政次郎，小田柿捨次郎の催せる園游会に列し，四時半帰る。名和第三艦隊司令官，並に新任司令官土谷光金両氏より本月八日旗艦笠置に招宴の案内状至る。佐々質直来訪。土佐屋，熊本宅に致書す。時報館より去年分残額二百円送り来る。

四月六日 陰。澤本に托し明日の便船にて皮箱三個を長崎に送り同地土佐屋に托し熊本宅に転送せしむ。熊本宅に致書す。午後軍艦笠置に名和司令官，飯田艦長を訪，三時の汽艇にて帰途軍艦宇治を訪ひ水落参謀と共に帰る。水落は本日退艦呉に転任する者なり。帰途平岡，河野を訪ふ。夜波多博来訪。

四月七日 晴天。午前八時水落参謀を山城丸に送り新任第三艦隊司令官土屋少将を静岡丸に迎へ，更に之を豊陽館に敲き帰る。大平河長沙領事亦た山城丸にて帰朝。寺中猪介来訪。香月梅外の信至る，之に復す。夜波多，神尾来談。十時辞帰。

四月八日 快晴。海軍に報告を發す。澎湖島田中参謀長に詩信を發す。午後岡幸七郎の信至る。安河内来訪。本日帰来せりと云ふ。香月に致書す。午後六時名和中将，土屋第三艦隊新任司令官の招宴に旗艦笠置に赴く。十時半辞帰。月色甚好。

四月九日 快晴。午後安河内来り明治四一年十一月より貸す所の金三千円と利息六百七十五円を返納し来る。三時名和中将，土屋司令官，飯田参謀長，後任参謀来訪。名和氏十一日帰朝に付き告別の為めなり。四時出て金子を兌換す。青年の日本社川浪理一來訪。長沙川口市之助の信至る。晚新旧司令官の送迎会に俱樂部に出席。宴中にして楼上神尾の室に平岡，波多と談じ九時帰る。皇太后陛下本日沼津御用邸に於て御病状危篤に陥らせられたりと電報有り。或は是の時刻に崩御遊ばされしに非ざるか，恐懼の至に堪へず。

四月十日 晴天。午前高洲太助来訪。川口市之助に復書す。武林洋行前島にオキスター代金七十五円を支払ふ。午前名和中将を豊陽館に訪ひ増田，田辺，淀艦長等名和氏の処に会食し，帰途波多を訪ひ帰る。寺中猪介来訪。六時篠寄の招宴に月廼家に赴く。八時半去て名和中将を訪ひ土屋司令官と三人会談，十時帰る。松川潔の信至る。夜雨。

四月十一日 晴。午前川浪理一來訪。十時領事官に村上，古谷を訪ひ，十一時名和前司令官の帰朝を送る。午後土井伊八，熊商学生加藤三男来訪。晚食後平岡小太郎を訪ふ。増田，齋藤，安河内在焉。深談十時半帰る。水落参謀高五郎長崎よりの信至る。

四月十二日 雨天。午後河野，神寄，佐々布を訪ふ。石田栄の大連行に托し立花政樹，森茂，田岡正樹に致書す。内人の信至る。之に復す。

四月十三日 陰。熊本宅に二十日帰家の予定を電報す。午前波多を訪ひ電報を托し帰る。副島来訪。田邊為三郎に致書，其の詩稿を贈りしを謝す。村瀬玄，谷川忠直来訪。

四月十四日 晴。午前増田，村上義温，西田等を訪ひ正金に銀三千元を預けて帰る。午後一時半の汽艇にて笠置に至り土屋司令官，飯田艦長，小松参謀，並に士官室を訪ひ別を叙し三時帰る。上海日報に井手，島田を敲き四時帰寓。橘三郎，齋藤少佐，村上領事，西田畊一來訪。六時帰る。岡幸七郎に復書す。神尾，波多，小笠原来訪。内人の信至る。

四月十五日 晴天。波多来訪。正午篠寄欧洲行の送別会に俱樂部に出席す。午後佐々布と大馬路に至り

毛布を購ひ、帰途大倉を訪ひ帰る。秦、西本夫人、波多来訪。前島の信至る。福州にて購ふ所の皮箱二個撫順丸にて送り来る。前島に復書す。

四月十六日 晴天。海軍に広東政況の報告を發す。迫良隆に致書す。午前小笠原來り書を求む。二紙を書して之に与ふ。阿部政次郎来訪。十時村上領事を訪ひ、去て郵船に至り一等往復切符を購ひ、増田を訪ひ転じて同文書院に寺中猪介、安河内を敲き、正午齋藤少佐の処に至り山芋飯の饗を受け八碗を吃し、三時姚文藻を訪ひ帰る。他出中島田、井手、並に土屋第三艦隊司令官、土屋參謀長、小松千人參謀、匝瑳副長胤次、佐古後任參謀良一、日比野副官正治、大尉服部正計の諸氏来訪せりと云ふ。晡時熊本県出身同文書院生徒全部来訪。河野久太郎、大中大尉、坪内大尉、有留、波多、佐々布来訪。呉水落大尉高五郎に復書す。

四月十七日 晴。波多、島田、井手、堤来訪。午後一時半篠崎の歐洲行を送る。増田来訪。軍令部に報告を發す。神尾、植田来訪。六時増田を訪ひ郵便局に至り海軍への報告を投函し、七時秦長三郎の晚餐に赴く。同座は橘、河野等なり。九時辞して東和に帰り、十一時近江丸に上る。佐々布、賀来、中村大尉忍、藏田大尉直、土井、増田、迫田、今井、古屋、高島、眞島、志保井、藤富、井手、児玉、秦、安河内、加美山、神尾、島田、波多、阿部、前島、村上夫人、青柳、小笠原、西本列来送。三菱中島虎吉と同船たり。

四月十八日 晴穩。午前五時開船。

四月十九日 雨。波濤頗高。五時五島を過ぎ夜十時長崎港に入る。九時後なるを以て検疫員来らず上陸を得ず。

四月二十日 雨。前六時半検疫終て入港。八時近江丸を辞し税関に至り検査を受け、九時雨を衝て停車場に至り小休吃茶。十一時二十分の急行にて發す。中島虎吉、中野熊五郎等同車たり。朝来春雨、沿道の山野新緑染るが如し。正午食堂車に中食す。三時六分鳥栖着。中島と別れ三時四一分八代行の汽車にて發す。車中川口虎雄に邂逅暢談時を移し、午後六時半上熊本着。河口、菅村、田中来迎。七時家に帰る。

四月二十一日 午後晴。午前大江、井口、菅村、河口を訪ひ、正午帰る。佐々布来訪。午後五時塗師屋に至り浅井寅熹、宗方儀吉夫婦に会し、夜に入て内人と共に媒介者として山田珠一息女と浅井の長男正夫との結婚式に南山楼に列し、十二時半散ず。

四月二十二日 陰。午前阿部野利恭来訪。午後浅井寅熹、田中清司来訪。二時半内人と山田珠一宅の招宴に列す。同座は宗方儀吉夫婦、浅井父子、河口、並に山田の家族なり。五時辞帰。夜井手三郎、古閑夫婦来訪。東京白岩龍平に致書、上京を報ず。友野盛来訪。

四月二十三日 陰。午前深水十八、大江岳父母、浅井新夫婦来過。松倉の信至る。之に復す。緒方、井口に致書。第三艦隊旗艦笠置に朝鮮飴五箱を送り日比野副官に致書す。午後通町に至り物品を購ひ銀行に七百元を預け、帰途井芹を訪ひ帰る。武藤翁、山田珠一來訪。明日東京に赴かんとす。夜行李を戒む。河口、古閑来り助く。

四月二十四日 微雨。午前原田隆升、菅村、藤井、井上致廣来訪。中食後内人、清子と上熊本駅に至り一時二十分の急行にて東上の途に就く。山田夫人、河口、菅村、田中列来送。午後六時門司着、直に馬関に度り七時十分の特別急行寝台車に乗ず。

四月二十五日 雨。午前五時起床。七時二十分須磨、明石を過ぐ。淡路島を煙雨微茫の中に望む。七時半神戸着。夜八時半新橋に達す。白岩夫人、並に信濃屋より来迎。雨大に至る。車を駆て南佐久間町の信濃屋に投ず。

四月二十六日 快晴。午後虎門女学館に西田敬止氏を訪ひ清子入学の事を商し、平川町に白岩龍平を訪ひ四時帰る。古城、波多、加藤、平井両中佐、田鍋列に信片を發す。夜家族と出て物品を購ふ。

四月二十七日 晴。午前理髮。出て軍令部に至り島村軍令部長、山下同次長、山岡軍令部副官、佐藤少

将鐵太郎，川原袈裟太郎，名和教育本部長等を見る。山岡副官より四月以降手当百円増給に付き四月至六月残額三百円を受取る。正午帰る。午後同文会に根津，山内を訪ひ，五時帰る。古城貞吉の信片至る。

四月二十八日 雨天。午前軍令部に至り谷口副官，秋山軍務局長，鈴木海軍次長，向大佐，山岡副官，井手，中島，八角三少佐に会し，去て外務省に松井次官を訪ひ晌午帰る。横須賀加藤壮太郎の信至る。午後白岩龍平，加藤壮太郎来訪。加藤を留て晩食を共にす。大阪島居素川の信至る。狩野直喜に致書す。

四月二十九日 晴天。午前内人と加藤壮太郎氏を小石川林町に訪ひ巖君，並に夫人と寛談，正午帰る。午後石橋藤次郎来訪。二時軍令部に山岡副官を訪て帰る。三時電車新宿に至り増田中佐の留守宅を訪ひ其母堂，並に夫人に面し，五時帰る。京都狩野直喜，上海増田，高頼，荒賀直順に致書す。

四月三十日 晴。午後同文会に山内を訪ひ，去て四谷坂町に名和中将を敲き，二時半帰る。古城貞吉来訪。夜白岩夫婦来訪。宮崎盛，菅村三之，大井五郎等の信至る。

五月一日 晴。風大にして塵埃天に満つ。午前阿多廣介，荒賀直順来訪。荒賀と出て同文会に至り花田仲之助に名刺を留め，去て四谷に田鍋安之助を訪ひ荒賀と三人中食，二時半帰る。五時半海軍軍令部幹部諸氏の招宴に築地水交社に赴く。山下軍令部次長，秋山軍務局長，山岡副官，森少将，川原大佐，大井中佐，島村軍令部長，佐藤少将，下村少佐，内藤少佐，漢那少佐，村瀬副官，黒川通幸，関田中佐，八角少佐，中島少佐，外一二人同座たり。洋饌の饗有り。八時辞出。車を駆て有楽町の帝国劇場に至り観劇。白岩夫婦の東道にて家族と共に赴く。十時半帰る。

五月二日 風大。午前田鍋安之助来訪，留て中食す。午後森茂，西田龍太，山田純三郎来訪。三時半森と共に白岩の上海行を新橋に送る。成田，郡島，大谷，土佐等に遇ふ。森，成田と花田仲之助を同文会に訪ひ，五時帰る。

升允東京に來り一家を賃して居る。現に国民党の亡命者の東京に在る者二百余人，孫文，黃興，陳其美等之が主たり。孫，陳は事を挙ぐるに急にして，黃漸進を主張し兩者の間意見一致せず。陳其美の手にて已に百余人を上海広東地方に送れり。白狼と聯絡を保つ為め凌越を戦地に派遣せり。国民党の意白狼をして持久の策を取らしめ不穩情態を持続して乗ず可きの機会を作らんとする者の如し。近日言を白狼に伝へ官軍に遇はば避けて戦ふ莫からしむ。大森に学校を設け人材を養成しつつ有り（八十人）。両広，雲南，四川地方に事を挙ぐるの目的を以て黨員を派遣せりと云ふ。

五月三日 雨。午前加藤中佐来訪。午後四時より清子を虎ノ門女学館に寄宿せしむ。五時滬友会東京支部の招待に日比谷公園内松本楼に赴く。会する者森茂，郡島，成田，根津，山内，井手，中西，根岸，柴田，三浦，角谷，大山，西川，石橋，山口以下七八人。九時散ず。

五月四日 晴天。午前八時四谷に田鍋安之助を訪ひ電車にて新宿，代々木，板橋，高田馬場，目白等の各駅を経て赤羽根稻付に川島浪速を訪ふ。家は丘陵の上に在り。眺望甚雄大なり。三人午食を共にし時事を談じ，三時辞帰に途代々木に宮島大八を訪ふ，在らず。四時半帰寓。山田珠一來訪せりと云ふ。

五月五日 晴天。午前外務省に瀬川を訪ふ，在らず。去て参謀本部に宇都宮少将，本庄少佐を訪ひ暢談。四谷愛住町に伊集院公使を訪ひ談時を移し，正午帰る。午後山田修作来訪。上海河野久太郎に致書す。

五月六日 晴。午前理髮。午後山田珠一來訪。五時紀尾井町清水谷公園皆樂園の同志の招待に赴く。途中大森松四郎，成田鍊之助と邂逅，成田と大久保公哀悼碑畔を徜徉す。漢口領事古澤に遇ふ。皆樂園に会する者根津一，花田仲之助，井戸川辰三，木村丑徳，小山秋作，中野二郎，中西正樹，田鍋安之助，井手三郎，阿多廣介，五百木良三，山内崑，宮島大八，鈴木恭謙，速水一孔，荒賀直順，成田，郡島，甲斐靖，川村景敏，小越平陸，森茂等なり。九時半散ず。

五月七日 晴。午後山崎誠一郎，角谷平次来訪。一時半内人と電車江戸川に至り更に車を賃して関口台



町二六に古城貞吉を訪ひ暢談。出て細川公爵邸を候す。途に尾越に遇ふ。堀勝延と小談。再び古城の処に帰り五時辞帰。夜清子と三人市内を散歩す。

五月八日 晴。午前青山高樹町に細川護立男を訪ひ、帰途麴町の侯爵別邸を候し白井、高岡、新美、小田野等と小談、晌午帰寓。午後田鍋を訪ひ与に出て西大久保百人町に升允を訪ふ。錢大猷と変名す。第一次革命の時勤王の兵を甘肅に挙げて成らず。蒙古に入て蒙軍を率ひ関に入らんとして又成らず。近日青島を経て来朝せる者なり。升允本年五十七歳、蒙古八旗に藉し前朝時代に陝甘総督たり。風丰俊爽意気甚壯。暢談時を移して帰る。

升允の談に拠れば馬元璋は現に固原に在り。今年六十余歳。陝甘回教徒の主教にして声望甚盛。王樹枏、馬青山、馬安良、馬福祥、張行志等と聯絡せり。端王は嘉裕関に、長庚は張家口に在り。升允が勤王軍を率て西安に向ひし時の兵力は六十營（二万五千）にして、固原提督張行志、並に馬安良の二人を以て之を分統せしめたりと云ふ。

夜吉田寿三郎、日吉又男来訪。友野盛、阿部野の信至る。

五月九日 晴。上海波多博、西本省三の信至る。之に復す。上海増田中佐に致書す。午後本庄少佐来訪。加藤中佐の信至る。児玉英蔵の信片に接す。

五月十日 半晴。日曜日。午前鈴木恭堅来訪。午後井手三郎来訪。夜古城貞吉来訪。

五月十一日 半晴。午前同文会に根津を訪ふ。中西在焉。暢談十一時に及で帰る。阿部野に復書す。午後海軍少佐中島晋、八角三郎来訪。名和中将より転居の通知至る。雨。

五月十二日 晴。午前伊集院大將を永田町二丁目に訪ひ暢談、時を移して帰る。午後郡島忠次郎来訪。□□、波多に致書す。

五月十三日 晴。午前井上清秀、根津一來訪。加藤壮太郎、阿部野に致書す。午後内人と紀尾井町清水谷公園、山王公園に散策して帰る。上海増田中佐の信至る。六時半より内人と電車小石川に至り古城貞吉宅の小集に赴く。主人、並に笠五郎、高岡富弥、櫻間等の仕舞有なり。十時半散ず。十二時帰寓。船津辰一郎の信至る。日前帰京せりと云ふ。

五月十四日 雨。名和中将、船津辰一郎に致書す。午後内人と麻布永坂町に阿多廣介宅を訪ひ、五時歩して帰る。前熊本県知事赤星典太の来着を聞き行て之を訪ふ。夜内人と虎門女学館に西田敬止を訪ひ、十時帰る。大連市原源、上海日比野大尉、増田中佐の信、並に同文会の信至る。外出中中西正樹来訪せりと云ふ。

五月十五日 雨。遠藤留吉来訪。中西、市原、田鍋、有留、同文会に致書す。午前成田鍊之助来訪、留て中食す。午後鈴木海軍次官より二十日水交社にて晚餐の案内至る。之に答ふ。軍令部に中島晋、安村中佐介一を訪ふ。夜赤星山口県知事来談。同文会より評議員会の通知至る。鳥居赫雄、田中清司の信片至る。

五月十六日 雨。中食後田鍋を四谷を訪ひ共に出て中西正樹主催の茶話会に赤城清風亭に出席す。同座荒賀、山内、田鍋、中西の四名なり。閑談五時半に及で散ず。余山内等に別れ赤城元町中西の寓に至り晚餐し、八時中西を誘て寓処に帰る。談十時に及で中西辞去。池部奎彦、松岡千寿来訪せりと云ふ。

五月十七日 雨。上海波多より四月分外務省の百五十円を送り来る。友野盛の信至る。波多に領収証を發す。午後荒賀直順を小石川水道町を訪ひ、五時帰る。夜安村中佐介一來訪。迎英輔、阿部野利恭の信至る。迎に復書す。

五月十八日 晴天。午前理髮。外務省に瀬川浅之進を訪ひ、去て同文会に山内を訪ひ帰る。熊谷直亮来訪せりと云ふ。午後三時同文会の評議員会に出席す。鍋島直大侯、徳川達孝伯、伊集院公使、伊澤修二、小山秋作、田鍋、山内、根津等出席。五時散ず。夜内人と銀座に散策して帰る。増田中佐の信至る。

五月十九日 晴。伊集院俊の信至る。増田に致書す。午前内人と小石川白山御殿町に村山正隆留守宅を

訪ひ小談。辞して植物園を觀、帰途駿河台にて洋食を用ひ南甲賀町龍名館に池部奎彦を訪ひ、転じて井上病院に船津辰一郎を訪ふ。已に退院せりと云ふ。外堀線にて帰る。副島八十六來訪。白岩龍平、波多博の信至る。波多、白岩に復書す。森茂來訪せりと云ふ。船津辰一郎に致書す。夜森茂の大連に帰るを新橋に送る。

五月二十日 雨。午前迎英輔來訪、留て中食す。午後鳥居赫雄來訪。昨日入京せりと云ふ。五時半鈴木海軍次官の招宴に水交社に赴く。有吉、赤塚の二領事及び余を客とし同座は山下軍令部次長、名和中将、秋山、佐藤、森、竹下四少将、谷口、山岡、向、百武等の大佐、加藤、安村、中島、大井、八角、村瀬、井手等の中少佐、並に の二十余人なり。九時散ず。

五月二十一日 雨。午前荒賀直順來訪。菅村三之、波多博に致書す。午後鈴木海軍次官、竹下少将を訪ひ小談。去て船津辰一郎を旭館に訪ひ、四時華族会館の同文会春季大会に出席し、七時帰る。尾越辰雄の信至る。田鍋安之助に致書す。

五月二十二日 晴。午前内人と市谷田町に佐々信一宅を訪ひ故克堂翁の神位を拝し、守田愿宅を訪ひ小談。去て上野に至り大正博覧会を巡覽し茶店に投じ中食し、鳥居赫雄を精養軒に敲く、在らず。三時半帰寓。午後六時半再び精養軒に至り鳥居の所にて武者小路公共、小村欣一、上野某等と会食し楼上より不忍池畔の第二博覧会場のイルミネーションを觀る。極て美觀たり。九時武者小路、小村等と共に辞歸。

五月二十三日 晴。午前内人と共に新宿淀橋の柏木に至り石橋藤次郎宅を訪ひ、帰途新宿にて中食。四谷に田鍋安之助を訪ひ帰る。迎英輔、竹下海軍少将勇來訪。留守中渡部正雄、平井徳藏來訪せりと云ふ。五時肥後俱樂部員の招邀に四谷三河家に赴く。細川護立男、□田、高島、鑄方、井上敬三郎、久野、杉原惟敬、橋本忠次郎、光永、浅井栄記、佐藤潤象、古城、守田、高岡、笠、水野降祿、戸田、池邊義象、尾越、黒瀬、小畑、矢野茂、久品、奴留湯、三浦喜傳、赤星 等五十人許來会。九時帰る。

五月二十四日 微雨。日曜日。是日昭憲皇太后陛下大葬の期日たり。午後天霽渡部正雄に致書す。内人、清子と芝公園に散策して帰る。

五月二十五日 晴。午前松江裁判所検事正内田司馬彦來訪。熊本人なり。正午内人と日比谷公園松本楼に至り中食し公園を散歩して帰る。午前高島義恭、平井徳藏來訪。深水十八又來訪。五時名和中将を赤坂榎坂町に訪ふ。晚餐の饗を受く。船津辰一郎亦來会。十一時辞歸。田鍋夫婦來訪せりと云ふ。

五月二十六日 晴。午前鈴木恭堅、山田珠一、大井五郎來訪。大井を留め中食す。午後鳥居赫雄、黒瀬弘志來訪。夜内人と晩翠軒に井上清秀を訪ふて帰る。尾越辰雄、内田司馬彦來談。

五月二十七日 晴。午前佐原篤介留守宅を本郷西片町に訪ひ其嚴君、並に母堂に面し、正午帰る。上野岩太郎、井出光輝、久品介善來訪せりと云ふ。午後竹下少将勇を高輪に訪ふ。河原袈裟太郎大佐坐在り。談時を移して帰る。田鍋安之助の信至る。夜吉田寿三郎來訪。午後齋藤雅言來訪。

五月二十八日 晴。午前同文会に山内、松岡等を訪ひ、山内の処に中食して帰る。田鍋に復書す。古城に致書。午後川島浪速、田口暢、高岡富弥來訪。四時清子を伴ひ品川に細川子爵邸を訪ひ夫人を候して帰る。久品介善、上野岩太郎、古川權九郎に致書す。

五月二十九日 陰。午前内人と古川權九郎を浅草象潟警察署に訪ひ、晌午辞出。浅草觀音背後の万盛庵に入り蕎麦を吃し、雷門より一直電車にて帰る。午後内人と高島義恭氏招宴に青山高樹町の邸に赴く。同座は安達謙藏、浅井栄記、三浦喜傳、奴留湯恕作等にして、上海より帰來せる高島醇亦坐に列す。席上独立、雪山、朱陵、玉山等の真蹟を覽、九時半辞歸。増田中佐の信至る。

五月三十日 雨。午前宮島大八來訪。午後出て理髮。六時田鍋の招邀に赴く。同座は升允、川島浪速の二人なり。宮島亦來会。九時半散ず。

升允は蒙古廂黃旗に属し察哈爾人に係はり本年五十八歳なり。二十年前俄国使館の参贊として露京

に在る。三年欧洲各国を歴遊せりと云ふ。

市原源二郎、船津、黒瀬弘志、小畑惟晴等の信至る。他出中加藤壮太郎、井上清秀来訪せりと云ふ。  
五月三十一日 晴天。午前八時半より神田猿樂町宝生会に至り能楽を観る。内人、清子を伴ふ。藤野濤平の竹生島、野口政吉の実盛に宝生新の脇、櫻間金太郎の桜川に、東條照映の脇、松本長の邯鄲に宝生の脇、近藤乾三の黒塚等を演ず。宝生九郎地頭たり。五時半終る。清藤、池部来訪せりと云ふ。夜西田敬止夫妻来訪。

六月一日 陰。朝八時半赤星山口知事の帰任を新橋に送る。午前芝銀行に至り上海送来の四月分百五十円を受取る。午後内人と同文会に至り松岡を誘ひ二三の家屋を見て帰る。五時四谷三河家の会に赴く。船津辰一郎、瀬川浅之進、宮島大八、鈴木恭堅、荒賀直順、速水一孔、柴田同座たり。九時半散ず。

六月二日 雨。午前池部奎彦来訪。午後小越平陸来談。高橋謙着京の報至る。午後五時半より三河家の同郷会に赴く。宇土細川子爵、菅正懿、尾越、黒瀬、小畑、内海博武、安富、永原、竹内、金子来会。散後岡本源次、守田愿の楼下の一室に在るを聞き尾越等と行て之に会し、十時散帰。岡本は一昨来着せりと云ふ。宮島大八の信至る。

六月三日 晴天。午前九時井芹経平を神田淡路町関根屋に訪ふ、在らず。高橋謙を美土代町尾美館に訪ふ、亦た在らず。山内を同文会に訪ふ、在らず。午後軍令部に至り副官部より七、八、九ヶ月分手当九百円を受取り四斑に竹下少将、伊集院俊を訪ふ。竹下少将、東郷大将の書二枚を贈らる。伊集院中佐は昨日着任せる者なり。帰途外務省に武者小路公共、瀬川浅之進を訪ひ、四時帰寓。清藤に復書す。

六月四日 晴。朝食前井芹を関根屋に訪ひ、去て細川侯爵を伺候し三浦、柏原等と会晤。帰途古城宅を訪ひ内幸町旭館に高橋謙を訪ふ。田鍋在焉。正午帰。午後芝公園に至り家を租して帰る。松岡千壽、伊集院俊に致書す。

六月五日 雨。深水十八に弔詞を發す。其母堂の訃に接せしを以てなり。午前荒賀直順、高橋謙来訪。午後松岡千壽来談、共に出て昨日租する所の芝公園の家屋を見、三時半築地同気俱樂部に至り清浦子爵に面し、五時帰る。夜内人と銀座博品館に至り物品を購て帰る。

六月六日 晴。午前中西正樹、山内崑来訪。午後三浦喜傳來訪。四時升允の招邀に両国千歳町の大雅楼に赴く。本月三日此地に移りし者。楼墨江に臨み風景甚饒、豕鴨料理の饗有り。同座は川島浪速、宮島大八、郡司成忠、鈴木誠作、湯原桃雄、速水夫人等なり。十時散ず。川島と共に帰る。月光如昼、夜色極佳。

六月七日 晴。日曜。午前高橋謙来訪。有蘭生来訪、留て中食す。午後内人と市中にて家具百余円の額を購ふ。古城貞吉来訪せりと云ふ。夜三人博品館に至り家具類を購ふ。

六月八日 晴。午前加藤中佐、内海博武来訪。十一時より信濃屋を辞し新租の住宅芝公園十一号八番地に遷移す。松岡千壽来り斡旋す。是日房東安達宅に三ヶ月分敷金百二十円を送る。夜雨。腹中有異、心気不舒。

六月九日 雨、九時晴。午前松岡来訪、東京に寄留の手續を為す。晌午虎門女学館に至り清子通学の手続を了し、井上清秀を一訪して帰る。心気不佳、臥床静養。

六月十日 晴。伊集院俊、宮島、田鍋、古川、菅村に致書す。井上清秀来訪。茶器を贈る。大江、河口、田中、尾越、古城に転居の報知を發す。午後中西正樹来訪。京都狩野に致書す。夜内人と出て物品を購ふ。

六月十一日 晴。午前理髮後軍令部に山下次長、竹下少将、山岡副官、伊集院、井手、中島、八角諸氏に別を叙し、海軍省に谷口副官、名和中将に別を告げ、去て同文会に至り更に四谷に赴き伊集院公使を訪ふ、在らず。転じて高島義恭を訪ひ小談。去て九段坂上に尾越辰雄宅を訪て帰る。五時より対支

聯合会に紅葉館に出席す。会者八十余人。九時帰る。

六月十二日 晴。京都の狩野、大阪鳥居に西下の日期を報ず。午後雨。午前内人と芝公園を散策す。

六月十三日 半晴。菅村に西下の日期を報ず。細川侯より明日築地精養軒に午餐の御案内有り。午後白岩夫人来訪。三時より梅鶴を伴ひ三越に至り物品を購て帰る。六時同文会の招宴に紅葉館に赴く。細川侯爵以下柏原、江藤哲蔵、田鍋、高橋謙、小山秋作、原口聞一、根岸佶等同座たり。九時散ず。夜半雷雨。

六月十四日 朝雨、午前晴る。是日東京を辞せんとす。行李を戒む。午前信濃屋、井上清秀、西田敬止を訪ひ別を告げ、十一時半細川侯爵の招宴に築地精養軒に赴く。同座は護立男爵、宇土細川子爵、清浦、内田両子、宗像、永田以下熊本出身の人物七十余人。洋餐の饗有り。二時辞帰。六時十分芝公園の僦居を出て電車新橋に至り七時の汽車に乗ず。名和中将、竹下少将、西田敬止、田鍋安之助、熊谷直亮、八角少佐、松岡千寿等来送。三井の高橋と同車たり。

六月十五日 晴。午前七時二十分京都着。車を賃して田中村に至り狩野直喜を訪ひ入浴、閑談時を移し九時半辞出。車を駆て大徳寺高桐院に高見祖厚翁の病を問ふ。病勢沈重なりと雖ども意気尚壮、談笑自若たり。内藤儀十郎、佐々未亡人、其他看護者甚多。中食後翁に告別して三条の小川亭に至り井手三郎と小談。三分〔時〕十分の汽車にて大阪に向ひ四時朝日新聞社、鳥居、西村を訪ひ三人魚岩に会食。七時車站に至り両子に分れ八時半の特別急行にて発す。石井徹と同車、西宮に至り相別る。深野志摩来見、現に此地に住すと云ふ。

六月十六日 雨。前五時起床。汽車已に広島を過ぐ。九時四十分馬関着。降雨如注。碼頭にて書院出身の岩城生に邂逅す。門司に度り十一時半の汽車にて発す。三時半鳥栖着。汽車を換へ午後六時半上熊本着。田中清司、菅村三之、古閑信夫来迎。二人を留て晩食を共にす。波多博の信、並に五月分百五十円を送り来る。

六月十七日 梅雨陰鬱。午前尚綱校、鎮西館、河口、田中、山田、麻植を歴訪す。午後郵便局に至り上海よりの送金百五十円を受取り預金通帳利子記入を依頼し、井場、井手、井芹、並に近隣を歴訪す。東京の宅に着熊を報ず。午後不破昌材来訪。武藤翁を訪ふ。明日山田の上京に托し貴重品を東京の宅に送る。松倉、並に東京留守宅に致書す。

六月十八日 雨。迫良隆に致書す。波多に復書す。午前内海博武、不破昌材来訪。阿部野、井芹を訪ふ。井場氏来訪、中食。山田珠一の上京を上熊本に送り松倉を春日に訪ひ、五時半帰る。浅井寅喜の信至る。夜古閑信夫、藤野乱、河口を訪ふ。田中清司、武藤翁、佐々干城氏来訪せりと云ふ。

六月十九日 雨。朝藤野乱、河口介男を訪ふ。浅井寅喜、並に東京留守宅に発信す。午後菅村、長江を訪ふ。石原醜男来訪。

六月二十日 雨。鬱陶しき事甚し。東京名和中将、竹下少将、田鍋、山内、松岡に致書す。西田敬止、並に内人に致書す。宝妻寿作来訪、長崎鶏卵糕一箱を贈る。佐野直喜の信至る。之に復す。夜大江を訪ふ。

六月二十壹日 雨。日曜。鳥居、狩野、古城に致書す。午前在家。午後阿部野を訪ふ、在らず。喜多能楽堂に至り観能。上田茂二、竹田菅雄等に遇ふ。五時帰る。不破、松木、河口来訪。浅井の信至る。東京内人に致書す。

六月二十二日 雨天。午前八時の頃天色晦暝、大雨如注。午後阿部野、友野来訪。内人の信、並に上妻の書至る。夜河口を訪ふ。

六月二十三日 微雨。午後内海博武来訪。四時宝妻を宝来屋に訪ふ。夜菅村来訪。内人の信至る。

六月二十四日 雨。

六月二十五日 半晴。午後白石卯一、宇野貞度来訪。山内崑の信至る。之に復す。夜古閑宅を訪ふ。

六月二十六日 微雨。午前池部奎彦来訪。右田以徳の信片至る。藤森茂一郎来訪。六月迄の利子六十円



を交付す。午後肥後銀行支店に至り預金を為して帰る。夜古閑信夫を訪ひ電気株券の記入を托し、去て河口を敲き靴の注文を為し帰る。東京内人に致書す。宇土浅井に致書す。上妻に復書す。

六月二十七日 微雨。午前外出。土倉五郎に致書、珠数を小包にて送致す。

六月二十八日 晴。午前より東京へ送るべき家具の荷造を為す。河口来り助く。古閑信夫来訪。午後園田郭六妻の葬儀に浄行寺に列す。浅井寅喜、佐々布遠来訪。夜井口忠、菅村来訪。東京内人に致書す。

六月二十九日 晴天。午前河口、菅村来り荷造を助く。総数八個を通運に托し東京宅に送る。上海波多博の信至る。

六月三十日 晴。午前篠原正夫来訪。午後内藤儀十郎氏来訪。菅村三之を留て晩食す。夜永原来談。内人の信片至る。内人に致書す。是夜より下女二人を東京に向け出発せしむ。

七月一日 晴天。寒暑表九十四度。午前理髪。帰途鎮西館を訪ふ。浅井の信至る。晡時雷雨。熱気如烘。内人に致書、薩摩行を報ず。夜菅村来訪。

七月二日 晴。午前七時五十分の汽車に熊本を發し薩州に向ふ。喰田勇八と同車、八代に至り相別る。十二時半人吉着。二時半矢嶺隧道を過ぎ吉松に至る。宮崎線此に分岐す。国分を過ぐ。日当山温泉、駅を距る十余丁の山下に在り。丁丑の戦事勃發の時老西郷入浴の処。加治木に至れば大野謙次郎来乗。天字山は駅の附近に在り。六時二十分鹿児島着。大野の宅に投じ休憩後迫良隆を訪ふ。

七月三日 晴。午前九時川内太平橋を度り八幡山に登る。石燈三百級、千年の樟檜翳然天を蔽ひ深林迷邃、心気如洗。神祠に謁し納涼。十一時帰寓。

七月四日 晴。午前五時二十分の汽車にて南薩に赴かんとす。時間及ばず。八時二十分發。沿道を視察し十時半鹿児島駅着。大野と出て浄光明寺に至り南洲翁以下の墓を展し新築の祠堂を拝し画信片を買ふ。正午大野、津田武の招にて城山下の雀鳴館に洋饌を会食し二時帰寓。三時上車。山下町照国神社附近に花田仲之助、称寝恭三を訪ふ、皆在らず。去て岩寄谷に至り南洲翁終焉の地、並に洞穴を見る。洞幅員一坪許、側南洲翁洞中記念碑有り。四時帰寓。東京名和、竹下、伊集院、内人、清子、上海平岡、増田に信片を發す。晩食後大野と祇園の洲に散歩す。明月一痕錦江湾を隔て桜島を眼前に望む。夜景甚佳。去て清水馬場に桐野利秋氏の故居を訪ひ、利秋の愛佩せし金、銀装の大小刀及び新選組の刺客二人を瞬間に斃せし名刀、並に明治六年三條公に上りし意見書、山鹿陣中より母堂に与へし書翰、老西郷より桐野別府へ与へし信書等を一覧し、月に歩し仁王水を一掬して帰寓。津田武来訪せりと云ふ。

七月五日 晴。朝一番にて大野、川内に赴く。津田来訪。大野宅を辞し七時十五分の急行にて發す。午後一時十分熊本着、松倉を春日に訪ひ、三時半家に帰る。内人の信、佐野直喜、内海等の書翰に接す。内人に復書す。

七月六日 晴。午前内海博武来訪。共に出て山田、小早川、平山等に会し河口を訪ひ帰る。佐野直喜、宮島大八、中澤武兵衛、濱野一郎、井上清秀、大野謙次郎、津田武、土佐屋に致書す。夜宇野貞度、柴田常三郎、北御門泰次郎来訪。

七月七日 晴。午前内海来訪。鳥居、林市藏連名の信至る。之に復す。晩古閑信夫を訪ふ。

七月八日 晴。大江を訪ふ。午前内海を峽宅に訪ひ東京留守宅送りの玉器、煙草盆を托し、帰途久野を訪ひ千原盾臣の扇面、並に名和長年背負後醍醐帝の画を譲り受て帰る。宇野貞度来訪。千原盾臣の書を贈る。松倉の信片至る。名和海軍中將に致書、久野より譲り受たる画を郵送す。上海波多、増田に致書す。山口県知事赤星典太に致書す。五時宇野と内藤儀十郎翁を訪ふ。石原に致書す。

七月九日 晴。午前岡本源次、山田珠一、古莊頼来訪。迫良隆に致書す。午後宝妻来訪。其上京に托し茶瓶を東京宅に送る。内人に致書。浅井に復書す。夜永原虎男を訪ひ、去て宝妻を小沢町に敲き帰る。内人の信至る。

七月十日 晴。午前井場熊喜氏、並に光永眠雷来訪。鳥居、狩野に信片を發す。是日宇野の周旋にて村

上彦四郎義錦旗を奪還するの画一幅を購入す。

七月十一日 晴。土佐屋に致書す。迫良隆の信至る。夜菅村来訪。

七月十二日 晴、熱気如燬。午前永原虎雄、田中清司、篠原正夫、成泰静雄来訪。永原に紫檀卓子一個を譲り渡す。田鍋安之助に致書す。午後上車大江、古莊嘉門翁、井場、井芹、田中、佐々布、山田、河口、古閑、井手友、藤井、並に近隣を歴訪、別を叙す。東京宅、井手、鳥居に致書、支那行を報ず。井芹経平、古閑信夫来訪。古閑に肥後銀行預金証書二枚を預け保管を依頼す。赤星山口知事の信至る。

七月十三日 晴。是日啓行支那に向はんとす。午前理髪。銀行に至り金子を受取て帰る。午後四時五十六分上熊本発の汽車に乗ず。佐々布、井手、光永、河口、菅村、田中等来送。七時二五分鳥栖着、換車九時五十分武雄に至り停車時を移す。十一時早岐着。疲労甚し。下車旅館に投宿す。

七月十四日 晴、熱甚。心気不舒。午後三時二十一分の急行にて長崎に向ひ、午後五時十分着土佐屋に投ず。

七月十五日 晴。近江丸の出口一日延期す。是日盆会に当り山上の墓地燈火甚盛。

七月十六日 晴。午後三時土佐屋を出て税関碼頭に至り三時半の汽艇にて近江丸に上る。四時開船。齋藤上海副領事と同船たり。海上平穩。

七月十七日 晴。海平不波。船頭閑坐、涼味蘇人。

七月十八日 晴。平穩。午前六時吳淞口に入る。七時半上海着。波多、児玉、鳥田、西田等来迎。東和洋行に投じ波多に朝食し、出て有吉、村上、西田、増田を訪ひ帰る。河野、橘来訪。河野を留め中餐す。秦、波多、佐々布、佐原、山崎九一、神尾、西山来訪。夜鳥田来談。名和中将、海軍々令部、吉田寿三郎、村上正隆、田鍋安之助、瀬上恕治、吉田徳三郎、富田安兵衛、小沢宣義等の信に接す。

七月十九日 晴。午前津田静枝、増田、橘三郎、齋藤恒を豊陽館に訪て帰る。午後増田と姚文藻、鄭孝胥を訪ふ。帰て更に河野、佐原を敲き、七時神尾茂の招邀に日本人倶楽部に赴く。西饌の饗有り。十時帰寓。

七月二十日 晴天。東京留守宅、伊集院俊、菅村三之に致書す。午前阿部洋行主阿部政次郎来訪。午後西本、津田大尉、新任副領事齋藤和、官補村上義昌来訪。松岡医院に至り齒療を為す。七時増田の招宴に倶楽部に出席す。同座は李瑞清、鄭孝胥父子、沈子培、姚文藻、並に齋藤、佐原、波多、西本、津田、神尾等なり。十時散ず。

七月二十一日 熱気如烘。午前九時半河野夫人、村上夫婦の帰国を近江丸に送り上海日報社に小談帰る。副島、齋藤少佐、寺田等来訪。正午齋藤延より六三園に招かる。熱甚しきを以て辞して行かず。午後波多を訪ふ。迫良隆の信、並に内人の信二通と鳥居、林、狩野等、山端平八よりの信片至る。

七月二十二日 熱甚。寒暖計百〇二度。午前波多来訪。午後二時増田中佐、津田大尉の北游を送り、帰途秦長三郎を訪ふ。今井邦三、河野久太郎来訪。河野と同車月廼家花園の小集に臨む。同座は宮坂九郎、平岡小太郎、橘、河野等なり。盤桓多時十時に及で散ず。夜気稍涼。佐野直喜の信至る。

七月二十三日 晴。炎熱依然。午前安達隆成、井手照人来訪。井手三郎の信至る。佐野直喜、石原醜男、東京内人、並に迫良隆に復書す。村上正隆に復書す。富田安兵衛、吉田健三郎に復書す。夜今井を訪ふ。

七月二十四日 晴。午前上海日報社を訪ふ。午後波多来訪。佐原宅に晩食し九時帰る。松倉温泉岳よりの信片至る。

七月二十五日 晴。午後波多、児玉英蔵来訪。夜佐々布来訪。

七月二十六日 陰、風強。午前九巖来訪。午後理髪。六時より鳥田と波多の処に至り鰻飯を吃す。十時帰る。雨。

七月二十七日 雨。涼味人に可なり。午後佐々布より荔枝一簍を贈り来る。味甚美。西本来訪。小笠原

陽雄の信至る。

七月二十八日 晴、熱甚。午前橘、齋藤恒、秋田を訪ふ。午後宮坂九郎、遠藤留吉、西本来訪。波多病を聞き往て之を訪ふ。

七月二十九日 晴。午前波多病を問ひ、去て佐々布、遠藤留吉、宮坂九郎を訪ひ帰る。大江、河口、田中、古閑、西田敬止に暑中見舞を發す。夜河野を訪ふ。土井来会。十時帰る。

七月三十日 晴。海軍山岡副官、伊集院中佐に發信す。迎英輔に信片を發す。前島真に發信す。東京山内崑に致書す。午後松倉に復書す。波多に七月分百元を贈る。佐原より案内有り。橘、河野等同座たり。

七月三十一日 晴、熱甚。午前有吉、古屋、西田、上海日報を訪ひ帰る。緒方、阿部野、坂本巴屋よりの信片至る。村上貞吉より球磨川の鮎五尾を贈り来る。本日肥薩の游より帰来せりと云ふ。帰途波多病を訪ひ佐々布宅に小談、帰る。

八月一日 晴。午前齋藤少佐来訪。内田友義旅順よりの信至る。六時半より新利洋行平岡、宮坂等の招宴に月廼家花園に赴く。同座は齋藤、江崎、河野、秦、橘、佐原以下十余人。十時散ず。

八月二日 晴。日曜日。午後菅村夫婦の信、並に中西重太郎の訃音至る。松倉温泉岳よりの信片至る。佐原来訪。奥太利、塞耳維との開戦に關聯し露独兩國亦た宣戦を布告し、歐洲大亂の機愈々動けり。佐々布の処に至り山芋汁の饗を受け、九時帰る。

八月三日 晴。松倉の信片、並に北京吉田、増田次郎、増田高頼、津田静枝、岡田晋、秋山の信片至る。松倉、吉田、岡田に復す。伊集院中佐に致書す。午後宮坂、橘、遠藤の北京行を車站に送る。姚文藻、副島綱雄来訪。夜佐原を訪ふ。晡時雷雨。

八月四日 陰。涼味可掬。松川潔、高橋謙の信至る。高橋に復す。内田友義、小笠原に復書し中西榮吉に其弟重太郎の弔詞を發す。午後山口昇来訪。夜日比野大尉正治、有留重利来訪。

八月五日 雨。午前土屋第三艦隊司令官、小松參謀来訪。旗艦は昨日入港せりと云ふ。佐野、葉室、吉田寿三郎の信至る。午後日比野大尉を豊陽館を訪ひ帰る。内人に致書し、迫に復書す。夜俱樂部に至り琵琶を聴く。

八月六日 陰。佐原来訪。歐洲の風雨愈々急にして昨日に至り英獨の国交關係断絶せり。午後副島来訪。出て姚文藻を訪ふ。夜佐々布を煩はし報告を淨写す。風雨。

八月七日 晴。海軍に報告を發し旗艦に写を送る。第三艦隊司令部より台湾渡航の紀念として紅茶二箱を贈り来る。河野来訪。午後副島来訪。一時半の汽艇にて旗艦對馬に土屋司令官を訪ひ、三時帰る。帰途上海日報、波多を訪ふ。佐々布来訪。

八月八日 晴。大分波多重雄に其長子の病状を報ず。午後近江丸に日比野大尉の帰国を送る。海軍に報告を發す。高洲太助来訪。午後姚文藻を訪ひ其二男を高洲管下の揚州塩務局に周旋す。二時帰る。有留重利、高洲太助来訪。夜瀬上恕治来訪、杭州領事館に赴任する者なり。八時半俱樂部に至り研究所出身者と会し故荒尾精建碑の事を商量。十一時半帰。

八月九日 晴。午前神崎正助来訪。海軍に報告を發し、菅村夫人に致書、盆会の時宇土に送金を托す。河口、田中、古閑、堤嘉三、今井嘉平の信至る。午後伏見艦長園田繁喜来訪。熊本人なり。午後出て園田、瀬上、波多を訪ふ。夜島田来談。

八月十日 晴。葉室、吉田寿、堤嘉三、今井嘉幸に復書す。副島来訪。夜河野を訪ひ寛談、十時帰る。姚文藻の信至る。

八月十一日 晴天。午前佐原、山口昇来訪。午後波多重雄に發信す。内田康哉、伊集院公使、北京吉田大佐、揚州高洲太助に致書す。増田中佐、津田大尉、澤本良臣来訪。増田は本日北京より帰来せる者也。村山正隆、増田の信至る。

八月十二日 晴天。午前郵便局、増田、津田を訪ひ、齋藤少佐に抵り其嚴君の死を弔し、帰途佐原、波

多を訪ひ帰る。北京亀井陸良に致書す。村山正隆に復書す。西本来訪。夜河野来談。

八月十三日 晴。白岩龍平、池部奎彦、東洋協会の信至る。午前副島、宝妻来訪。午後宝妻を訪ひ、帰途齋藤を敲き帰る。神寄来訪。夜瀬川浅之進を六三亭に餞す。今夕漢口総領事に赴任する者なり。同座は有吉、増田、西田、木幡、江崎、河野、三菱、須賀等なり。十時帰る。

八月十四日 晴。白岩、池部に復書す。午前齋藤、上海日報を訪ひ帰る。午後河野来訪、共に出て有吉を訪ひ、六時河野宅に至り晩食し、十一時帰る。

八月十五日 晴。小山一平新嘉坡より来着、銀三十元を借て去て、午後副島来訪。小松参謀に致書す。午後津田大尉、上海日報を訪ふ。午後姚文藻、並に其二男元綸、副島等来訪。松倉、波多重雄、徳丸未亡人の信至る。夜島田儀市来訪。青島攻撃の期切迫の爲め本日撤退し来れりと云ふ。揚州高洲太助の信至る。

八月十六日 晴。日曜。午前島田儀市を訪ふ。午後佐々布、高島来訪。三時半税関埠頭に津田静枝の広東行を送る。夜河野来談。姚文藻の信至る。

八月十七日 晴。午前副島来訪。十一時姚文藻の招宴に赴く。同座は沈子培、鄭孝胥、王叙庸、増田等なり。三時帰る。

帝国政府は本月十五日附を以て独逸国に向ひ最後の通牒を發し、日本及び支那海に在る独逸艦艇の退去若くは武装解除を要求し、一面には膠州湾の租界地全部を支那に還附する目的を以て九月十五日を限り無償無条件にて日本官憲に交附すること。

右の勧告に対し、八月二十三日正午迄に無条件にて応諾の旨回答を受領せざるに於ては帝国政府は其必要と認ずる行動を採るべきことを声明せり。北脇来訪、県人会の補助五元を要求す。之に与ふ。高洲の信至る。木下温知来訪。夜佐原、波多を訪ふ。島田儀市来談。

八月十八日 晴。朝領事館に至り七月分手当を受取り、深澤暹を豊陽館に訪ふ。杭州より長沙領事に転任する者なり。帰途神尾の病を訪て帰る。第三艦隊司令官より明日晩餐の案内至る。揚州高洲に復書す。午後佐原、増田、船津来訪。内人、菅村夫人、野満四郎、姚文藻、軍令部の信至る。夜伴某、神寄正助来訪。

八月十九日 晴天。内人に復書す。石原醜男の信至る。午後長門正清、深澤暹、齋藤恒来訪。六時半第三艦隊土屋司令官の招宴に旗艦対馬に赴く。十時散ず。

八月二十日 晴。姚文藻父子紹介状を揚州高洲に送る。姚の二男元綸高洲の配下塩務稽核所に赴任するを以てなり。午前姚を訪ふ。宮島大八、白岩龍平に致書す。午後深澤、河野を訪て帰る。齋藤少佐、木下温知来訪。日比野大尉正治、岡幸七郎、友野盛の信至る。

八月二十一日 晴。北京亀井陸良の信至る。東京西田敬止に致書。烏龍茶一箱を幸便にて送致す。午後軍艦に至らんとし汽艇乗込み不便の爲め中止し、増田を訪ひ帰る。河野来訪、共に其寓に至り晩食す。八時半河野を辞し有吉を西茂路に訪ひ、十時帰る。

八月二十二日 晴天。午前午前九時河野、有吉と旗艦対馬に至り告別し、帰途河野と小談、帰る。午後一時狄楚青来訪。三時有吉を訪ふ。成松静雄来訪。本日來着せりと云ふ。五時有吉領事来訪。松倉、小山一平、賀来、迫の信至る。

八月二十三日 陰。午前狄来訪。午後有吉を訪て帰る。成松、木下来訪。夜木幡恭三、狄楚青来訪。本日正午より日本と独逸との關係断絶し交戦状態に入れり。是日午後六時独逸国に対し宣戦の詔勅を發せらる。

八月二十四日 晴天。午前有吉領事、上海日報、河野を訪ふ。澤本、副島来訪せりと云ふ。午後山口昇来訪。加藤中佐の信至る。成裘来別、本夕出發湖南に赴く也。夜伴幸次、佐々布、賀来来訪。日本軍是日より青島の独逸軍を攻撃す。

八月二十五日 陰。午後微雨。齋藤少佐、増田中佐来訪。佐原を訪ふ。漢口瀬川、岡、橘、角田等連名



の信片至る。夜河野来談。

八月二十六日 晴。午前副島来訪。夜河野来訪。

八月二十七日 晴。午前領事館に有吉を訪ひ古谷の処より本月分二百円を受取り、正金銀行に至り参千弗を定期に引□し更に二百余弗を預入し、上海日報より波多の処に至り本月分百元を渡し帰る。山内崑の信至る。八時半河野に抵り与に出て、西門子の買弁菅尚華を訪ひ支那新聞の事を商量して帰る。副島来訪。

八月二十八日 半晴。河口介男の信片至る。午前倶楽部に佐々布を訪ひ、帰途佐原を敲き帰る。午後齋藤少佐来訪。細川侯爵病氣危篤の報に接し浅井、三浦に宛て御見舞状を發す。夜姚文藻、永井生を伴ひ揚州より帰途来訪。

八月二十九日 晴。高洲太助に致書す。午後増田、佐々布来訪。佐々布に托し報告を淨写す。佐々布を留め晩食す。

八月三十日 晴。日曜。前八時河野の帰国を送り、九時神崎の処に至り射的場に至り擬放鳥射的を為し、十一時帰る。海軍に報告を發す。柿沼某来訪。午後増田、佐々布、副島等を訪ふ。二十六日細川護成侯薨去の電に接す。

八月三十一日 晴天。細川侯家令に宛て侯爵薨去の唁詞を發す。午前姚文藻を訪ひ、去て増田、齋藤を敲き帰る。午後井手照人、副島来訪。五時半より射的場に至り神崎、神津と射的、六時帰る。内人の信至る。

備忘

世界に於ける独立国（半独立或は保護国をも含む）の数五十五にして、此中白人種の耶蘇教系に属する四十四ヶ国、他の十一ヶ国有色人種にして非耶蘇教国なり。世界に於ける種族競争の大勢上注意すべき現象なり。

満洲の人口六百万人、漢人約三億万人。

伊達政宗征韓役凱旋之時□□□□□□後園賦詩紀其事

絶海行軍帰国日、鉄衣袖裏裏芳芽、風流千古余情操、幾歳閑看異域花。

醉余口号

馬上少年過、世平白髮多、殘軀天所許、不樂復如何。

年内立春。年の内に今日立つ春のしるしとて軒端に近き鶯の声。

八月十五夜松島にて。心なき身にだに月を松島や秋の最中の夕暮の空。

関の雪。さゝずとも誰かハ越えん逢坂の関の戸埋む夜半の白雪。

伯夷叔齊を詠ぜし詩歌文章摘要

微二子、乱臣賊子、接迹於後世矣（韓退之伯夷頌）、高踏遠攀、正君臣之分於千載、噫微斯人吾其歎焉（三浦梅園）、倫理重而軀命輕、目中寧有虎賁兵、他年餓死西山志、便是当初叩馬情（松陰）  
ひとりのみ世にそむきつる心こそそむかぬ道の心なりけれ（橘諸兄）、蕨とる人をするべにわけゆけばいかにさかしき道もまよはぬ。山ふかくをりしわらびハ万世の道のしをりとなりにけるかな（渡忠秋）

をもひきや蕨にあらぬ梅が枝を折りて首陽の人をしるとハ（蕃山）

乾坤何物尤清絶、数点梅花月一痕。

九月一日 晴。鳥居、井芹、佐野、石原、加藤、井手、岡、内人に致書す。午前西本来訪。齋藤少佐来談。午後佐原来訪。五時より射的に赴く。夜今井来訪。

九月二日 陰。軍令部に報告を發す。午後理髮。増田を訪ふ。晡時神尾茂来訪。

九月三日 晴雨無定。正午獵友会の午餐に倶楽部に出席す。午後副島来訪。九州日々小早川に致書す。  
長沙村山正隆の信至る。夜神尾、今井来訪。

九月四日 晴。川本静雄、野満四郎に致書す。池部政二来訪、本日長沙より帰来せりと云ふ。美津家池部奎彦に致書す。夜今井、佐々布来訪。

九月五日 晴。前十一時池部政次夫婦の帰国を送る。午後井手照人、渡辺俊郎、高島醇来訪。夜佐々布来談。

九月六日 日曜。微雨。是日上海獵友会発会式挙行の筈なりしも天候不良の為め挙式を中止し単に射的の競技を為し、正午散ず。是日会員集る者二十余人。佐々布の処に中食して帰る。夜佐原を訪ふ、在らず。波多の処に小談、帰。

九月七日 雨天。姚文藻来訪。宮島大八、松崎奎男、成松静雄の信至る。宮島に復書し海軍に致書す。夜井手照人、今井邦三を訪ふ。風雨。

九月八日 晴、風強。午後佐原を訪ふ。二時帰る。齋藤少佐来訪。

九月九日 半晴。午前上海日報を訪ふ。午後井手照人来訪、本日帰国すと云ふ。午後井手を送る。二時帰る。有吉領事来訪。姚文藻、白岩、升允、速水、迫等の信至る。

九月十日 雨天。午前速水一孔に復書す。松倉、河口介男に信片を發す。岡幸七郎、前島真の信至る。岡に復書す。同文書院生植村久吉来訪、晩食後去る。

九月十一日 風雨甚暴。海軍より十、十一、十二ヶ月分の手当送来。領収証を發し台湾銀行に至り右の金子を受取り預金と為し江崎と小談、帰途今井を訪ふ。神尾茂来訪、明日の船にて一時帰国すと云ふ。

九月十二日 快晴。午前副島来訪。姚文藻を訪ふ。正午管趾郷来訪。宮島と升允に劉廷琛の意見書を送る。午後神尾を訪ひ別を叙し、去て上海日報、増田を訪ひ帰る。熊本出身同文書院学生二名来訪。内人の信、並に鳥居、副島八十六、有留、名和中将の信至る。内人に復書す。夜安河内、佐々布来訪。

九月十三日 晴天。日曜。午前八時木幡を訪ひ茶話。九時より射的場に至りクレー射的を為し正午神崎の処に中食し午後又た出て射的。朝七十五発の多きに及び六時散ず。土井伊八来訪せりと云ふ。

九月十四日 晴。前七時根津一を迎ふ。同文書院新入学生来着。理髪して帰る。島田儀市、管趾郷来訪。管と有吉を訪ひ正午帰る。午後古閑信夫、緒方二三、海軍の信至る。同文書院熊本出身の新入生四名、並に二年生二名来訪。五時月廼家花園の旧研究所出身者の会合に臨む。土井、秦、澤村、青木、根津、余の六人なり。十時散ず。本月十一日は日清貿易研究所の開学後満二十五年に当りしを以て此の小集を催したるなり。

九月十五日 晴天。午後村上宅を訪ひ、帰途佐原に抵り四時〔帰〕る。有吉領事来訪。

九月十六日 晴天。東京留守宅、古閑信夫に致書す。午前増田、上海日報を訪ひ十一時島田儀市夫婦の帰国を送る。午後齋藤少佐、村上修、副島等来訪。池部奎彦、川本静夫、中松戒三、井手照人等の信至る。七時木幡恭三の晩餐に赴く。同座は江崎真澄、村上貞吉、石崎良二等なり。十一時帰る。

九月十七日 晴天。午前根津一氏来訪。香月梅外の信至る。之に復す。阿部野、緒方に致書す。午後郵便局、上海日報、齋藤を訪ひ帰る。中松戒三に復書す。夜副島を訪ふ。

九月十八日 晴。午前波多来訪。橘三郎より其嚴君の訃を伝ふ。三津家傳之、岡本豊喜の信至る。橘に弔詞を發す。夜佐原を訪ひ小談、帰途波多を敲き帰る。

九月十九日 晴天。午前有吉領事、上海日報、増田を訪ひ帰る。増田中佐来訪。副島八十六に復書す。夜佐々布来訪。朝來頭痛岑々。

九月二十日 陰天。日曜日。午前八時射的に赴く。二十五発に命中十四発のみ。正午帰る。島田数雄来訪せりと云ふ。有蘭善行、細川家々扶、伊集院中佐の信至る。島田来訪、共に出て波多の処に至り晩食す。

- 九月二十一日 雨。午前有吉、増田を訪ふ。午後姚文藻を訪ふ。有留の信至る。夜今井来訪。
- 九月二十二日 雨。島田、薛徳樹来訪。午後増田、齋藤、安河内、佐原を訪ふ。六時村上貞吉の晩餐に列す。同座は島田、佐原、西本等也。十一時散ず。
- 九月二十三日 雨、冷気を覚ふ。初て羽織を着く。齋藤少佐来訪。姚文藻の信至る。午後領事館に至り有吉、西田を訪ひ、増田に抵り小談。去て姚文藻を敲き帰る。速水一孔に致書す。島田儀市の信至る。上海日々主筆柏田忠一來訪せりと云ふ。
- 九月二十四日 陰。午前副島来訪。午後波多、平岡前後来訪。平岡は昨日来訪せりと云ふ。
- 九月二十五日 陰。海軍に報告を發し東京宅に致書、焼栗を小包にて送る。午後宮地貫道、眞島次郎来訪。有留重利に復書す。狩野直喜に致書す。夜郵便局、増田より平岡小太郎に抵り、九時帰る。長春若林龍雄の信至る。之に復す。
- 九月二十六日 晴天。午前領事館に至り九月分手当と東方通信社創立費三十五元を受取り、正金に至り帰途理髮す。午後波多に本月分を渡し秋を訪ふ、在らず。増田を訪ひ小談、帰る。田鍋、加藤中佐、小泉土之丞、松倉の信至る。風邪の気味有り。六時滬友会の晩餐兼根津歡迎会に出席の後土井、秦、澤本等と談じ、十時帰る。東和に義太夫の催有り、赤垣源三の一段尤も人を動せり。
- 九月二十七日 陰。九時神寄正助、村上貞吉、木幡恭三を歴訪し、去て射的を觀、正午村上の処に中食して帰る。秋、波多に至り小談。二時神寄来訪、共に愚園附近の射的俱樂部に至り外国人のクレー射撃の競争を見る。名手甚だ多く其技及ぶ可からず。六時帰る。神寄来談。
- 九月二十八日 晴天。岡本豊喜に復書す。午前波多来訪。午後吉田昉、中松國彦、有働政喜、橘三郎、岡田有民来訪。岡本豊喜に第二信を發す。波多、西本來訪。夜豊陽館に橘三郎を訪ひ奠儀一封を贈る。其の嚴君の歿せるを以てなり。増田、角田を訪ひ帰る。
- 九月二十九日 陰。午前秋、波多を訪ふ。午後齋藤少佐、波多来訪。田鍋安之助に復書す。夜佐々布を訪ふ。
- 九月三十日 快晴。朝河野の帰滬を山城丸に迎ふ、來らず。平岡、今井を帰る。獵友会午餐会に俱樂部に出席し、散後佐々布、平岡と談じ波多、有吉を訪ひ帰る。姚文藻来訪。鳥居、池田、古城三人の信片柴又川甚より至る。友野盛の信至る。賀来、副島、山田修作来訪。山田は本日来着せりと云ふ。夜高島、波多、今井来訪。
- 十月一日 晴天。是日より起り東方通信社を創立し波多をして幹理せしむ。午後平岡を訪ひ、転じて波多に抵り、姚文藻を伴ひ松岡医院に至り、五時帰る。香月の信至る。之に復す。岡幸七郎に致信。東京升允に勞乃宣の共和正解を郵送す。夜平岡を訪ふ。安河内等と談じ、九時帰る。
- 十月二日 晴。波多、渡辺来訪。鳥居、西村に信片を發す。橘三郎、山田修作来訪。六時平岡を訪ひ、去て増田の処に至り山芋飯を会食す。同座は齋藤、平岡、佐原等なり。十時散ず。
- 十月三日 晴。土曜日。前十時半橘三郎の帰国を送る。午後渡辺、江寄、神崎、西本、波多来訪。菅村夫人の信至る。是夜十一時より江崎、平岡、高島、志保井、渡辺、高田等と蘇州に出獵せんとす。獵装を治す。十時停車場に至り乗車、日清汽船の木幡、土佐、角田隆郎、以下社員二十余名同車たり。靈巖山に遊ぶ者なり。午前一時蘇州着、直に予め雇ふ所の船二隻に分乗し日清の汽船に拖かれ獵区に向ふ。二時横塘にて靈巖行の一行に別れ石湖橋に向ふ。是夜陰曆中秋望前一日に当り月明如鏡。横塘、上方の諸山隱約窓前に横はり、江流声無く四辺閑寂、只だ遙に犬吠を聞くのみ。船頭沈吟眠を成さず。三時石湖に達し一睡す。
- 十月四日 陰、朝微雨。六時朝食。直に結束し出で草地に打獵す。僅鶉一、鳴二を獲たるのみ。午後二時石湖を發し横塘に下り日清汽船の通過を俟ち拖れて蘇州停車場前に帰り、午後六時四分の汽車に乗ず。七時半上海着。一行と別れ寓所に帰る。
- 十月五日 晴。午後阿部政次郎、波多来訪。出て有吉を訪ひ、去て根津、波多を訪ひ帰る。平岡の処に

至り晩食す。高島同座たり。九時半帰る。佐原より梨を贈り来る。

十月六日 半晴。午前大野来訪。午前理髪。倶楽部に至り東方通信社創立披露の爲め支那新聞記者、時報、申報、神州、大共和各社の記者、並に根津、上海日報、上海日々等の諸人を招待し午餐を饗す。四時散ず。海津来訪。内人、速水、遠藤留吉、迫の信至る。

十月七日 雨。午前副島来訪。午後河野久太郎の帰るを迎へ、帰途佐原を訪て帰る。齋藤少佐、根津一、波多博、河野久太郎前後來訪。阿部野の信至る。根津連名にて阿部野に電報し友野盛の来滬を促す。加藤中佐の信至る。

十月八日 半晴。午前村上貞吉、島田儀市来訪。午後有吉、西田、増田、平岡、河野、姚を訪ひ、松岡の処にて齒療を為して帰る。

十月九日 晴。熊本菅村夫人に復書す。東京内人、並に速水一孔に致書。速水に姚文藻、升允に致すの書を封送す。海軍に報告を發す。阿部野、名和中将、伊集院中佐、迫良隆に致書す。内人、菅村、名和中将に焼栗各一罐を小包にて郵送す。友野盛の電報至る。狄楚青来訪。午後郵便局、同文書院根津、佐原を訪ひ帰る。村上貞吉来訪。夜波多を訪。

十月十日 晴天。井手三郎に致書す。午前神崎、河野を訪。中食後神崎と江湾附近に獵す。獲る所無し。五時神崎の処に帰り茶を吃し薄暮帰寓。古閑信夫、大中熊雄、鳥居赫雄、軍令部の信に接す。

十月十一日 晴天。日曜日。午前河野、神崎を訪ふ。午後神崎と上車江湾に獵す。鶉一を獲たるのみ。六時帰る。

十月十二日 晴。午前齒療を為し平岡を訪ひ帰る。午後有吉、増田を訪ふ。島田儀市済南よりの信至る。夜佐原、波多来訪。菅村夫人、佐野直喜に致書。

十月十三日 晴天。島田儀市、古閑信夫に復書す。午前松岡に至り齒療を為し村上、河野を訪ひ帰る。午後狄、佐原を訪ふ。安河内、西本来訪。

十月十四日 陰天。朝友野盛を筑前丸に向〔迎〕ふ。之を同文書院に伴ひ根津院長、外職員に紹介す。本院舎監に推薦せる者なり。午後小泉土之丞来訪、本日來着せりと云ふ。波多、副島、津田来訪。宮島大八、速水一孔、内人、中松戒三、内海博武、阿部野、東洋協会の信至る。済南中島為喜に致書す。姚文藻を訪ひ升允に贈るべき釀金千七百五十元中より四百元を受取り、之を宮島に滙送し升允に転交を囑す。四百元を邦貨に換算し三百六十円三十四錢と為れり。夜賀来訪。

十月十五日 陰、微雨。小泉来訪。松岡に至り齒を療す。午後山田修作、波多来訪。川口市之助の信、並に北京岡田、三谷、三澤、深水連名の信片至る。友野盛来訪。朝鮮飴一箱を贈る。

十月十六日 陰天。宮島に為替を送り外に内人、内海、大中熊雄に復書し東洋協會に正月至十月会費五元を郵送す。松岡に至り齒の療治を為す。午後根津来訪。阿部野、長江、松倉に致書す。六時佐原宅の北京会に赴く。同座は小泉土之丞、津田、増田、齋藤、齋藤少佐、神崎、西田、波多、以下三四人也。十一時散ず。

十月十七日 半晴。長江等に信を致す。午前理髪。松岡に至り齒を療す。午後井手照人を訪ふ。本日歸來せりと云ふ。波多、副島来訪。内人の信至る。夜河野久太郎、佐々布、高島来訪。

十月十八日 快晴。日曜日。午後一時尚武会の武道大会を參觀す。六時根津一氏の招宴に四馬路春江樓に赴く。同座は有吉、齋藤、増田、齋藤、江崎、村上、安河内等なり。九時散ず。迎英輔来訪せりと云ふ。

十月十九日 雨天。午前齒の治療に赴き之を終る。午後迎英輔、小泉土之丞、井手照人来訪。三時増田を訪ひ共に出て弓友倶楽部に至り入会を申込み、挽弓薄暮に及で帰る。済南中島為喜の電報至る。本日より打電すと云ふ。夜波多来訪。台北土屋員安の信至る。

十月二十日 晴天。午前友野盛来訪。東京留守宅に致書す。長沙川口市之助に復書す。挽弓に赴く。午後波多、副島来訪。副島は本日の便船にて一時帰国すと云ふ。中松國彦来訪。夜今井邦三来訪、小泉



を招き三人にて鞍馬、熊野を謡ふ。十一時散ず。

十月二十一日 微雨。午前成田鍊之助、中松國彦来訪。十時射場に赴き拉弓。午後一時井手三郎、上野貞正を近江丸に迎ふ。波多、神嵯、児玉貞雄来訪。池部雀彦、軍令部の信至る。夜成田と談ず。

十月二十二日 陰天。台北土屋員安に復書す。午前弓友倶楽部に赴き、去て有吉を訪ひ井手、佐原、波多を訪て帰る。中島為喜の信、並に船津、森岡、中島等連名の信片、菅村、迫の信至る。午後井手、小泉、波多来訪。夜賀来、佐々布来談。

十月二十三日 雨。山東中島に復書す。午前弓術を修めて帰る。軍令部伊集院中佐に致書、勞乃宣の共和正解八冊を送る外に、名和中将、鳥居、西村、狩野、宮島、田鍋、速水、川島、北京吉田大佐に各正解若干冊を郵送す。午後上海日報に井手を訪ひ、四時半河野久太郎、菅趾卿の日本行を送る。根津を同文書院に訪ふ。

十月二十四日 陰天。東京宅に致書す。午前井手を誘て弓術倶楽部に赴き十一時帰る。午後二時根津の帰国を近江丸に送り、安河内、真島を誘て弓術倶楽部に至り、四時帰る。平岡、神嵯来訪せりと云ふ。秦より高麗参油二匣を送り来る。

十月二十五日 晴天。日曜日。午前五時起床。獵装を整へ上車平岡の処に至り、柳谷、三田、平岡と七時よりニューポイントホテル行の電車に乗り黄浦江畔より左に折れ十八支里江湾競馬場に出で、四時同行と相失し車を賃して帰る。一も獲る所無し。長江、松倉、岡本豊喜、阿部野、佐野直喜、東洋協会の信至る。

十月二十六日 陰。朝学射終て領事館に至り本月分経費、並に東方通信社経費二百二十元を受取り、正金銀行より井手を訪ひ電報料補助六十元を交附し、波多を訪ひ本月分二百二十元を渡して帰る。午後秦長三郎、山成等を訪ふ。西本、波多来訪。山東島田儀市、營口安達謙蔵の信至る。

十月二十七日 雨天。朝学射、正金銀行、領事館、増田、中野二郎等を訪ひ帰る。午後平岡来訪。六時土佐孝太郎の晩餐に宝昌路三〇九号の宅に赴く。同座は井手、佐原、木幡等なり。九時散ず。同文会の信至る。回顧すれば三十年前の

〔これに続く 1 ページ分欠で 10 月 31 日の途中からとなる〕

十月三十一日 (続き)

三十年のワカ捨石のかずかずを拾は人のなとあらめやは

午前弓術倶楽部に至り、帰途吉阪にて撮影して帰る。午後成泰夫人来訪、長沙に赴くと云ふ。漢口宝妻、中津への添書を与ふ。内人、並に菅村夫人の信至る。岳翁の危篤を報じ来る。菅村夫人に復書す。六時より春江楼に知人を招邀す。是日支那に入てより満三十年に相当するを以てなり。会者中野二郎、井手三郎、佐原篤介、秦長三郎、島田数雄、土井伊八、青木喬、平岡小太郎、安河内弘、村上貞吉、今井邦三、西田耕一、西本省三、波多博、佐々布質直等なり。九時散ず。上海日報社に至り十時帰る。十二時熊本より電報至り岳父君の逝去を伝ふ。本日危篤の報に接したるも必ず回春の希望を有せしに突然此の凶耗有り、哀悼の至に堪へず。燈下兀坐往事を追懷して鶏鳴に至る、噫。

十一月一日 晴天。是日平岡と鎮江行の約有りしも丁憂の為め中止し、早朝行て之を告ぐ。増田、佐原、波多を訪ふ。熊本内田友義に發電す。午後島田数、中野二郎、波多、中内二郎、鐵尾勝三等来訪。夜佐々布来談。

十一月二日 晴。午前増田、井手来訪。姚文藻、陳毅、西本、秦、波多来訪。秦より奠儀三元を贈らる。村上夫人、齋藤来訪。夜佐原来訪。

十一月三日 雨天。熊本に在る内人、並に内田友義に致書、帰県を報じ、海軍に報告を発し、伊集院俊に致書、帰県の事を告ぐ。午前有吉、古谷、西田を訪ふ。午後軍令部の電報至り余の帰県に同意し来る。青木喬来訪。宮島大八、松倉、光永、迫等の信至る。波多、友野来訪。夜小泉、津田来談。大雷

雨。佐原より林檎を贈り来る。

十一月四日 雨天。長崎迄の船票を購ひ帰装を理す。午後藤富、福田来訪。夜神寄来訪。

十一月五日 晴。午前波多、佐原、上海日報より松岡に至り齒を療し、齋藤、増田、平岡、財津に別を叙し帰る。午後島田、賀来、土井来訪。夜高山正之、佐々布、波多、井手、西山等来訪。宮島、迫に致書す。

十一月六日 晴天。是日春日丸にて帰国、岳翁の喪に走らんとす。早起行李を戒む。午前平岡、姚来訪。十一時半東和を出て領事館に至り有吉、西田を訪ひ小談。去て春日丸に上る。増田、齋藤、齋藤延、江寄、木幡、神寄、村上、土井、秦、島田、澤本、井手照、波多、児玉、平岡、安河内、真島、古屋、本庄、青柳、高島、賀来、今井、渡辺、渡辺、山田修作、東、友野、岡、吉田、安達隆成、西山等来送。午後一時開船。船客甚少。朝来頭痛。夜に入て寝に就く。

十一月七日 晴。心気不舒。船室を出でず。是日青島陥落。

十一月八日 快晴。黎明長崎に入る。七時檢疫終り上陸、税関の検査を了し十時停車場に至り、十一時二十分の急行車に乗ず。三時鳥栖着、換車。原田隆升、田尾昇蔵に邂逅す。六時半上熊本着。菅村来迎。佐々布、中村と別れ新屋敷の宅に帰る。内人は本月二日来着せりと云ふ。

十一月九日 雨。朝内人と大江に至り弔唁。岳父君の神位を拝し午時帰る。午後河口、内田友義、井手友喜来訪。夜古閑信夫来訪。

十一月十日 晴。午前古閑宅を訪ひ、去て春日に松倉を訪ひ中食の饗を受け、共に出て長江虎臣を鍛冶屋町戊申貯蔵銀行に訪ひ、帰途山田珠一、河口介男を訪ふ。河口にて晩食の饗を受く。内人来会。夜に入て帰る。是日青島陥落の祝賀会有り、市極で熱鬧。山田珠一、阿部野、田中、緒方等来訪せりと云ふ。

十一月十一日 快晴。午前大江、古莊、井場、阿部野、緒方、鎮西館、小早川等を訪ひ、理髪して帰る。宇野貞度、阿部野、友野母堂来訪。午後佐々布を訪ふ。内人と田中宅の晩餐に列し、八時帰る。

十一月十二日 晴。午前十一時五十分の汽車にて上熊本より山田珠一、村上一郎、平山岩彦、小早川秀雄、大谷高寛等と大牟田に至り旗亭に投じ中食を共にし、二時二十分細川護立侯を迎へ車を同ふし三時半春日に達す。護立侯は故護成公の遺髪を奉じて帰葬せらるる者なり。安場、高岡、蓑田以下随行せり。松倉の処に小談。朽木興麿氏来会。五時帰る。六時半鎮西館に至り、村上、山田、平山、岡等と北岡邸に至り、故侯爵の靈位に謁し、八時半帰る。宮崎寅、勝木の信至る。微雨。不破昌材来訪。

十一月十三日 晴。中衿戒三来訪。午前高道の処に至り齒の療治を為し、帰途緒方、阿部野と小談帰る。午後山本弥三作来訪。五時大江の二七日法会に列し八時半辞帰。石原来訪せりと云ふ。

十一月十四日 陰。前八時菅村と上車竜田の泰勝寺に至り護成公の葬祭に列し、十時帰る。安達謙蔵の支那より帰れるを聞き之を研屋支店に訪ふ、在らず帰る。衿倉来訪。午後齒療を為し、三時大江に至り光永眠雷の来るを待ち岳翁の肖像を作る。晩に及で成る。食事を共にし八時帰る。雨。今井邦三、白岩夫婦より香典を送り来る。

十一月十五日 陰。午前右田以德来訪。午後佐々布宅結婚披露宴に赴く。同座は内藤儀十郎、井場、大野慎作、山田、小早川、平山、行徳、坂本、河野、園田、中路等なり。五時より南山楼の同窓会に出席す。会者岡本源次、安達謙蔵、蓑田喜太郎、高岡富弥を賓客とし山田、古莊、沼田、大野謙次郎以下新旧知人五十余人。九時帰る。大野謙来訪せりと云ふ。石原醜男来訪。

十一月十六日 晴。午前安達謙蔵、内藤儀十郎、佐々布遠諸氏来訪。是日郵便貯金即時払にて二百五十円受取る。

十一月十七日 陰寒。是日内人と共に東上せんとす。朝来行李を理す。井場氏来訪。内田友義亦来訪。正午上熊本駅に至る。菅村夫婦、内田友義、田中夫婦来送。一時二十分発車、六時門司着、下関に渡り七時十分の最大急行寝台車に乗ず。

十一月十八日 秋晴如拭。黎明起床，姫路を過ぎ朝食す。車窓暢望淡路の島画図の如く風光不可状。前七時半神戸着，八時半大阪を過ぐ。名古屋にて中食。夜九時五分新橋着。雨。十時前芝公園内の寓所に帰る。伊集院中佐の信に接す。

十一月十九日 晴。終日在家。

十一月二十日 晴。終日在家。晡時家族と芝公園に散歩す。夜内人と井上清秀，西田敬止を訪ふ。理髮。

十一月二十一日 陰。午後家族と上野公園に遊び，五時帰る。

十一月二十二日 晴。日曜。

十一月二十三日 晴。午前同文会より四谷に至り田鍋を訪ふ。已に転居せり。白岩を訪ひ小談，正午帰る。田鍋に致書す。

十一月二十四日 陰，微雨。午前海軍軍令部に竹下少将，山岡副官，田中大佐，伊集院中佐等を訪ひ，去て山内崑を同文会に訪ひ，中食後古城貞吉に抵る，在らず。去て荒賀直順を敲き共に出て宮島大八を代々木に訪ひ寛談，晚餐の饗を受け八時帰宅。波多博，同文会の信，並に鈴木海軍次官より案内状至る。田鍋来訪せりと云ふ。

十一月二十五日 晴。朝忝岡千寿来訪。同文会，川島浪速に致書す。午後公園内を散歩す。

十一月二十六日 晴。午前荒賀直順来訪。午後海軍軍令部に山下軍令部次長，山岡副官，谷口副官，鈴木次官，安村中佐等を訪ひ，去て名和中将を榎阪町に訪ひ寛談。四時より牛込喜久井町に田鍋安之助を訪ふ，在らず。五時半帰る。井上清秀来訪せりと云ふ。鳥居の信至る。

十一月二十七日 快晴。午前橋三郎来訪。田中大佐耕太郎より案内状至る。之に復す。午後宮島大八来訪。五時半より鈴木海軍次官の招宴に新橋花月に赴く。同座は西沢公雄，松井外務次官，小池政務局長，芳澤謙吉，坂田通商局長，名和中将，秋山，竹下両少将，向井，山岡，飯田，谷口各大佐，伊集院中佐以下総員二十人。十時に及で帰る。山東船津辰一郎，並に荒賀の信至る。

十一月二十八日 晴，風強。朝田鍋，白岩，山内来訪。田鍋，山内を留め中食す。宮島大八の信至る。五時半より田中大佐の招筵に築地精養軒に赴く。同座は八角少佐，伊集院俊の主客四人にして寛談十時に及で散ず。十時半帰る。川島浪速来訪せりと云ふ。

十一月二十九日 陰。日曜日。午前川島を平川町金生館に訪ふ。小村俊三郎在焉。談正午に及で帰る。

午後竹下少将勇を高輪に訪ふ，在らず。是日風邪の気味にて心身不舒，晩食後就寝。古城の信至る。

十一月三十日 晴。古城に發電，其の来訪を辞す。午前加藤壮太郎来訪，之を留て中食す。三時より宮島大八の招邀に赴く。同座は升允，田鍋，速水等なり。十時に及で散ず。竹下少将来訪せりと云ふ。

十二月一日 快晴。午前軍令部に竹下少将，佐藤少将，山岡大佐，田中，伊集院を訪ひ，帰途小池政務局長を外務省に訪ひ小談。辞出晩翠軒に井上を敲き帰る。午後心気不舒。三時軍令部副官の処に至り正月至三月手当九百円を受取り，帰途新橋博品館に至り雑品数点を購て帰る。晩食後就寝。悪寒発熱頗苦。

十二月二日 晴。終日褥中に在て病を養ふ。午後荒賀，宮島，福迫亀太郎来訪。

十二月三日 陰。是日熊本に帰る予定なりしも病を以て延期す。午後宮島，橘，岡幸七郎，波多，増田，菅村，内田友義に致書す。

十二月四日 晴。午後理髮。

十二月五日 快晴。是日東京を辞して熊本に帰り支那行の途に上らんとす。黎明起床。七時芝公園内の僦居を出て上車新橋に向ふ。駅内加藤中佐壮太郎に邂逅す。新に秋津洲艦長に任ぜられ佐世保に赴任する者也。之と車を同ふす。七時四五分発車，箱根を過ぐれば富士の神山半峯以上白雪皚然巍立，晴空雄姿不可名状。静岡にて中食。大垣晩食。京都を過て寝に就く。

十二月六日 雨。午前五時宮島を過ぐ。起床，内海の雨景宛然如画図。七時半加藤と朝食を共にす。九時半馬関着，直に門司に度り十時四十分の急行に乗ず。馬関にて紀成虎一に邂逅す。上海に赴くと云

ふ。博多中食。午後一時半鳥栖着。加藤と相別る。車上より東京留守宅、並に勝木、宮寄に致書す。  
三時二十分上熊本着。内田友義、菅村三之、古閑信夫来迎。上車新屋敷の宅に帰る。  
十二月七日 晴。午前大江を訪ふ。午後内田友義と田中清司、河口介男を訪ふ。宇野貞度来訪。五時より河口、内田、田中、菅村、古閑と米屋町鳥松に鰻飯を会食し、帰途塩屋町に至り革矢を購て帰る。  
十二月八日 晴。長崎土佐屋、上海波多、東和に十四日長寄発の事を報ず。午前物産館、鎮西館に緒方、中路等を訪ひ、去て松倉を訪ふ、出獵在らず。十二時半の汽車にて宇土に至り法華寺城山の先塋に謁し、帰途浅井寅喜を訪ひ暢談。歩して車站に至り四時の汽車にて帰る。就褥後石原醜男来訪、不  
会。  
十二月九日 嚴霜如雪。朝食前石原を訪ふ。午前河口を訪ひ、帰途飴、麵等を購て帰る。石原、井芹、宇野貞度に致すの信を認む。晩内田友義の晩餐に赴く。八時帰る。  
十二月十日 晴。午前三時上海佐々布より電報至る。朝内人に致書。英国より来りし伊東の写真を清子に転送す。早朝井芹を訪ふ。河口来訪。十時半内田友義の満洲行を上熊本に送る。上海佐々布に返電す。午後春日に松倉を訪ひ三時半の汽車にて宇土に至り旧知を歴訪し、夜十一時四十分人吉に達し翠嵐楼に投ず。  
十二月十一日 微雨。午後四時川  
十二月十二日 晴。川野廉と暢談。十時半翠嵐楼を辞し人吉車站に至り、十一時十六分の急行に乗ず。川野来送、梨一簍を贈る。午後一時熊本着。松倉、緒方、永原、宇野等来訪せりと云ふ。午後大江、田中、河口、小早川、古閑を歴訪し別を叙して帰る。東京宅に致書す。上海波多の信至る。夜古閑来訪。  
十二月十三日 晴、寒気頓に加はる。暁に蘇山を望めば頭皆白矣。午前行李を整へ結束す。岳母君来り送らる。前十時家を出で佐々布宅を一訪して上熊本に至り、十時半の汽車に乗ず。小早川、森倉、菅村、田中、古閑、河口等来送。内藤儀十郎公明夫妻、河口介男、遠山参良と同車。河口は植木に下車。内藤翁は高瀬にて車を下り遠山と矢部川に別れ下午一時鳥栖着、一時半の急行に換坐す。五時十分長崎着。土佐屋主人来迎。車を駆て土佐屋に投ず。夜川野廉、伊集院俊、浅井寅喜に致書す。夜雨。  
十二月十四日 晴雨無定。午後三時土佐屋を出で筑前丸に乗ず。四時開船。驟雨時に至り時に休む。瓊浦の十八湾雨中の風致大佳。  
十二月十五日 晴、風濤頗大。船量を覚へ終日床上に横臥す。  
十二月十六日 快晴。午前十一時上海に入り滙山碼頭に達す。中島少佐晋、島田、西本、波多、井手照、西山、佐々布等来迎。東和に投ず。波多と中食を共にす。佐々布、井手照来訪。長崎土佐屋にて行李一個を遺忘す。旅館の不注意なり。午後出で有吉、古谷、中島少佐、齋藤少佐、平岡、島田、井手を訪て帰る。小泉、中俣國彦来訪。宮島大八、升允、田鍋、伊集院、名和中将、石橋藤次郎、川口市之助、菅村夫人、宮寄盛、井芹経平、岡幸七郎、内海博武、松寄奎雄、中久喜、平井徳藏等の信、並に尾越、小畑、富田七郎、菅正懿、内海、黒瀬等宇土出身者合作の信片至る。夜齒痛甚。  
十二月十七日 晴天。午前佐原、波多、今井、秦、姚を訪ふ。午後村上を訪ひ小談。松岡に抵り齒療を為し帰る。宮島大八に致書。副島、河野来訪。中島真、中俣来訪。夜佐原来訪。小泉の処にて暢談。  
十二月十八日 晴。午前平岡、安達隆成、狄葆質、友野盛来訪。領事館より十一月分経費を受取り有吉、古谷、西田等と小談、帰る。午後佐々布を訪ふ。長安英彦、齋藤延来訪。夜三菱齋藤の招宴に六三亭に赴く。長安を主賓とし有吉、齋藤、中島晋、志保井、馬場、木幡、外一二名也。十時前帰る。  
十二月十九日 晴。午前通州師範学堂教習西谷、並に島田来訪。正午副島綱雄、西谷を筑前丸に送て帰る。河野夫人、西田敬止よりの贈品を携へ来訪。波多、中島少佐、橘三郎来訪。橘は本日来着せりと云ふ。過日土佐屋に遺忘の皮箱を携へ来る。有留重利青島よりの信片至る。東京宅に発信す。夜波多を訪ふ。



十二月二十日 晴。日曜。午前木幡，神寄，村上，河野宅を訪ふ。午後豊陽館に角田隆郎，橘，中島少佐を訪ひ，去て安河内，友野，齋藤延を敲き帰る。時報館より二百元を送り来る。二百不足。鎮江迎英輔に致書す。

十二月二十一日 晴。升允に送るべき銀一千二百元を郵便為替とし白岩龍平の処に送る。白岩，速水，宮島，井芹，東京留守宅，河口，菅村，田中，古閑，名和中将，竹下少将，山岡，田中，伊集院三大佐，有留，平井，松倉，小早川，内海，石橋，川口市之助，宮崎盛等に致書す。名和，竹下，田中，山岡，伊集院，宮島，並に内人に冬筍を小包にて発送す。波多来訪。午後波多，長尾雨山，神寄正助，渡辺俊郎来訪。長尾は明日の船にて帰国すと云ふ。夜平岡を訪ひ九時帰る。河野久太郎来訪，十一時半去る。内田友義の信至る。

十二月二十二日 雨天。宮崎盛，内海博武，岡幸七郎，中久喜信周，松寄奎雄に復書す。又た内田友義に復す。香月梅外に信片を發す。白岩宛に升允への醸金九百三十八円〇五錢を郵送す。午後長尾雨山を山城丸に送る。夜松岡玄寿の招宴に四馬路荔香園に赴く。島田，波多等二十余人同座たり。九時散ず。河野久太郎の江西行を岳陽丸に送り帰る。

十二月二十三日 晴。明日より神寄，平岡，渡辺と杭州に出獵せんとす。朝来獵装を治す。午後齋藤，平岡を訪ひ，帰途橘に抵り，去て民団に十月至十二月課金を納め佐々布と小談，帰る。夜神尾茂来訪，本日来着せりと云ふ。神寄正助来談。中島少佐より有明海の牡蠣一簍を送り来る。内人，土屋員安，吉田寿三郎，速水一孔，同文会の信，並に迫良隆の書状に接す。山本唯次来訪。

十二月二十四日 晴。朝平岡，波多を訪ふ。海軍伊集院大佐に致書す。午後一時神寄の来るを待ち馬車を同ふして南門外車站に至り，二時の汽車にて渡辺俊郎と三人杭州に向ひ艮山門より拱宸橋に至り六時大方旅館に投ず。

十二月二十五日 晴。前六時起床。獵装を治し車站に至り七時四十分の汽車にて艮山門に至り城外の郊地を獵し，正午独り湖墅鎮に至り中食し一時神寄と遇ふ。是日近距離にて雉子を打つ。三回不中。僅に山鵲一羽を獲，六時半大方棧に帰る。

十二月二十六日 快晴。前八時艮山門に下車し「ヤブサ」附近一帯を獵し三びの雉子に失敗し終に山鵲三，兎一頭を獲て，四時の汽車にて拱宸橋の旅館に帰る。夜郵便局辻某，外一人来訪。

十二月二十七日 快晴。是日上海に帰らんとす。早起行李を整へて旅館を出で七時四十分の汽車に乗ず。辻某来送，雉子三羽を贈る。艮山門にて上海行の汽車に換坐し，十二時四十分上海着，馬車を賃して帰る。内人，浅井寅喜，有園の信に接す。波多来訪。

十二月二十八日 晴。報告を作る。午後波多の処に至り，晚島田を加へ三人にて前日獲る所の山鵲を会食す。八時より倶楽部に至り宝生流名家藤野謹爾の景清を聴く。十一時帰る。平岡，秦来訪せりと云ふ。

十二月二十九日 晴。神尾，波多，神寄，中島少佐来訪。午後理髪。実業協会に至り小談，帰る。領事館より本月経費を受る。平岡宅の晚餐に赴く。橘，安河内，佐原，永末，外二人同座たり。鯛茶漬，雑煮を会食。十一時散ず。伊集院俊，佐野直喜，並に内人の信至る。今井嘉幸の信至る。増田大佐の信至る。

十二月三十日 晴天。東京留守宅，佐野直喜，前島眞に致書す。前島は病気の為め福岡病院に入院せりと云ふ。午前中島少佐を訪ひ，去て上海日報，渡辺俊郎を訪ひ，台湾銀行に預金を為し，江寄と小談，去て姚文藻を敲き帰る。午後平岡を訪ふ。小泉，山成，波多来訪。晚中島少佐の招宴に奎亭に赴く。佐原，波多同座たり。九時半帰る。今井邦三，鈴木格三郎来訪。

十二月三十一日 陰天。午前波多，橘，山成，宮地来訪。海軍に報告を發す。姚文藻の信至る。橘三郎の晚餐に豊陽館に赴く。大倉組の門野重九郎同座たり。十時帰る。是日大正三年尽日たり。残務を整理し午後一時寝に就く。

### 3. 大正4年1月から12月までの日記

大正4（1915）年の日記は、この年の1月1日から8月24日までの一綴じと、8月26日から翌年12月31日までの一綴じの始めの部分とからなっている。

前年12月中旬から上海に滞在して新年を迎え、そのまま7月下旬まで上海に留まっている。上海での行動で最初に目に着くのは、正月4日から連日のごとく弓術倶楽部に通って「弓術を修め」ていることである。前年にも2度弓術倶楽部に行ったことが日記中に書かれているが、この正月に一念発起して通いだした感があり、10月に日本から上海に戻ってからも続いているのである。4月12日の日記には、同月6日に前田彪が亡くなった知らせが届いたと記している。前田は熊本の出身で、漢口楽善堂の同志であり、福州で『閩報』を発行した人物である。5月1日の日記に、『閩報』の後始末を天野福州領事に頼んだとある。もう1人その頃出会った人物として、西本願寺前法主大谷光瑞がいる。4月21日有吉上海領事の宗方を主賓とする招宴に宗方も出席し、翌日は大谷の法話があつて人から参加を誘われたが、「師の人格を信ぜざるを以て辞して行かず」と書いている。

4月19日から5月9日までは、「日支交渉」いわゆる「二十一か条要求」に関する日中間の交渉についての言及が日記中にしばしば見られる。そのうち5月4日には、「日支交渉險悪を告げ今明日を以て支那政府に最後通牒を送り尚反省せずんば自由行動をとることを決定せしを以て」、有吉領事他数名で「決裂後の処分に付き商量し」たとする。但し、日記への言及はその時期に限られているが、海軍あての報告では、もっと早く2月25日の第430号に始まって7月2日の第440号に至るまで、中国内の各種の反応を伝えており、それに対する宗方の態度は一貫してまことに強硬である。例えば4月6日付けの第434号には、上記5月4日の日記の内容と重なるものであるが、この件に関する中国人の反感の如きは「毫も意に介するに足らず。仮令交戦の爲め一時国民の反感を買う事有るも、半年も出でずして其痕跡をも留めざるに至るべく、感情問題より打算せば、無論武力解決を以て上乘と為す。讓歩的姑息の解決は、却て其反感を深くし彼我国交の累を永久に貽す者なり」と書いている。

7月24日に上海を離れ、長崎、熊本を経て8月1日に東京に着いてからは、海軍に顔を出した他に、これまで同様様々な人物と顔を合わせているが、そのうちで注目したいのは、中国における新聞発行をどうすべきかを相変わず考えていることで、8月7日に外務省で松井次官他の役人に亀井陸良、中島眞雄、佐原篤介を加えて、「支那に於ける新聞政策を商議し」、同9日には、中島、佐原と「漢字新聞紙の計画を立て」、飛んで9月22日には、外務省の責任者に東方通信社の拡張案を提出した、とする点である。これらの動きがその後どうなったかは、これから調べるべきことであるが。8月26日から9月2日までは、家族サービスを兼ねてであろうが、日光、仙台、塩釜、水戸を回り、行く先々の見聞を詳しく記している。

10月16日に東京を離れて、長崎経由23日に上海に戻っている。その後のことで触れておくべきなのは、帝制実施に踏み込んだ袁世凱に対する打倒の動きである。12月5日から6日にかけて上海江南製造局に対する陳其美が指揮する革命党数十人による攻撃は失敗に終わり、他方12月20日には蔡鍔が雲南で、陸榮廷が広西で討袁の軍を起こし、それに呼応する他の動きもあるとの情報を伝えている。このことに関連して宗方は、海軍あての報告としては5月28日の第436号から始まって、袁世凱の帝制に向けた動きとそれに反対する各種勢力の動きについて書いており、12月22日付けの第444号では、袁が皇帝に就いた後の状況と上の日記でも触れている袁打倒の動きについて、「勢の赴く所、人心の帰する所遂に袁世凱の帝業を覆没せしむること」は清朝を打倒したことよりも容易であるのは自明のことであり、それに対して袁としては「外力に依て頽勢の挽回を策」すだろうが、「此際我国は袁世凱より如何なる哀訴歎願ありと雖も、断じて之に対して声援と助力を与ふ可らず」として、自らの考えを明ら

かにしている。

また、清朝復辟を策するグループにおいても袁打倒の行動に呼応しようとする動きがあり、鄭孝胥、姚文藻が12月26日に宗方のところに来て相談し、馮国璋に決起を促すことにし（報告第447号にその旨の言及がある）、同28日にも鄭の家で姚や李経邁と「時局に付き商量する所」があった（同日の日記）。宗方としては、鄭や姚らの側に立って袁世凱打倒に関わろうとしたことが知れるのである。なお、前年にあった升允への送金はこの年にもあり、11月8日に李経邁、鄭孝胥から650元が、同16日には李から650元がいずれも宗方経由、宮島大八あてに送られていることが日記によってわかる。

ここで、大正4年に海軍軍令部あてに送った宗方の報告の日付と号数を、前年と同じ要領で『宗方小太郎文書』中の記載と対照しつつ、日記から拾いだす。

1月14日、第427号「新税法に対する商民の反対意見」、2月8日、第428号「日支交渉問題に対する支那の国論」、第429号「党人懐柔策、在京革命党系統」、2月24日、第430号「日支交渉問題の影響」（『文書』の日付は2月25日）、3月4日、第431号「日支交渉に対する支那人士の意向」、3月9日、第432号「日支交渉事件の影響」など（『文書』の日付は3月10日）、3月20日、第433号「宋社党の密議」（『文書』では3月19日）、4月6日、第434号「排日運動一束」、5月5日、「号外報告を發す」とあるが、『文書』にはない。5月11日、第435号「交渉解決後の情況」（『文書』の日付は5月10日）、5月28日、第436号「袁の帝制運動」、6月6日、「号外報告を發す」とあるが、『文書』にはない。第437号「排日運動一束」。6月30日、「報告二通を發し」とあるのは、『文書』にある第438号「北京政界の暗闘」（日付は6月28日）と上海にある第439号「排日運動に対する所感」（日付は6月29日）を指すと推量できる。7月2日、第440号「淮粵兩派の軋轢と弾劾の流行」、11月5日、第441号「帝制問題の現況」、11月17日、「報告を發し」とあるが、『文書』にはない。12月1日、報告443号「袁派及び提式派の人物」（『文書』の日付は11月30日）、12月23日、第444号「袁の皇帝即位とその後の政況」（『文書』の日付は12月22日）、12月27日、第446号「馮張の恐怖」（『文書』の日付は12月26日）、第447号「福建派海軍々人の反対」。

#### 大正四年巳卯

正月元日 陰天。詰朝起床、斉戒、服装を改め遙に東天を拝し、聖寿無窮国運隆昌を祈り元旦の儀式を了し、九時半橘三郎と馬車を同ふし有吉に抵り賀正。去て三井社宅に藤村義郎、小田柿捨次郎を訪ひ、帰途領事館諸員に名刺を留め、平岡、齋藤に至り帰る。中食後姚元綸、波多、友野等来り賀正。狄楚青より古磁小花瓶一個を贈り来る。一時獵装北郊に至り平岡、山成に会し鴨一、山鷄一、鶉一を獲、五時帰る。今井、小泉、山口啓三夫婦来訪。今井は明日の便船にて帰国すと云ふ。同人に托し狄贈る所の花瓶を東京留守宅に送る。山口より北海道の筋子一樽を持贈。内外知人の年賀状数十通に接す。姚文藻、上妻の信至る。

正月二日 陰天。内人に致書す。午前波多、佐々布、狄、河野宅、村上、中島を歴訪し、今井邦三の帰国を送り帰る。午後島田、並に熊本出身同文書院学生来訪。井手三郎、小笠原陽雄、高島醇等の信至る。西田畊一來訪。夜平岡を訪。

正月三日 陰天。井手三郎に復書し、並に内外知人に年始状数十通を發す。九時獵装山成の処に平岡と会し三人江湾の南郊に獵し、獲る所無し。五時帰る。

正月四日 陰。午前弓術を習ひ、去て齋藤少佐、上海日報を訪ふ。午後西本、波多来訪。年賀状数十通至る。之に復す。姚文藻を訪ふ。夜小泉来訪。雨。

正月五日 雨天。午前新聞紙並に書類を整理す。青島増田大佐に致書。午後弓術俱樂部に至り、去て橘、中島を訪ひ帰る。田中耕太郎の信至る。

正月六日 雨。朝弓術を修む。正午倶楽部に至る。内人の信至る。

正月七日 雨。前六時半起床。弓術場に至り是日より寒稽古を為す。内人、増田、伊集院に致書。伊集院には其夫人の死を弔す。知人の年賀状に対し数十通を答復す。午前根津一を同文書院に訪ひ、正午春申社の新年宴会に倶楽部に出席す。齋藤、中島、島田以下十余人同座たり。午後根津、賀来来訪。狄葆賢来訪、宋磁二個を贈る。

正月八日 晴天。詰朝弓の寒稽古に赴く。午前多田成政来訪。山本唯次来訪。午後弓術倶楽部に至り十一月至正月会費を納て帰る。夜姚文藻来訪。

正月九日 陰天。朝弓術を修む。午前根津来訪。午後波多来る。共に出て西本を訪ひ五時帰る。橋来訪せりと云ふ。竹下少将勇、山岡大佐、菅村夫人[の]信、並に各地より年賀状至る。夜小泉来談。雨。

正月十日 陰。日曜。朝食後弓術を修め、去て中野二郎、平岡、齋藤を訪ひ帰る。午後中島を訪ふ。夜小泉来訪。

正月十一日 陰。朝弓術を修む。午後中島少佐来訪。橋三郎来訪。明日より江西に赴くと云ふ。

正月十二日 陰。早朝弓術倶楽部に赴き八時半帰る。午後波多来訪。夜橋、平岡を訪ふ、在らず。清子の賀状至る。

正月十三日 陰天。朝弓術倶楽部に赴く。寒威凜烈、十二年来の無き所。午後理髮。同文書院に安河内、上野と談じ、帰途波多を訪ひ帰る。川口市之助の信、並に年賀状数十通至る。之に復す。是日最低温度華氏十五度。

正月十四日 晴。朝弓術倶楽部に赴く。午前山田修作来訪、台湾、広東地方に赴くと云ふ。台北土屋員安、木下新三郎、広東津田大尉に添書す。西本来訪、母堂危篤の電に接し明日の船にて帰国すと云ふ。夜小泉を訪ふ。河田某、津田在焉。暢談移時而帰。

正月十五日 晴。海軍に報告を發し、清子に復書す。朝弓術を修む。寒威極烈。午後上海日報を訪ひ、三時西本の帰国を送る。帰途平岡を訪ひ小談、帰る。営口上妻博路の信至る。商用にて和蘭、英国に出張すと云ふ。夜小泉来る、共に俊寛、鞍馬の二番を謡ふ。

正月十六日 晴。朝弓術を修む。河口介男に致書、浅井の件を依頼す。午後根津、友野、安河内を同文書院に訪ふ。友野より淵辺群平高照の書翰一通を贈る。夜佐々夫婦、並到北京財政部顧問河田貫三来訪。浅井寅、河口介男の信至る。

正月十七日 晴天。早朝食事を取り、去て弓術を修め、八時半平岡を誘ひ共に江湾附近に獵す。鳩一、小鳥三を獲、三時半平岡と相失し四時帰る。夜小泉来談。是日郊外無風、暖如春。

正月十八日 陰天。早朝弓術を修む。午前河田貫三を訪ふ。古閑信夫、河口介男、山田珠一、浅井寅喜に致書す。午後中島少佐、波多来訪。佐原、神寄、波多前後来訪。夜津田を訪ふ。

正月十九日 晴。狩野直喜の信至る。弓術を修む。夜佐々布、神寄、村上を訪ひ十時帰る。

正月二十日 晴。朝弓術を修む。午前中島、山成を訪ふ。午後平岡を訪ふ。波多、山成来訪。内人、古閑信夫の信至る。風邪の気味有り。佐藤眞一の遺族より其先人哀悼の一冊子を送り来る。

正月二十一日 晴。朝弓術を修む。内人に復書す。午後山成を訪ふ。齋藤少佐来訪。夜波多来訪。小泉と巴一番を謡ふ。

正月二十二日 微雨。朝弓術を修む。午後波多来訪。大野謙次郎に復書す。夜小泉と熊野一番を謡ふ。陸大尉浅井幸次郎来訪。

正月二十三日 朝微雪。弓術を修む。午前鈴木誠作来訪。江崎嘉三、黒井海軍中將、浅井寅喜、右田以德、河口介男、丹羽義次の信、並に漢口十年会連名の信片至る。鈴木、浅井を訪ふ。

正月二十四日 晴。朝来頭痛、心気不舒。弓術を修む。午前中野二郎を訪ひ暢談。正午佐々布宅に至り中食す。島田、波多同座たり。六時帰る。法科大学生富田亮正来訪。別府、中西の信至る。夜小泉の処に至り汁子の饗を受く。小督一番を謡ふ。中島少佐来訪。



正月二十五日 晴。海軍伊集院大佐に致書す。朝弓術を修む。午後波多、佐原を訪ふ。夜小泉来訪。

正月二十六日 雨。朝弓術を修む。午前理髮。速水、今井、迫の信至る。夜島田数、中島、平岡を訪ふ。

正月二十七日 雨天。朝弓術を修む。暖気晩春の如し。午後波多来訪。山田珠一、武藤巖男、上妻博路の信至る。上妻は英国行の途上香港より発信せる者なり。夜小泉と松風一番を謡ふ。

正月二十八日 晴天。朝弓術を修む。浅井、江寄嘉藏、別府に復書す。今井邦三に致書す。午後有吉、中島、西田、上海日報社を訪ふ。山田珠一、速水一孔、川口市之助に復書す。

正月二十九日 晴。朝弓術を修む。午後波多来訪。午前姚文藻を訪ふ。夜小泉と烏帽子折を謡ふ。

正月三十日 半晴。朝弓術を修む。伊集院俊、前島真、浅井寅喜の信至る。前島に復書す。七時福田少将、本庄少佐を車站に迎ふ。波多の処に小談帰る。山成来訪。

正月三十一日 陰。朝弓術を修む。午前本庄と談ず。中島少佐、西田来訪。午後神寄、波多来訪。一時二人と出て豊陽館に至り雷雨仙人の行術を見る。終て中島少佐の処に談じ五時帰る。七時陸軍少将福田雅太郎氏の招宴に六三亭に赴く。同座二十余人。十時帰る。

二月一日 微雨。朝弓術を修む。本庄少佐来訪。午後福田少将を訪ひ暢談。本庄の室にて中野二郎、齋藤、西田、神寄等と談ず。波多、小泉来訪。七時六三亭の福田少将招待会に出席す。十時帰る。雨。

二月二日 風雨。朝弓術を修む。正午福田、本庄、松尾の帰国を春日丸に送る。大瀧八郎来訪。午後大瀧を訪ふ。夜小泉の処にて渥美と三人七騎落を謡ふ。副島八十六、吉田寿三郎、郡島忠次郎、加藤壮太郎、並に内人の信至る。

二月三日 雨天。朝弓術を修む。波多を訪ふ。浅井、米原の信至る。多田成政の信至る。夜大瀧を訪ふ。

二月四日 陰天。朝弓術を修む。浅井、米原、山田珠一、並に内人に復書す。午前波多来訪。領事館より一月分経費を受取る。正午佐原宅に至り中食す。島田、神尾、波多同座たり。四時帰る。姚文藻を訪ふ。微雪。夜小泉、渥美と俊寛を謡ふ。

二月五日 半晴、寒気極厳。朝弓術を修む。菅村夫人、並に西本省三に致書す。下午齋藤少佐来訪。

二月六日 晴、寒甚。朝弓術を修む。寒稽は日を以て終了す。午後春申社、実業協会、中島、弓術倶楽部を訪ひ、五時篠寄都香佐を訪ふ。欧洲漫游を終へ帰来する者なり。六時帰る。夜汪鍾霖、姚文藻、大瀧来訪。白須の信片至る。

二月七日 雪。朝食後弓術を修む。午前積雪三寸許。小泉、渥美と鉢木一番を謡ふ。午後佐々布、平岡来訪。二時雪を衝て弓術倶楽部に至り、帰途佐々布の処にて汁子の饗を受て帰る。迫、伊集院、高道、小笠原陽雄の信至る。

二月八日 雨。午後波多、中島来訪。海軍に報告を發し、帰途弓術を修む。夜大瀧、小泉、来訪。

二月九日 雨。午前中島、齋藤を訪ひ、去て弓術倶楽部に至り弓術を修め帰る。午後神寄来訪。北京河田貫三の信至る。夜松岡玄雄来訪、小泉の処にて三人松風、羽衣、紅葉狩の三番を謡ふ。

二月十日 雨。朝中島を訪ひ小談。去て弓術を修む。浅井父子、富田亮正、今井邦三の信至る。夜小泉、平岡来訪。

二月十一日 微雪。午前実業協会に至り小談。去て弓術を修め、波多の処に至り佐々布と三人雅叙園に至り中食。二時弓術倶楽部に至り帰途山成を訪ふ。夜陳肇公卓来訪。小泉の室にて渥美と三人にて熊野、船弁慶を謡ふ。西本省三来訪、加須天羅を贈る。篠崎来訪。

二月十二日 陰。午前弓術倶楽部に至る。青島増田高頼に致書、並に東京宅に通信す。午後佐々布来訪。安河内亦来訪。夜平岡、篠寄を訪ふ。

二月十三日 晴。朝弓術を修め、上海日報社に至り、十時半白岩龍平を博愛丸に迎ふ。午前河野久太郎来訪、一昨夜帰来せりと云ふ。波多、賀来来訪。午後神寄、美濃部、中島少佐来訪。大野謙、古閑信夫、吉見春生、迫、藤森等の信至る。明日より平岡、山成と杭州に出発せんとす。獵装を整理す。夜三田、山成来訪。

二月十四日 晴天。是日陰曆正月元日たり。午後より出猟の為め諸準備を為す。齋藤少佐に致書す。零時半平岡、山成、三田来る。共に上車南門外車站に至り、二時の汽車に乗り杭州に向ふ。神寄、神津亦来会。六時半艮山門着。元日の為め拱宸橋行の汽車を發せざる為め徒歩鉄道線路至鉄橋之處予備する所の船に乗ず。時八時也。船小人多収容し難きを以て同行の諸人相伴て拱宸橋に至り一船を賃し来る。予、平岡、山成と同船、神寄、神津、三田の三人は別船に乗り、十一時半壩を過ぎ未明船を出し半山橋に至り泊す。

二月十五日 陰。前七時獵装して上陸し半山附近を獵し、僅に鴨二羽、鳴一羽を獲て正午船に帰り、食後広濟橋に船を移し獵す。無所獲、六時帰船。夜臨平の鉄橋下に泊す。

二月十六日 陰。七時脚揺船四隻を賃して之に分乗し六時東梅樹廟上陸。西梅樹、北方村を経て喬司に至り中食す。小鴨十羽、鳩一羽を獲、帰途平岡、山成に邂逅し、四時半東梅樹に帰り原舟に乗り臨平に帰る。雨。

船中得小詩一首

放獵歸來日暮時、半篷詩思對清漪、乾坤適動陽春意、只有寒梅一點知。

二月十七日 新晴。是日上海に帰ることに決せしも天気放晴の為め更に一日を延期し、平岡、山成、三田と七時船臨平を發し和睦聯橋に向ふ。神寄等は臨平より上海に歸去せり。九時和睦聯着、直に上陸。午後五時船に帰る。小鴨一、鶉一を獲たるのみ。晚食後開船、十二時拱宸橋に達す。和睦聯至此三十五支里。

二月十八日 陰。早朝起床。行装を治して船を出で拱宸橋駅に至り、七時四十分の汽車に乗り艮山門に至り、車を換へ十二時上海着。馬車を賃して帰る。是行獵獲僅に小鴨十三羽、鶉一、鳩一、過ぎず。午後白岩龍平、波多博、小泉來訪。白岩を留め晚食す。根津、佐原より十五、十七の両日に招邀を受けしも出猟中にて諾否を報ずるに由なかりき。川口市之助、増田高頼、同文会、姚文藻の信至る。

二月十九日 晴天。午前朝弓術を修む。中島を訪ふ。迫英輔に逢ふ。午後橘三郎、河野久太郎來訪。二時鹿島丸に財部中将彪を迎ふ。第三艦隊司令官として赴任せる者なり。五時半帰る。六時白岩、河野、橘と倶楽部に会食、寛談十時に及で散ず。本莊少將繁の信至る。

二月二十日 晴天。朝弓術を休む。正午六三花園に至り有吉領事の主催せる午餐会に列す。財部中將を主賓とし有吉、石井徹、藤村義郎、中島晋、江寄、白岩、木幡同座たり。午後三時散ず。財部、中島両氏と自動車にて高昌廟、徐家滙、湧泉路を一週して帰り、波多を訪ひ今夕の会食を辞す。天台道士還曆祝賀金一円を郵送す。青島有留に致書。姚、陳二人の書信を封送し転交を托す。六時福建路四川料理式々館の財部氏招待会に出席す。同座は有吉、藤村、石井、白岩、江寄、木幡、神寄、塚崎、齋藤和、村上義温、中島少佐等なり。九時散ず。財部中將を税関棧橋に送て帰る。迫良隆の信至る。

二月二十一日 晴天。午前弓術を修む。午後同文書院の根津氏を訪ひ安河内、友野等と小談。二時より書院の農工科実験披露式に列す。化学上各種の実験を行ひ、終て第一教室に於て院長の挨拶後茶菓の饗応有り。五時帰る。陳肇來訪。

二月二十二日 晴天。午前理髮、弓術を修む。午後中島少佐來訪。浅井周治の信至る。迫に復書す。郵便局、上海日報、大瀧を訪ひ、六時半篠崎招待会に倶楽部に出席す。同座は木幡、白岩、橘、村上、秋田、佐原、河野等なり。散後根津の帰国を筑後丸に送りて帰る。夜雨。

二月二十三日 半晴。朝弓術を修む。波多寓に至り萩餅を食し中餐して帰る。夜小泉來訪。

二月二十四日 半晴。朝平岡を訪ひ、去て弓術を修め帰る。波多來訪。河口、菅村夫人、前島真、松倉、迫の信至る。報告を作り、夜波多を訪ひ清書を托す。河口、前島、松倉に復書す。

二月二十五日 雨。午後弓術を修む。夜波多、陳肇、佐々布來訪。

二月二十六日 陰。海軍に報告を發す。竹下少將、山岡副官、北京吉田大佐に致書す。中島少佐、橘を

- 訪ふ。午後弓術を修む。波多来訪。夜松岡医院に至り謡会を催す。松岡父子，春日丸船長，渥美等同座たり。十一時半帰る。
- 二月二十七日 半晴。午前弓術を修む。午後河野を訪ふ，在らず，直に帰る。波多来訪。領事館より本  
月分経費を受取る。平岡，小泉来訪。姚の信至る。内人に致書し升允に姚より托されし書信二封を転  
寄す。中島，橘を訪ふ，在らず。
- 二月二十八日 快晴。八時より平岡，佐々布と江湾附近に郊游す。春色微動，寒梅満開，柳芽発青。午  
後四時帰る。白岩来訪せりと云ふ。夜陳肇来訪。伊集院俊の信至る。
- 三月一日 晴天。午前永瀧久吉を月廼家花園に訪ふ。一昨青島より来着せし者なり。小談，去て豊陽館  
に至り中島を訪ふ。郷田少佐に邂逅す。福州陸路来滬せりと云ふ。弓術を修て帰る。午後陳肇来訪，  
不日青島に赴くに付き紹介状を求む。即ち増田，鬼頭，中西，有留の諸人に添書を与ふ。姚文藻の信  
至る。午後波多来訪。夜橘の招宴に倶楽部に赴く。同座は永瀧久吉，李維格，白岩，大瀧，佐原，立  
川等也。十一時散す。
- 三月二日 晴。午前郷田少将を豊陽館に訪ふ。本日福州に帰る者なり。弓術を修め，帰途商務印書館に  
至り因是子静坐法三冊を購て帰る。松寄奎雄の信至る。午後山田純三郎来訪。夜小泉，篠寄来訪。
- 三月三日 陰天。姚文藻に復書す。午前弓術を修め，上海日報を訪ひ帰る。露京上田仙太郎の信片至  
る。岡幸七郎に詩信を發す。内人の信至る。波多来訪。夜永瀧歓迎会に倶楽部に出席。九時帰る。
- 三月四日 晴。朝弓術を修め帰。中島少佐，山田純三郎を訪ふ。午後報告を作る。
- 三月五日 晴天。海軍に報告を發し伊集院に致書す。午後永瀧久吉の帰国を送り，弓術を修めて帰る。  
山田修作来訪。夜小泉，渥美と竹生島，三井寺を謡ふ。午後平岡，橘を訪ふ。
- 三月六日 雨天。午前理髮，弓術倶楽部に至り波多と賽射して帰る。北京吉田大佐増次郎の信至る。長  
江虎臣に致書す。夜波多の処にて山芋汁を会食す。
- 三月七日 陰，風大。増田高頼，田中清司，浅井寅喜，多田成政，迫良隆の信，並に大隈伯，加藤男よ  
り副島八十六を衆議院議員に推挙の勧誘状至る。午前平岡を訪ひ小談，弓術を修て帰る。正午より平  
岡と呉淞行汽車に乗り張華浜に下車，江湾一帯を獵す。獲る所無くして帰る。微雨。夜小泉来談。
- 三月八日 晴。午前弓術を修む。午後成田鍊之助来訪，昨夜江西より帰来せりと云ふ。有留の信二通至  
る。有留，田中清司，浅井寅喜，内人に復書す。夜波多，西本来訪。七時平岡に抵り杭州会費貳十一  
元三四を渡し，中島を訪ひ小談。九時成田の帰国を税関碼頭に送て帰る。
- 三月九日 晴天。朝弓術を修む。午後中島少佐来訪。海軍に報告を作り，夜小泉の室に談ず。
- 三月十日 晴天。朝波多を訪ひ，去て弓術を修め帰る。午後波多来訪。松倉，迫の信至る。夜義勇隊の  
賞品授与式に倶楽部に参列し，十時帰る。海軍に報告を發し，別に名和第二艦隊司令長官，吉田大  
佐，伊集院，池部奎彦に致書す。
- 三月十一日 晴。松倉，迫に復書す。朝弓術を修む。午後齋藤少佐来訪。本日内地旅行より帰来せりと  
云ふ。河口介男，東京留守宅の信至る。河口，浅井正夫に復書す。海軍より四，五，六，三ヶ月分手  
当を送り来る。山岡副官に領収証を發す。午後日清公司以木幡，白岩を訪ふ，白岩不在。仏租界に至  
り之を訪ふ，在らず。帰途平岡を敲き小談，帰る。白岩，波多，佐々布，齋藤延，青柳六輔来訪。十  
六日の便船にて齋藤，青柳は門司三菱支店に転任すと云ふ。日支交渉險惡を極め陸軍を動員し守備兵  
交代の名義にて青島，天津，北京，満洲に出兵することに決定せりと云ふ。北京安藤，長沙香月に致  
書す。
- 三月十二日 雨。朝波多弓術を修む。午後中島少佐，橘三郎，神寄正助来訪。夜小泉，津田来談。
- 三月十三日 陰寒。朝弓術を修め，十一時半熱田丸に至り土屋前第三艦隊司令官を迎ふ。帰朝の途次な  
り。岡幸七郎の信至る。午後波多博，平岡小太郎来訪。夜佐々布，小泉来談。伊集院大佐の信至る。
- 三月十四日 晴天。日曜日。午前八時半より平岡，佐々布と江湾附近に獵し鴨一羽を獲，五時帰る。速

水一孔，山木弥三作，迫良隆の信至る。迫は十三日朝鮮に出発せりと云ふ。速水は芝三光町に転居を報じ、並に肅王の公子来朝，川島浪速宅に在るを報じ来る。山木よりは身上の事を依頼し履歴書を送り来る。

三月十五日 半晴。午前弓術を修め，正午佐原宅に至り白岩と三人中食す。亡夫人の三週忌に相当するを以て也。帰途姚文藻を訪ひ帰る。齋藤，中島両少佐来訪。夜平岡の処に至り会食す。

三月十六日 陰。午前中島を訪ひ，去て春日丸に至り齋藤，青柳，古屋，濱丈夫等の帰国を送り，弓術を修めて帰る。午後島田を訪ひ，去て有吉，西田に抵り小談，帰る。夜小泉来訪。

三月十七日 晴。朝理髪，弓術を修め，上海日報に小談帰る。午後橘，齋藤，秦を訪ふ。長江虎臣，加藤中佐の信至る。夜神寄，波多来訪。

三月十八日 晴天。午前弓術を修め齋藤，佐原を訪ひ帰る。晩食後佐々布を訪ふ，在らず。転じて波多に抵り，十時半帰る。

三月十九日 晴天。東京宅に致書し，外に海軍，九州日々社に通信し，長江虎臣，前島眞に信片を發す。午前弓術を修め，正午波多と加除園に至り中食す。姚文藻を訪ひ小談。

思ふ事ありて

春寒むみふけゆく秋の思あれはなと唐衣したてやむへき

有吉，西田，中島，島田を訪ひ帰る。夜中村芦舟来訪。渥美より米国産の林檎を贈り来る。

三月二十日 晴天。海軍に報告を發し一部を北京吉田大佐に郵寄す。弓術を修め，去て有吉を訪ふ，在らず。古谷，西田と談じ帰る。中食後秦長三郎俱樂部に於て午餐の案内状を見る。吉原洋三郎来滬せしを以て也。一時半之に赴く。吉原，白岩，大瀧，青木，澤本，土井同座たり。三時散ず。島田来訪。之と晩食を共にし，六時半より島田と東京席に至り浪花節の赤垣源蔵，其他二，三を聴き，十一時去て吉原を襄陽丸に送り帰る。長沙に赴く者なり。鳥居に信片を發す。藤井佐世保鎮守府長官の信至る。甲斐友比古来訪，昨日来着せりと云ふ。香港高島醇の信至る。夜汪鍾霖，姚文藻来訪せりと云ふ。

三月二十一日 晴天。日曜日。姚に致書す。八時半平岡と江湾に出獵小鳥一羽を獲，四時帰る。中島少佐来訪。夜白耳義難民救済金募集の為に開演せる東和活動写真を看，九時帰る。

三月二十二日 陰天。午前弓術を修め上海日報に小談，帰る。午後姚文藻を訪ひ汪鍾霖と三人会談。去て有吉を訪ひ小叙，中島の処に齋藤，山田等と談じ，五時帰る。安達高成来訪。白岩，中村，波多，佐々布来訪。波多と晩食を共にす。夜雨。

三月二十三日 晴。東京伊集院大佐に致書す。朝弓術を修む。伊集院，土屋少将の信至る。午後齋藤，中島両少佐来訪。中村芦洲来訪。晩平岡の処に至り鯛茶漬を会食す。永末船長，佐原，西本同座たり。十時帰る。

三月二十四日 陰。朝弓術を修め，齋藤を訪ひ明楊椒山の真跡を觀て帰る。午後山成，神寄来訪。亀雄，池部奎彦の信至る。波多来訪。

三月二十五日 晴。頭痛。朝弓術を修め，帰途上海日報に至り甲斐友比古と小談，帰る。亀雄に復書す。夜東京席に義士の講談を聴く。

三月二十六日 陰。午前弓術を修め中島，篠寄を訪ひ小談，帰る。午後波多来訪。夜東京席に赤垣源蔵徳利別を聴く。微雨。

泣くましと思へと袖のしくるゝは，昔を偲ふ涙なりけり。

三月二十七日 晴天。朝理髪後弓術を修め，実業協会に小談，帰る。大阪鳥居赫雄の信至る。北京吉田海軍大佐の信至る。波多来訪。

三月二十八日 半晴。前七時満鉄支社の案内にて税関埠頭に至り上船，黄浦江上游に舟遊を試む。満鉄の村井啓三郎，山田純以下社員七八人と齋藤，中島両少佐，及余の十余人なり。杜行鎮に上陸，余と



齋藤、山田、外二人狩猟を行ふ。正午舟に帰て中食す。饗応周到を極む。食後関行鎮の対岸に上陸、打猟、四時船に帰り晩食し、帰途に就く途中江上にて鴨二羽を獲、七時郵船碼頭に達し上陸、寓所に帰る。微雨。是日午後放晴、桃花半開、菜黄麦緑、春色如画。清遊一日心襟若滌を覚ゆ。

三月二十九日 晴天、春寒料峭。午前弓術を修め、去て有吉を訪ひ小談、島田を日報社に訪ひ帰る。午後波多、篠寄、姚来訪。領事館より本月経費二百円を受取る。長沙香月の信至る。七時齋藤少佐の処に至り中島、波多、四人にて山芋汁を会食、寛談十時に及で帰る。青島山口昇より其著青〔島〕事情一冊を送り来る。

三月三十日 晴天。午前弓術を修め、中島、篠寄を訪ひ晌午帰る。波多来訪。鳥居赫雄に復書す。迫良隆朝鮮より信、並に伊集院大佐の信に接す。午後同文書院三年生清水董三、保木本利治来訪。保木本は将来有望の青年也。

三月三十一日 雨。成田鍊之助の信至る。午前弓術を修め、帰途中島少佐を訪ふ。齋藤来会、四時帰る。小泉、河野久太郎、波多来訪。河野は本日帰来せりと云ふ。

四月一日 陰天。午前東洋協会々費十一月至三月三ヶ月分を送る。迫に復書。弓術を修め、帰途河野を順済公司に訪ひ帰る。午後篆刻士鶴田甲奎、赤星典太の紹介にて来訪。香港高島醇に復書す。青島軍政署野中保教の信至る。夜村上、小泉を訪ひ十時帰る。

四月二日 雨。朝弓術を修む。午後櫻木俊一來訪。神寄来談。

四月三日 陰。午前弓術を修め、帰途上海日報社に小談、帰る。午後波多、秦、中島少佐、海津、河野、塚本恵、並に同文書院生徒二名来訪。塚本は台湾より来りし者にて芭蕉飴一箱を贈る。夜平岡、佐々布、波多を訪ふ。

四月四日 晴天。午前八時より平岡と北郊に猟す。鳴一羽を獲、四時帰る。内人、河口介男、鳥居、上妻、同文会の信に接す。上妻の信片はポートセットより発せる者なり。

四月五日 晴。午前弓術を修む。岡幸七郎、平山岩彦に信片を發す。阿部野の信至る。之に復す。青島野中保教に復書す。西本来訪。晚平岡より案内有り、辞す。河野宅に至り白岩と三人会食、九時半帰る。

四月六日 陰天。海軍に報告を發し、北京吉田大佐に一部を送る。東京宅に金二百円を郵送す。午後郵便局に至り為替を取組み、去て中島を訪ひ、帰途弓術を修め、常盤に窪田篆刻士を訪ひ、実業協会に至り小談帰る。有蘭善行、青柳六輔、齋藤延、伊集院、並に杉浦天台道士還曆記念の写真、並に詩歌を送り来る。

四月七日 晴。午前理髪、去て弓術を修め帰る。田中清司、古閑信夫、亀雄の信至る。不在の時川村景敏来訪せりと云ふ。亀雄より柳葉魚の乾物を送り来る。午後河野、齋藤、中島、白岩来訪。五時白岩、河野と馬車を同ふし蘇州河上游の小公園に至り一遊。菜黄麦緑、春意可掬と雖ども、昨夜余寒料峭恰も冬令の如し。薄暮仏租界宝昌路白岩の処に至り三人会食、寛話十時半に至り帰る。

四月八日 晴天。午前川村景敏を常盤舎に訪ふ、在らず。橘三郎を豊陽館に訪ひ小談。去て弓術を修め帰る。午後波多、木下温知、佐々布前後来訪。夜に入て風声怒号。村山の信至る。

四月九日 晴天。村山正隆、松寄雀雄、河口介男、田中清司、有蘭善行、古閑信夫、亀雄に復書し、北京新支那社に信片を發す。午前弓術を修め、齋藤、中島を訪ひ帰る。菅村夫人に致書、郵便貯金通帳利子記入の事を托す。篠寄医院に至り鼻孔を滌ふ。海軍に訳稿を送る。夜平岡、佐々布を訪ふ。

四月十日 半晴。内人、浅井正夫、河口虎夫の信至る。内人、浅井、虎夫に復書し、山田珠一に一書を致す。鶴田甲奎来訪。午前弓術を修む。白岩、岡に詩信を發す。波多来訪。夜篠寄を訪ひ十一時帰る。前四時突風雷電、光景太烈、雨又至。

四月十一日 陰天。午前八時半より佐々布、平岡、三田、波多等と北郊に猟す。平岡、齋藤少佐、三田の家族亦来游。正午土墳上に会食。微雨時至時歇。三時帰途に就く。東鳥一羽を獲たるのみ。波多、

佐々布と途中西本新宅を訪ひ小談、帰る。安河内弘来訪せりと云ふ。夜渥美の処にて羽衣、蟬丸、鞍馬を謡ひ、十時散ず。

四月十二日 晴。午前弓術を修む。神尾、西本来訪。午後山本唯次、中野二郎、時事新報記者安岡秀夫、佐原篤介、岡吉次郎前後來訪。安岡は明治九年敬神党の変に殉難せし安岡良亮の二男なり。前田彪胃痛にて本月六日朝死去の訃至る。傷しい哉。去年三月福州にて分袂が永別となりし也。有吉領事より案内状至る。夜島田数雄来談。白岩の詩信至る。之に和す。夜半腹痛下痢。

四月十三日 雨。腹痛甚し。朝食就寝。午後四股発疹激痒を覚ふ。秦長三郎来訪。六時より有吉領事の招宴に月廼家花園に赴く。同座は安岡秀夫、石井徹、佐原篤介等也。十時帰る。全身痒甚。篠寄に至り葉を取て帰る。三井藤村義朗より園遊会の案内至る。全身癢を覚へ終夜不眠。

四月十四日 雨天。終日静養。四股の紅腫稍や減ずと雖ども癢甚。午後橘、河野来訪。兩人より各五円合せて十五円を奠儀として前田彪の遺族に送る。鳥居、平山岩彦、岡、吉見の信至る。安河内来訪。晩食後波多、篠寄来訪。七時半滬寧車站に至り伊集院俊を迎へ、帰途波多の処に小談。

四月十五日 雨。午前理髮。伊集院を豊陽館に訪ひ、正午三人有吉の処に至り共に出て中島少佐主催の午餐会に六三園に赴く。庭内桜花盛開、春雨霏々、風趣不可状。同座は伊集院大佐、有吉領事、石井徹、齋藤少佐、篠崎、中島の七人也。三時散ず。帰途佐原を訪ひ小談、帰る。古閑信夫、村山正隆の信至る。

四月十六日 陰。児玉篁南に致書す。山鹿素行全集予約の申込を為す。午前弓術を修め、伊集院を訪ひ、正午日支新聞記者会に倶楽部に出席す。同座は安岡、佐原、柏田、西本、波多、岡、神尾、並に支那人二名なり。三時帰る。伊集院、中島、齋藤前後來訪。上妻博路ジブラルタルよりの信片、並に竹下少将の信片に接す。夜有吉領事の招宴に月廼家花園に赴く。同座は伊集院俊、中島少佐晋、白岩、石井、木幡等なり。九時半帰る。

四月十七日 雨。午前竹下蔭に復書す。正午伊集院、安岡、秋田奈世の帰途を近江丸に送て帰る。午後鶴田来訪。友野盛来訪。六時より同文書院第二期生十週年記念会に倶楽部に出席、一場の演説を為し、食事後河野宅の研究所出身者の小集に臨み、十一時帰る。

四月十八日 雨。日曜日。九時より平岡と北郊に獵し鳴一、千鳥二を獲、午後二時帰る。井上雅二来訪せりと云ふ。三井藤村義朗より園遊会の案内有りしも雨の為に赴かず。午後井上雅二、中野二郎、齋藤を訪ふ、在らず。弓術を修め帰る。上妻博路和蘭アムステルダムよりの信片至る。晩賀来訪。八時上海日報社宅に至り浪華節高田馬場の一節を聴き、十一時帰る。

四月十九日 雨。前九時井上を豊陽館に訪ひ其新嘉坡行を送り、齋藤少佐宅にて中島少佐、木幡恭三、中野二郎と会し日支交渉案に付き商量する所有り。帰途弓術を修む。午後内人、並に菅村夫人の信至る。内人に復書す。古閑信夫に致書、電気株十株購入を托す。岡西門の詩信至る。晩平岡の処に至り鳥飯の饗を受け、九時帰る。安河内同座たり。

四月二十日 雨。午前窪田来訪。昼食後弓術を修む。齋藤少佐、橘三郎、河野来訪。中原治三郎、山内崑の添書を持し来訪。夜波多、佐々布来訪。

四月二十一日 積陰。午前弓術を修め、帰途佐原の病を訪ふ。児玉英蔵来訪。午後白岩龍平来訪。六時有吉領事の招宴に其官邸に赴く。西本願寺前法主大谷光瑞伯を主賓とし、同座は児玉正金、江寄、齋藤、中島、原田三菱、秦、西田、古谷、齋藤和、村上官補以下光瑞伯随員二人なり。十時半散ず。雨。古屋勝太郎の信至る。

四月二十二日 陰。午前弓術を修め、去て橘、中島を訪ふ。午後宮永祐雄、中俣國彦、林某、窪田、某来訪。宮永は熊本より来りし者にて、菅村より本人に托し羊羹を贈り来る。往日白岩と唱和の詩左に録す。

麦浪連天緑涵空、野趣蒼茫夕照中、九十春光看欲尽、江南江北落花風。

重韻答子雲。子雲詩有無限春愁鶯舌滑故軋句及焉

誰將紅豔擲東空，千里関山夢寂中，最是春愁鶯舌句，誦來罔腋覺生風。

正金銀行にて大谷光瑞師の法話有り。来会を促し来るも師の人格を信ぜざるを以て辞して行かず。河野来談，十一時に及で去る。

四月二十三日 陰。午前島田を訪ひ，去て西本省三に抵り其母堂の死を弔し，転じて領事館に有吉を訪ひ小談。中島少佐の処に齋藤少佐に会し，十一時弓術倶楽部に至り弓術を修め帰る。北京亀井陸良より日支交渉事件に付き政府勇断を促さんことを商量し来る。海軍に時局に関する私信を發す。平岡小太郎来訪。夕刻齋藤，中島を訪ふ。夜波多，佐原を歴訪し，佐々布の処に至り，十時帰る。

四月二十四日 陰天。午前理髮。篠寄病院に山田純の病を訪ひ，去て弓術を修め帰る。齋藤少佐，鈴木誠作来訪。鈴木は南洋より帰来せる者なり。浅井寅喜，同正夫，亀雄，松倉の信至る。浅井父子に復書し内人に致書，正夫の信を封送す。菅村三之に復書す。午後白岩を日清公司に訪ふ，在らず。今夕の船にて帰国すと云ふ。午後中島少佐来談。

四月二十五日 陰天。日曜。北京亀井陸良に復書す。午前八時より平岡，佐佐布等と北郊に獵し獲る所無し。四時帰る。雨。

四月二十六日 雨。午前鈴木誠作を訪ふ。其杭州行の為に瀬上怒治に添書を与ふ。唐津古屋勝太郎に復書す。晌午弓術を修て帰る。齋藤少佐，波多来訪。名和第二艦隊司令長官の信，並に大井中佐，川口市之進，迫良隆，村山正隆，東京宅の信に接す。本月十八日より芝松本町四四番地に移転せりと云ふ。森少将越太郎，藤瀬政次郎，吉田寿三郎，松岡千寿，川口市之進，名和中将，留守宅に致書す。夜鈴木誠作来訪。

四月二十七日 雨。鳥居赫雄に復書す。午後弓術を修む。齋藤少佐来会。ともに百射を試み，終て中島少佐を訪ひ帰る。河野，高木陸郎，波多来訪。

四月二十八日 晴，暖如首夏。波多来訪。午前波多と弓術を修む。迫に復書す。井上雅二の信片至る。午後平岡小太郎来訪。夜河野を訪ひ十一時帰る。昨今兩日寒暖差二十度に及べり。

四月二十九日 陰天。午前四時半起床。五時より平岡と北郊に獵す。シャクヌギ二羽を獲九時帰る。午後弓術を修め佐原を訪て帰る。夜鈴木誠作を訪ふ。

四月三十日 陰天，薄寒又た外套を用ゆ。天時不順。今春の若きは蓋復た罕なり。午前弓術を修め，去て齋藤少佐を訪ふ。大谷光瑞師亦来会。帰途新利洋行に至り小談，帰る。午後齋藤少佐，神尾来訪。齋藤と出て姚文藻を訪ふ。夜波多，平岡前後来訪。

五月一日 陰天。午前弓術を修め，中島少佐，中野二郎，実業協会を訪ひ帰る。河野来訪。井手三郎の信至る。福州に於ける前田彪の遺業たる閩報の処分に就き天野福州領事に致書依頼する所有り。迎英輔，神寄来訪。神寄本日帰来せりと云ふ。晩波多の処にて山芋汁を会食す。九時帰る。

五月二日 快晴。前五時半平岡，東，佐々布と江湾に獵す。帰途神崎，三田獵して帰るに遇ふ。鳴二羽を獲六時帰る。

五月三日 晴天。午前弓術を修て帰る。白岩，松倉に信片を發す。午後齋藤少佐来訪。古城貞吉，古閑信夫，東京宅の信至る。古城貞吉，古閑，並に内人に復書す。

五月四日 快晴。午前弓術を修め，河野，齋藤，中島を訪ふ。河野来談。正午有吉領事の案内にて倶楽部に会食。日支交渉陰惡を告げ今明日を以て支那政府に最後通牒を送り尚反省せずんば自由行動を取ることを決定せしを以て，有吉，藤村，石井，木幡，河野，櫻木俊一，児玉等と決裂後の処分に付き商量し，二時散ず。河野宅に至り小談，帰途狄平を訪ふ，在らず。長沙佐々木武蔵より湘筆一箱を贈り来る。佐々木に礼状を發す。中村芦州，迎英輔来訪。晩波多，神寄，平岡，佐々布，渥美来訪。

五月五日 晴天，風大。海軍に号外報告を發す。鳥居の信至る。之に復す。午前河野来訪。中食後平岡の処に至り江湾に出獵せんとす。平岡事故の為に中止。三田と共に馬車にて江湾に至り鳴三羽を獲，

江湾六時半の汽車にて帰る。

五月六日 晴。午前波多、佐原、中島、齋藤を歴訪、弓術を修て帰る。午後波多、櫻木、齋藤少佐来訪。名和中将、吉田大佐、本庄少佐、加藤中佐壮太郎、増田大佐、鳥居、田鍋に時局に対する意見書を郵送す。夜河野を訪ふ。

細戈千足の国のほことりて唐の醜草刈り尽さまし

五月七日 半晴。午前中島、有吉、西田、上海日報を訪ひ、弓術を修て帰る。狄楚青来訪。齋藤少佐来訪、連名にて青木中将、増田、秋元に信片を發す。阿部野、並に内人に信片を出す。山田珠一、吉田寿三郎、英国上妻博路、福島豊太郎、今井邦三の信至る。山田より浅井家と離婚の事を報じ来る。橘三郎、神寄正助前後来訪。夜河野久太郎一家の帰国を送る。橘の処にて大谷敏一に面す。十時半帰る。

五月八日 晴。上海日報、齋藤、中島両少佐、中野二郎等を訪ひ、弓術を修て帰る。狄、安部政次郎等来訪せりと云ふ。井上良平来訪。青島有留の信片至る。有留に復す。阿部政次郎来訪。神寄、波多、澤本、木下、狄等来訪。

五月九日 晴天。田鍋、岡に詩信を發す。谷口大佐尚眞に信片を發す。

詠史

偏安宋室久逡巡、痛飲黃龍豈乏人、十二金牌終古恨、興亡有感軫傷神。

午前七時平岡、佐々布、三田と江湾付近に出獵、鵠四羽を獲二時半帰る。是日午後六時は我最後通牒に対する支那の決答期限たり。我通牒の讓歩に出でしを以て支那政府は悦で是に応ずべく、此の好機を以て撻伐を加ふる能はざりしは終古の恨事なり。神寄、山本唯次来訪せりと云ふ。夜波多の処にて獵獲物を会食す。賀来来会。終て賀来と佐々布を訪ひ、十時半帰。雨。

五月十日 雨天。午前弓術を修めて帰る。午後中島少佐晋、神崎、木下等来訪。迫の信至る。是日理髮。

五月十一日 晴天。海軍に報告を發す。弓術を修め有吉領事、上海日報、佐原を訪て帰る。午後齋藤少佐来訪。浅井寅熹の信至り山田家と離婚断行の事を商量し来る。波多、佐々布来訪。晚倶楽部の漢口会に出席す。同座は橘、大瀧、木幡、蝦名、高木、横山直宗、中地、和田、古谷、横田、津田、立川、米里等なり。席上合作の信片を漢口瀬川、岡、大岡、長安、小林、河野豊□、西澤等に致す。十時半散ず。

五月十二日 晴天。午前弓術を修め、実業協会に小談帰る。岡に漢口会の状況を報ず。山田、浅井両家の事に付き内人に致書す。英京滞在中の上妻博路に復書す。

五月十三日 晴。午前中島を訪ひ、去て弓術を修め、佐原を訪ひ帰る。古閑田奎子、廣岡理則、古屋勝太郎の信至る。午後波多来訪。村山正隆の信至。木下来訪。夜西本来談。内人、古城、今井嘉幸の信至る。

五月十四日 晴。東京宅に致書、金百円を送る。齋藤少佐を訪ひ共に出て弓術を修む。中島少佐本日より入門す。午後齋藤、橘、神尾、西島時義、平原文三郎来訪。平原は新嘉坡に赴く者なり。五時橘三郎の帰国を税関碼頭に送て帰る。波多来訪。

昨日漢口に排日暴動起り、日本商店十余所を破壊し邦人の死者、並に踪跡を失せしもの数名を出せり。

夜篠寄都香佐来訪。

五月十五日 晴。午前弓術を修む。波多来訪。領事館より四月分経費を受取る。木下温知、中島少佐来訪。雷鳴閃電、屋瓦皆震大雨如注。夜平原文三郎を松崎洋行に訪ひ別を叙、送行の詩一首を贈て帰る。

建業南荒已絶群、紛々名利若浮雲、薰風五月申江上、柳絮飛時又別君。

五月十六日 晴。前七時獵装して村上宅に至り共に出て平岡、木下、三田、佐々布、柳田等に会し、江湾附近に獵し鵠二羽を獲、六時佐々布宅に帰り会食し、十時帰る。古莊嘉門翁の訃に接す。本月十一日逝去せりと云ふ。鳥居、森少将越太郎の信、並に北京巖谷博士、實相寺、檜寄桂園、岡田晋太郎等



合作の信片至る。

五月十七日 晴。午前中島を訪ひ共に弓術を修め帰る。午後早稲田大学生久我嘉平、花田半介、西本来訪。古莊頼に弔詞を致し奠儀二元を贈る。木下温知来訪。岡幸七郎、本庄少佐、今井邦三、松寄奎雄、田鍋安之助の信至る。夜塚本恵、金栗某、外□後人二人、佐々布来訪。金栗以下の県人は当地に於ける東洋競技大会出席の為来滬せる者なり。

五月十八日 陰天。午前弓術を修め、理髪して帰る。午後佐原を訪ひ三時帰る。齋藤少佐来訪。

五月十九日 晴。午前弓術を修め、齋藤少佐、佐原を訪ひ帰る。午後波多来訪。三時より新公園に至り東洋競技会を觀、五時半帰る。六時半倶楽部の□焼会に出席す。同座は齋藤、中島、神寄、塚原、中野二郎、西本、波多、平岡等なり。十時半散ず。

五月二十日 晴。午前根津同文書院長を訪ふ。昨日帰来せる者なり。暢談時を移し、去て弓術を修め、中島少佐の処に小談帰る。

五月二十一日 雨。午前根津一氏来訪。午後弓術を修む。波多来訪。東京宅に発信す。帝国保險会社員河寄譽来訪。夜東和影戯を□三十分見て帰る。

五月二十二日 陰。午前中島、齋藤と弓術を修む。岡、吉田大佐、内人に歌信を發す。増田大佐の信至る。夜佐々布来訪。

ほころひてきるすへもなき唐衣また来ん秋に打ちなほさはや

五月二十三日 晴。日曜。前七時より平岡、□□と江湾に出獵、千鳥二羽を獲二時帰る。山田純三郎来訪。五時半より弓術倶楽部の総会に出席、七時帰る。加藤中佐壯太郎の信至る。

五月二十四日 晴。午前齋藤を訪ひ、弓術を修め帰る。午後山崎誠軒、波多博来訪。吉原洋三郎、並に東京宅の信至る。海軍に私信を發す。晚齋藤少佐の招邀に崔亭に赴く。同座山崎誠軒、波多、西田、西本等也。十時散ず。

五月二十五日 陰天。午前弓術を修め、帰途佐原、波多、山寄を訪て帰る。宮島大八、白岩龍平に歌信を發す。午後世界旅行者菅野力夫来訪。晚東洋競技会選手として来滬せる熊本人金栗四三、多久、津村等の慰勞会に倶楽部に出席す。会者同県人三十余人。十時散ず。岡幸七郎、姚文藻の信至る。

五月二十六日 陰天。亀井陸郎に病氣見舞状を發す。午前弓術を修め、中島、有吉を訪ひ帰る。内人、吉見春生、井芹経平の信至る。山田珠一、浅井寅熹、同正夫に致書、同家離婚の事を正式に通告す。井芹に復書す。同文書院学生清水董三、外一名来訪。其旅行記の序文を乞ふ。

五月二十七日 晴。午前弓術を修め齋藤を訪ひ、転て姚文藻を敲き帰る。平原文三郎の信至る。午後同文書院根津、友野を訪ひ、清水学生旅行記の序文を与へ、去て中島を訪ひ、再び弓術を修て帰る。七時中島少佐の招宴に六三亭に赴く。同座は齋藤少佐、塚原、山田也。十時帰る。井芹に信片を發す。熱度頓高八十度に昇れり。

五月二十八日 晴。内人に致書す。午前中島少佐を訪ひ、弓術を修めて帰る。

赤羽根あかね詠めを君とまたしばしばめでん芝園の辺に

内人、有留、前島未亡人の信至る。内人に復書す。

五月二十九日 晴天。海軍に報告を發し、九州日々紙に通信を送る。午前弓術を修、上海日報に小談。荒田武郷の帰国を博愛丸に送て帰る。波多来訪。財部第三艦隊司令官、並に宮島、田鍋等に報告の写しを郵致す。山崎誠軒、中島少佐来訪。夜波多の処に至り山寄の漢口行を送て帰る。

五月三十日 晴。日曜。午前青木喬来訪。午後一時弓術倶楽部の大会に出席。会者三十人成績不良。七時散ず。

五月三十一日 晴。弓術を修む。午後波多、齋藤来訪。本日外務省の手当を受取る。奉天佐藤大佐安之助の信至る。白岩龍平、並に東京宅の信至る。

六月一日 晴。午前中島を訪ひ共に弓術を修む。午後佐原、波多、児玉英藏等来

訪。東京宅に発信す。

六月二日 陰、風大。午前中島、波多と弓術を修め、去て有吉を訪ひ、帰途福家より菓子を買て帰る。

甲斐友比古、井手照人來訪。賀來來訪。

六月三日 晴天。甲斐の湖北湖南行に托し深澤、岡、香月、角田、川口、有安、松寄等に紹介状を与へ、同人に托し岡、香月に写真を贈る。午前弓術を修め、正午井手照人の午餐に赴き、二時帰る。同座は佐原、島田、神尾、波多等なり。浅井寅熹、村山正隆の信至る。秦長三郎來訪。夜中村重二郎、佐々布來訪。

六月四日 雨。午前関口隆正を勝田館に訪ふ。福州より来れる者也。弓術を修て帰る。篠寄都香佐來訪。晚秦長三郎宅の旧雨会に出席す。同座は関口隆正、青木、澤本、土井、井手照人等也。支那料理の饗有り。十時散ず。

六月五日 晴。午前弓術を修め、有吉、篠寄を訪ひ帰る。午後波多、迎來訪。鳥居、狩野の信片至る。安河内來訪。

六月六日 陰。海軍に号外報告を發す。午前弓術を修め中島を訪ふ。午後一時半より六三園の義勇隊員招待会に出席、四時帰る。五時半名物屋の小集に出席す。同座は佐原、島田、西本、神尾、波多等也。八時半散ず。

六月七日 晴天。午前弓術を修め、正金銀行に至り金百五十円を受取り、帰途弓術を修め、正金銀行に至り金百五十円を受取り、帰途弓術を修、実業協会に小談、帰る。亀井陸良、内田友義、加藤中佐の信、並に前島遺族より香典の返しを送り来る。時事新報安岡秀夫より其著書の序文を需め来る。一篇を草して之に贈る。

六月八日 雨天。安岡、内田友義、前島未亡人、白岩龍平に復書す。午前佐原を訪ひ、去て弓術を修む。波多、中島來会。理髪して帰る。海軍より七月至九月手当九百円を送り来る。海軍に長沙村山よりの報告を郵送す。軍令部山岡副官に致書、並に金子領収書を送る。夜島田数雄來訪。

六月九日 陰。午前中島を訪ひ齋藤少佐と三人弓術を修め帰る。山崎誠軒の信至る。午後六神丸、筆墨を買ふて帰る。京都中野武兵衛の訃至る。先年世界漫遊を共にせし人なり。夜姚文藻來訪、李梅庵の字帖三冊を贈る。夜賀來來訪。

六月十日 雨天。中澤潤に弔詞を出し、満鉄公所佐藤大佐安之助に復書し、外に外務省青木新に致書、吉田寿三郎身上の事を依頼す。吉田に信片を發す。午前上海日報、豊陽館、齋藤を訪ひ、去て中島、齋藤兩少佐と弓術を修て帰る。午後齋藤少佐來訪。有吉領事、波多博來訪。夜古澤藤三郎、中村重三郎來訪。

思ひわひさみたる、夜の物憂きに心もしらてなく時鳥

六月十一日 陰天。伊集院、並に内人に致書。午前中島、波多、齋藤と弓術を修む。天野恭太郎、迫良隆の信片、並に小池信美の訃至る。

六月十二日 晴。午前弓術を修め、帰途篠寄を訪ふ。正午帰る。中島少佐來訪。午後木下温知、小泉土之丞來訪。齋藤少佐より荔枝一簍を贈り来る。七時倶楽部の弓術会に出席、十一時帰る。

六月十三日 晴天。日曜日。前九時よりクレ射撃に赴く。平岡、渡辺、佐々布、高田、木下等來会。十一時小泉宅に中食す。神寄、佐原同座たり。二時辞帰。平岡小太郎明後日より青島、済南地方に旅行するを以て、目下該地方に在留する野中大尉、中西正樹、鬼頭玉汝、島田儀市、森岡正平、佐野恭、望月義光等に紹介を与ふ。

六月十四日 晴。午前中島を訪ひ共に出て弓術を修め、齋藤の処に小談帰る。午後西本、齋藤少佐來訪。浅井正夫、大坂中島為喜の信至る。波多來訪。夜齋藤、中島と倶楽部に至り虎丸の元禄快拳録の講談を聞く。十二時帰。

六月十五日 晴、熱。午前理髪、弓術を修む。午後波多來訪。軍令部の信至る。晚平岡宅に至り鯛飯を

会食す。永末丹波丸船長、安河内、島田、佐原、波多、西本等同座たり。九時散ず。

六月十六日 晴。午前中島を訪ひ共に出て弓術を修て帰る。午後安河内来訪、六時共に出て瀧山碼頭の丹波丸に至り永末船長の晚餐に列す。西饌の饗有り。九時辞帰。午後大雨、夜に入て又雨。

六月十七日 雨。是日陰曆端陽の節に属す。午前九時神寄を訪ひ、出て射的を為す。神津、山成来会。

正午帰。午後弓術を修む。波多、中久喜等来訪せりと云ふ。石寄良二に信片を發す。

六月十八日 朝微雨、午後晴。午前中久喜信周を勝田館に訪ひ、去て弓術倶楽部に至り波多と百射を試む。中的五十二箭。正午帰る。午後波多来訪。五時より春申社主催の三馬路別有天の宴に列す。春申社員、並に齋藤、中島、以下同文書院修学旅行生二十名也。八時散ず。

六月十九日 晴。午前中島と弓術を修む。午後同文書院植村久吉、頭山立助来訪。内人、菅村夫人、並に白岩、井手、永瀧、大谷、河野、橘等合作の信片至る。

六月二十日 朝雷雨、九時休む。是日獵友会射的大会を催す。出て村上宅に至り小談。十時会場に至り各種の競争射的を為し、余一等賞の銀盃を得。会する者神寄、江原、神津、渡辺、山本、志保井、山田、高田、小平、十余人。二時散ず。是より丁興里の弓術会に出席、五時帰る。波多来訪。六時半根津の歓迎会に倶楽部に出席、十時半帰る。

六月二十一日 晴。内人に復書す。午前安河内、佐々布を訪ひ、去て弓術倶楽部に至り、正午帰る。内人、並に古閑信夫の信至る。新嘉坡平原文三郎、海軍伊集院、安岡秀夫の信至る。内人に復書す。夜佐々布を訪ふ。

六月二十二日 晴雨無定。午前理髮、弓術を修む。中島為喜、河口介男、菅村夫人、古閑信夫に致すの信を認む。古閑には三百金通融の要求に承諾を与ふ。

六月二十三日 晴。午前弓術を修む。午後波多、中島、並に天津駐屯軍參謀岡欽一來訪。有蘭、河口、古閑、豊岡保平の信至る。有蘭は見習士官と為り満洲に赴任せりと云ふ。午後姚文藻を訪ふ。夜渡邊中港堂来訪。

六月二十四日 雨。午前正金銀行に至り五百元を受取り、弓術を修て帰る。岡參謀欽一を訪ふ。午後波多来訪、四百五十元を貸与す。台銀に江寄、黒葛原、去て中島を訪ひ帰る。佐原来訪。香月、川口市之助の信至る。晡時中村芦舟来訪。

六月二十五日 晴。午前中島、有吉を訪ひ、去て弓術を修め帰る。午後中村来訪。五時村上喜久次の葬儀に東本願寺に列す。六時半県人会に倶楽部に出席、十時半帰る。

六月二十六日 晴天。午前齋藤を訪ひ、去て中島と弓術を修む。真砂焼花瓶一個を購ふ。午後平岡小太郎、島田数雄、中島少佐、清水董来訪。六時より中島、島田と台湾銀行江寄、黒葛原の園遊会に六三園に赴く。八時半帰る。雨。

六月二十七日 雨。八時江寄眞澄の送別射的会に出席す。会者二十余人。余三等賞を獲、午後一時帰。三時同文書院二期生の卒業式に倶楽部に赴く。五時終る。立食の催有り。六時弓術倶楽部に至り射を試み、七時半江寄、水津の送別会に倶楽部に出席す。江寄は新嘉坡に転任する者也。八時半帰。熱甚。是日朝来心気不舒。夜に入て漸く愈ゆ。

六月二十八日 陰。午前弓術を修む。午後同文書院生栗原猷彦来訪、本日より修学旅行の程に上ると云ふ。植村生亦た来訪、四川宮坂、葛西、中川に紹介を与ふ。海軍伊集院中佐、香月梅外の信至る。香月に復書し小池信美の息信行に其父の弔詞を發す。

六月二十九日 晴雨無定。七時齋藤少佐の山東行を車站に送り、帰途弓術を修め帰る。午後波多、清水董三来訪。外務省本月分手当二百円を受取る。神寄正助、波多来訪。

六月三十日 雨。海軍に報告二通を發し、別に第三艦隊財部司令官に一通を郵送す。午前波多来訪、共に出て中島を訪ひ三人弓術を修め、正午理髮して帰る。河口介男の信至る。小池外務省政務局長に致書、北京商務總會の印行物を小包にて送る。午後保木本、中島少佐来訪。夜賀来、波多を訪ふ。

七月一日 雨。午前郵便局より中島の処に至り、去て弓術を修め、帰途根津一氏を同文書院に訪ふ。本日帰朝するを以てなり。

七月二日 雨。午前中島を訪ひ、去て弓術を修め帰る。午後同文書院熊本学生来訪。海軍に報告を發す。夜近江丸に至り江寄眞澄の帰国を送る。

七月三日 半晴。朝波多を訪ひ、去て弓術修め、篠寄、佐々布を訪ひ帰る。狄葆賢来訪。内人、菅村夫人、古閑夫婦、西村時彦の信至る。午後狄平、友野盛来訪。夜篠寄の招宴に赴く。同座は中島少佐、佐原、島田、安河内、西田等なり。十時帰る。佐原より鰯魚糟漬一瓶を送り来る。

七月四日 陰天。前八時射的に赴く。会者十人成績不良也。午後一時散ず。神寄の処に中食し、三時半帰る。時報館より正月至六月の欸三百元を送り来る。島田数雄来訪。

七月五日 晴。午前弓術を修め、去て西田を訪ふ。午後波多、狄来訪。午後領事館に至り有吉、西田と小談。山鹿素行全集刊行会に第一回会費二円を郵送す。狄に致書。午後六時神寄宅の北京会に出席す。同座は天津の森川、並に佐原、波多、西田、中島、小泉等也。九時帰。岡幸七郎、川口市之助、波多重雄の信至る。

七月六日 陰。狄来訪。午前弓術を修め、去て有吉領事を訪ひ正午帰る。

七月七日 晴雨無定。理髮後弓術を修め、上海日報、篠寄を訪ひ帰る。午後有吉領事、田中徳義、狄平、波多来訪。夜村上婦人、神寄に抵り小泉の処に暢談、十時帰る。熊本市原源二郎、衾倉善家の信至る。

七月八日 半晴。午前中島を訪ひ、去て弓術修め帰る。午後波多、櫻木、安河内来訪。

七月九日 晴、熱漸く加ふ。午前弓術を修む。午後五時より神寄、木下、水谷と射的を為し、六時半帰る。同文書院熊本出身卒業生林重治、飯塚卯三郎来訪。天津駐屯軍司令部參謀岡少佐欽一の信至る。

七月十日 晴天。午前安河内、齋藤延の帰国を送り、弓術を修て帰る。午後波多、櫻木来訪。櫻木より鍋島論語葉隠を借て之を読む。

七月十一日 晴、熱甚。寒暑表九十五度。九時より月並射撃会に出席。第一等賞、並に三等賞を得、一時帰る。波多、賀来来談。賀来と中食す。宮地貫道来訪。

七月十二日 晴。午前弓術後中島を訪ひ帰る。午後中村、西田畊一來訪。村上夫人、平岡、櫻木を訪ふ。

七月十三日 晴、熱甚。内人、伊集院、小池外務省政務局長、小笠原陽雄の信至る。書家千葉青藍、並に波多来訪。午前弓術を修め、理髮して帰る。午後佐原宅、波多を訪ふ。夜松岡玄雄、佐々布を訪ひ、九時半帰。

七月十四日 晴。午前弓術を修む。午後中村来訪。夜大雷雨、焰威為に一掃せらる。

七月十五日 晴。午前弓術を修む。午後佐原来訪。齋藤少佐恒に留別の五古一首を得。中島少佐来訪。

君本勒銘才，韜略誰爭魁，加之以文采，文武即双該，  
兩道不可岐，絳隨古所嗤，世下俗逾薄，難覓文武師，  
萬方今多難，東海又揚瀾，非有真人出，焉致天下安，  
別君我先行，難禁故旧情，江門再相見，對酒聽秋聲。

夜公園に納涼。帰途福家に氷を飲で帰る。

七月十六日 晴。朝寺西大佐来談、昨日来着せりと云ふ。午前中島を訪ひ、共に弓術を修め帰る。午後寺西を訪ふ。東京留守宅に致書、二十四日出発帰国を報ず。夜佐々布を訪ふ。

七月十七日 晴。朝早稲田大学生原田重徳、八木知一來訪。井手、緒方、中島半次郎等の紹介状有り。午前兩人を伴ひ実業協会、有吉領事、上海日報社を訪ひ、帰途弓術を修む。吉見春生の信至る。神寄来訪、成田安輝の死を報ず。

七月十八日 晴。午前神寄、神津、平岡、水谷と射的を為し、正午帰。午後波多、島田来訪、七時兩人を誘て新鵜に鰻飯を吃し、八時半帰る。



七月十九日 晴。午後佐原，神尾，賀来前後来訪。伊集院大佐の信片至る。夜波多の処にて島田と三人山芋汁を会食す。

七月二十日 晴。甲斐来訪。伊集院，菅村，河口に致書す。午後弓術を修む。石原に信片を發す。

七月二十一日 晴天。成田鍊之助，市原源二郎に各其兄の死を弔す。午前郵便局に至り海軍よりの送金を受取り，弓術を修めて帰る。午後姚文藻を訪ふ。晩食後弓術俱樂部に至り，八時帰る。佐々布来訪。杭州辻定吉の信至る。之に復す。

七月二十二日 晴。午前郵便局に至り五百円を為替に付し，郵船会社に至り往復船票を購て帰る。再び出て中島少佐を訪ひ，共に弓術を修む。午後波多，中村来訪。根津一氏の電報至る。之を井芹経平に郵寄す。西田畊一，姚文藻来訪。夜に入て去る。安岡秀夫に致書す。

七月二十三日 午前晴，晡時より大雷雨。領事館に至り有吉，西田，村上，齋藤，古谷を訪ひ告別，去て上海日報に島田列を訪ひ，弓術を修て帰る。午後行李を整ふ。平岡，井手，原田，八木，中村，西本，中島少佐，西山等来訪。鳥居の信片至る。島田，波多，佐原，小泉等来訪。

七月二十四日 晴天。是日国に帰らんとす。前七時半東和を出て筑後丸に上る。中島少佐，神嵩，島田，波多，神尾，西本，井手照，佐々布，原田，岡田有民，塚本，岡，薛，西山，賀来，渡辺，外二三来訪。八時開船。午後頭暈，夜食を用ひずして臥す。

七月二十五日 晴。海上平穩。早朝入浴。午後五時五島の大瀬崎を望む。夜十二時長崎港に入る。

七月二十六日 晴。前五時起床。船検疫所の前に泊す。満月嵐翠，心気欲蘇。六時半検疫後税関に上り検査を受け，八時土佐屋に投ず。大阪朝日特派員二島菊次郎，大阪毎日宮田，長崎日々村上千代吉来訪。十一時の汽車にて茶棚，皮箱を東京に送り内人に致書，荷物預証を送る。上海東和，波多，中島に信片を發す。熊本菅村に打電す。上海神嵩，佐々布，渡辺俊郎，賀来に信片を發す。清子に同様。十時土佐屋を□し車站に至り，十一時の夜行にて熊本に向ふ。

七月二十七日 晴。午前四時鳥栖着。更に車票を買ひ熊本行に換車す。黎明久留米を過ぐ。残月曉風，近水遠山宛として遼陽と太子河との形勢に似たり。七時半上熊本着。菅村，板井来迎，新屋敷の宅に帰る。友野盛，九州日々宇野某，田中，河口，古閑等来訪。

七月二十八日 晴。午前田中，佐々布，河口，小早川，板井，古閑宅を歴訪す。晌午帰る。緒方，阿部野，松倉来訪せりと云ふ。肥後銀行坪井支店に至り金千円を東京支店に滙送す。夜河口宅の招邀に赴く。

七月二十九日 晴。午前五時五十分の川内直通車にて宇土に至り，法華寺，城山の先塋を展し，宇土駅に帰り茶店に投じ休憩，八時半の汽車にて帰る。忝倉善家を訪ひ，十時鎮西館に井手，平山等と談じ，正午帰る。上妻博之，石原醜男，佐々布遠来訪。四時竹田屋の招宴に赴く。来会者井手，山田，三浦，古莊，平山，三津家，岡，緒方，阿部野，小山，忝倉，小早川等なり。九時半散ず。歩して帰る。

七月三十日 晴。午前井手三郎，山田珠一来訪。東京宅に肥後銀行滙票並に郵便為替券を郵送す（郵為替五百円，銀券千円）。大阪鳥居に信片を發す。午後井手友喜を訪ふ。石原醜男来訪。夜行にて東上せんとす。行装を治す。井場，佐々布，荒木，外一名来訪。

七月三十一日 晴。午前一時菅村三之と共に新屋敷の宅を出て上熊本に至り一時四十五分の汽車に乗ず。七時半門司着，菅村と分袂。八時下関に渡り九時五十分の急行車に乗ず。佐藤潤象と同車たり。夜熱甚。

八月一日 晴。前四時起床。車已過名古屋，八時静岡着。天半之芙蓉玲瓏不着一塵，甚為偉觀。

天神の手に置かれたる富士の根ハ豊葦原のかさしなりけり

午後二時一七分新橋着，佐藤と別れ乗車三田松本町の寓に入る。妻子と懽談夜更に及ぶ。波多，並に英国上妻の信に接す。

八月二日 雨。涼味可掬。終日静養，不出門。

八月三日 晴。上海齋藤少佐の信至る。午後白岩龍平来訪。

八月四日 雨。午前海軍省に伊集院，田中両大佐，山岡，谷口両副官，山下軍令部次長を訪ひ，去て外務省に小池政務局長を訪ひ，転て白岩，山内を歴訪して帰る。吉田寿三郎来訪。

八月五日 雨。午前海軍軍令部より慰労として金五百円を送り来る。佐原篤介の信，並に鳥居，狩野，土屋，佐野連名の信片須磨より至る。五時より田中，伊集院両大佐の招宴に赤坂の八百勘に赴く。北京より帰来せる吉田大佐増次郎同座たり。十時帰る。亀井陸良の信至る。

八月六日 晴。午前海軍省に赴く。途上大雨に遇ふ。軍令部に山岡副官，田中，伊集院両大佐を訪ひ，晌午帰る。河野久，古城，宮島，荒賀，佐原，田鍋に着京を報ず。

八月七日 晴。午後四時外務省に至り松井次官，小池，阪田両局長，亀井陸良，中島眞雄，佐原篤介等と会し支那に於ける新聞政策を商議し，終て外務省側の案内にて田中家に宴集，十時散ず。河野久太郎来訪せりと云ふ。

八月八日 晴。大倉組門野重九郎よりの案内状至る。之に復す。夜田鍋安之助来訪。

八月九日 晴。午前河野久太郎，小越平陸来訪。二時京橋中橋吾妻屋に至り中島眞雄を訪ひ佐原と三人漢字新聞紙の計画を立て，五時佐原と浜町常磐屋の上海会に出席す。会する者三十余人。九時散ず。雨。車を賃して帰る。

八月十日 晴雨無定。朝来心気不舒，終日静養。箱根避暑中の竹下少将の信片至る。

八月十一日 晴。午前橋三郎来訪。竹下少将，波多博に復書す。午後大倉組門野重九郎の招宴に築地采女町芳野屋に赴く。同座は安岡秀雄，佐原，河野，外一人たり。九時散ず。

八月十二日 晴。午前小越来訪。午後佐原，速水来訪。阿部野に復書す。夜家族出て散策し八時帰。

八月十三日 陰，微雨。朝内人と芝公園内弁天祠の荷花を見る。帰て朝食す。午後橋三郎，古城貞吉来訪，談時を移て去る。

八月十四日 晴。午前理髪。午後五時半紀尾井町善隣書院に於ける研行会に出席す。会者山内，荒賀，田鍋，宮島，小越，速水等なり。寛談九時に及で散ず。

八月十五日 陰。佐原，亀井，山内に致書す。参謀本部明石中将より案内状至る。之に復す。成田鍊之助来訪，之を留て中食を為す。午後川口市之助来訪，昨夜湖南より帰来せりと云ふ。六時去る。

八月十六日 晴雨不定。午前荒賀直順来訪。午後八角海軍少佐三郎，小越平陸来訪。上海波多より七月分外務省手当二百円送来。波多に領収書を發す。夜内人と出て物品を購ふ。

八月十七日 陰。午前海軍省に赴き新軍令部次長佐藤鐵太郎，竹下少将，田中，伊集院両大佐，副官八角少佐等に面す。部内にて太田千尋，本庄繁に邂逅す。正午帰る。午後勝木恒喜，升允，佐原，外一名来訪。四時去る。尾東方壘の建碑相談会に同文会に出席す。山内，白岩，郡島，成田，吉原，田鍋，河野等同座たり。終て四谷三河屋に至り牛肉会を催し，八時半散ず。川口市之助来訪。

八月十八日 半晴。波多の信至る。朝河野来訪。共に出て吉田増次郎を白金三光町に訪ひ，正午帰る。海軍軍令部次長佐藤鐵太郎氏より案内状至る。之に復す。六時参謀次長明石中将の招宴に築地精養軒に赴く。同座は福田少将雅太郎，吉田海軍大佐，佐原，本庄，寺西秀武以下四五人たり。九時散ず。

八月十九日 晴。午前速水を白金三光町に訪ひ小談。共に出て内田康哉を中野に，伊集院彦吉を柏木に，升允を中野深田別邸に訪ひ暢談。帰途宮島大八を代々木に訪ひ，五時半帰。土屋員安在り，夜に入て去る。海軍大尉鈴木美通来訪せりと云ふ。夜熱甚。

八月二十日 晴。午前参謀本部に至り赤石次長，福田少将，本庄中佐に名刺を留め鈴木大尉と少談。去て白岩を訪ひ暢叙。帰途山下中将，鈴木誠作に名刺を留て帰る。熱甚。黄昏大雷雨。

八月二十一日 晴。理髪。松岡千尋来訪。午後友野盛来訪。五時より軍令部次長佐藤少将の招宴に精養軒に赴く。同座は海軍次官鈴木少将，秋山軍務局長，吉田，向井両大佐，竹下少将，八角，向田両少

佐、佐原篤介等なり。十時散ず。雨。車にて帰る。

八月二十二日 半晴。午前中村海田、細川義孝来訪。

八月二十三日 雨。午前海軍省に八角少佐を訪ひ、去て外務省に小池政務局長を敲き、帰途井上清秀に抵り、晌午帰る。午後竹下少将勇を泉岳寺前に訪ひ暢談、暮に及で帰る。門前にて松澤に邂逅す。松岡千尋之信至る。晩家族と木村屋に至り洋饌を吃す。

八月二十四日 雨。松岡に致書す。午前細川侯爵邸に至り浅井家扶に面す。帰途古城に抵り小談、去て荒賀を水道町に訪ひ中食の饗を受け、二時辞して田鍋安之助を牛込に訪ふ、在らず。去て市ヶ谷佐々、守田両家を敲き小談、転て同文会に至り根津一、山田勝治、松岡等と暢談、五時半帰る。上海有吉領事に致書す。

大正四年八月二十六日起

日誌

八月二十六日 晴。是日日光に遊ばんとす。午前九時家族を伴ひ電車にて上野停車場に至る。正午駅前の酒亭に中食し十二時十五分の汽車にて発す。三時宇都宮を過ぎ、四時半日光駅着。車を賃して神橋前の小西本店に投宿す。夜市中を散策す。

八月二十七日 晴。前七時半車を賃して中禅寺に向ふ。行程四里五丁、往復車資二員六角たり。神橋側を過ぎ大谷川に沿て進む。田母沢御用邸前を経過す。今上陛下現に此地に御駐輦中なり。清滝を過ぐ。小市集なり。古河の製銅工場有り。二里馬返に至る。日光此に至る電車の便有り。此より足尾銅山に至る五里程なり。山道盤折螺旋の状を成し辛ふして車を通ず。右方に大小の真名子山有り。巉巖峭立、溪山の勝之を第一と為す。栄橋を度り左折、山路を行く。楓樹満山、深秋の風光想見するに堪へたり。途上方等般若の両瀑を觀、進で中の茶屋に小憩す。磁石有り甚大、將に頂上に達せんとす。左側に華嚴の瀑有り。高水底より七十丈と称するも誇張のみ。中禅寺湖に至る週廻七里、一面の明鏡翠屏万疊の間に開け風景如画。湖畔の米屋に投じ湖水産する所の鱒を割かしめて中食す。味極て美。湖上に兀立するを男体山と称す。海拔八千六百余尺。一時半帰途に就き四時半小西旅館に帰着す。夜雨。

八月二十八日 晴。前九時導者を僦て東照宮、並に二荒神社に参拝す。陽明門の壯麗を見て唐門より本殿に至り、転じて猫門に至り左甚五郎の作に係はる眠猫を看、坂下門を過ぎ二百四段の燈道を登り奥の院に至る。家康の遺骸を葬る所なり。老杉天に参して幽静森嚴、人をして襟を正さしむ。拝殿の前に化燈籠有り。刀痕歴々指点すべく、七百年前の物現に国宝として保存せらる。転じて三代將軍家光の廟を覽、帰途宝物館を巡視す。多く家康以下歴代將軍の遺物を陳列す。珍品奇什極て多し。三条小鍛冶宇近の稱々切丸の大刀長約二間、人目を駭すに足れり。此地和漢朗詠集の筆跡の優秀なる六朝の大家も及ぶ能はず。之を総ぶるに日光の大観は山水の幽邃と建築の壯麗とに在り。彫刻の巧丹青の美に至ては天下無双と称するも溢美に非ざるなり。午後一時旅館に帰る。七時前小西を辞して車站に至り、七時二十分日光発の汽車にて宇都宮に至り換車白河に向ふ。夜十時四十分着。駅前の伊佐美旅館に投ず。

八月二十九日 晴。前六時半白河を発す。古の城址は駅の附近に在り。白河の関址は此を距る三里の地に在りと云ふ。郡山に至る。左方遙に磐梯山を望む。新潟線此に於て分岐す。一路剩水残山、地味饒ならず。人事亦た未だ尽さざる者あり。二本松を過ぐ。左側の山上に城址有り。行く少許線路の右側安達ヶ原旧跡の木標有り。小丘の下杉林の間寺院有り、此れ其の旧址なり。福島に至れば地勢漸く開け平嶺相連る。秋田行の鉄道此に分岐す。進で岩沼駅を過ぐ。水戸行海岸線の岐る所也。此より形勢開豁、平野天に接し溝洫井然亦た東北の偉觀なり。十二時半仙台着。車站前の仙台ホテルに投宿

す。晡時武藤虎太を東二番町に訪ふ。第二高等学校長として此に在るもの也。六時半帰寓。夜武藤来訪。

八月三十日 快晴。早起涼気可人。東京白岩に致書。午前七時半武藤夫人の東道にて汽車塩竈に向ふ。途中岩切駅を過ぐ。左方に多賀城址、並に蒙古碑有り。多賀城の碑は日本三古碑の一にして聖武帝の御宇鎮守府將軍大野東人の所建なり。三拾分時にして塩釜に達す。太田支店に投じ小休。去て塩竈神社を展す。国幣中社にして千賀山上に鎮座す。武甕槌大神を祀る。老杉鬱鬱境内清浄人をして肅然たらしむ。右宮塩釜桜の枯幹有り。又た貝多羅葉樹一株有り。老幹輪困何の代の物たるを知らず。左宮前に林子平奉納石造の日時計を置く。此他文治時代の鉄燈籠等見る可きもの少なからず。参拝終て太田屋に帰り小舟を艤して松島に向ふ。相距る三里許、海湾如鏡、八百八島其間を点綴し東北遙に金華山を望む。風光明媚真に海内の巨觀にして天造の妙境なり。晌午松島町に上陸。人煙二百許。松島ホテルに小憩。穴居の遺址を歴觀し、去て瑞巖寺に至る。桑海禪林の四大字を匾す。青龍山と号す門を入れば老杉參天、嵐翠欲滴。左側に法身窟有り。開祖法身の趺跏せし処。此寺は伊達家累代の菩提所なり。各室の襖は狩野法眼等諸大家の筆に成るもの多し。彫刻亦左甚五郎等大作多し。正殿孔雀の間の正面に藩祖政宗卿の肖像を安置す。甲を撰し大刀を横て胡床に踞し背上弦月標を挿む。威容嚴然奕々として生るが如く、英風不可犯。是れ政宗二十七歳征韓當時の武装なり。明治九年車駕東巡の時此を以て玉座に供せりと云ふ。觀瀾亭は寺の東南隣に在り。文禄年間秀吉伏見の行第を以て政宗に賞賜せしものを、二世忠宗移して此に建設せるものなり。雄島は寺の西南海上に在り。小島又た御島に作る。松樹満山風致群島に冠たり。幽墓浦に苦屋汀等の勝有り。藤原俊成の歌に、立かへり又も来て見む松島やをしまの苦屋浪にあらすなと詠せしは此処なりと云ふ。松島ホテルに中食し、午後二時の小汽船にて塩釜に帰り太田に小憩、四時の汽車に乗り仙台に帰り五時着す。夜家族と武藤宅を訪ふ。上海中島、齋藤兩少佐、並に春申社諸子に信片を發す。

八月三十一日 晴。前十時より武藤虎太の東道にて聯車躑躅ヶ岡に至る。老桜千株花時の光景想見に堪へたり。岡を降れば宮城野なり。転て政岡の墓を見る。墓標三澤氏初子之墓と題す。去て第二高等学校に至り小休。是より広瀬川の大橋を度り經ヶ峯の瑞鳳殿に至る。伊達政宗の墓地なり。老杉鬱葱道を挟み、殿宇壮大古色可掬。政宗衣冠束帶の像を安置す。殉死者の墓二十一基有り。大觀楼にて鰻飯を吃し、二時出て広瀬川を左方に望み伊達安藝、政岡、原田甲斐、片倉小十郎、松前鉄之助等の旧址を過ぎ、左に青葉山の城址を望む。樹林鬱鬱、広瀬川を帶び連山を控へ形勢甚雄。去て西北伊勢堂山下の龍雲院に至り林子平先生の墓を展す。尺半の古碣青苔之を掩ふ。六無齋友直居士墓と題す。帰途県庁、裁判所、図書館前を過ぎ、途中武藤と別れて帰る。佐藤軍令部次長、竹下少将、田中、伊集院、狩野、鳥居、山内に信片を發す。夜武藤を訪ひ別を告げ、帰途此地名産埋木細工を買ふ。埋木は仙台附近一帯の地より出つと云ふ。

九月一日 晴。早起行装を治し九時の汽車にて海岸線より水戸に向はんとす。仙台ホテルを出で車站に至り上車。武藤虎太夫婦来送、林檎一簍を贈らる。九時十五分發車。岩沼にて左に海岸線に入る。原ノ町にて中食す。是より以南隧道相属す。富岡を過ぐれば左方に海を望む。午後二時平駅を過ぐ。磐城の重地なり。湯本を経て二時四十分勿來に至る。関址は此を距る稍や遠し。此よりして南す。平潟の海湾怒濤岸を嚙み風光甚佳。磯原に至る青松白沙景致愛すべし。四時四六分水戸に達し駅前の芝田屋に投宿す。

九月二日 半晴。前八時車を賃して常磐公園に至る。古の偕樂園にして水戸烈公の経営する所。梅樹幾千株今尚存し、有名なる好文亭の三層楼は緑樹の間に聳へ、前は千波沼を俯瞰し、後に桜ヶ岡を控へて遙に筑波山を望み山水遠近の風致を具し、宛然一幅の活画、圖倪黃の筆も及ぶ能はず。真に天下の名苑なり。烈公親筆の匾額数面有り。家屋台榭の結構、庭園の布置、皆烈公の意匠に出で高雅清逸、常人の及ぶ所に非ず。偕樂園の碑有り、烈公の撰文なり。園内に常磐神社有り、義、烈二公を合祀



す。好文亭に上り徘徊顧望、懷古の情禁ずる能はず。各室に於ける遺物を細観し、去て吐玉泉を掬し、車を駆て常磐村に至り藤田幽谷、東湖の墓を展し香華を供ふ。附近に正奸党軋轢の変に戦死せし者の墳墓有り。墓地の下に那珂川有り。川を隔て遙に真弓山を望む。寒水石の産地なり。義公の隠棲せし西山も其の隣近に在りと云ふ。去て弘道館に至る。烈公の設くる所梅林の中に在り。有名なる弘道館記は公の撰文にして八卦堂碑亭内に在り。園内に鹿島神社並に孔子廟有り。一覽終て旧城内を通ぎ旅亭に帰り結束。十一時三十分の汽車にて水戸を發す。友部、岩間を過ぐれば筑波山を天半に望む。石岡、土浦を過ぐ。左に霞ヶ浦を見る。風光甚好。午後三時半上野に達す。荷物配達の手続を了し電車に乗り、四時半松本町の寓に帰着す。松岡來訪。竹下少将、根津一、郡島忠次郎來訪せりと云ふ。神崎、波多、齋藤少佐、岡幸七郎、山内崑、佐々布、井場の信に接す。

九月三日 雨。終日在家。午前橋三郎來訪。午後野満四郎、松岡千壽來訪、二人を留て晩食す。

九月四日 雨。古城の信至る。之に復す。石橋藤次郎に信片を發す。五時善隣書院の健行会に出席す。宮嶋、亀井、田鍋、速水、鈴木、何、島、小越等來会、十時散ず。雨。川口、石橋來訪せりと云ふ。冷氣頗に催す。宮崎民藏來訪。

九月五日 雨、秋冷漸加。心氣不舒。午後竹下少将、川口市之助來訪。荒賀の信至る。

九月六日 半晴。午前海軍に田中、八角、山岡諸人を訪ひ、去て山内崑を同文会に訪ひ中食後歸る。古閑信夫、上妻の信、並に上海波多より八月外務省の分二百円を送り来る。

九月七日 小雨後晴。武藤虎太、古閑信夫、荒賀直順に致書。古閑には千金貸与の事を承諾す。藤森、波多、菅村に致書す。上海神崎、西本、佐々布に信片を發す。白岩龍平來訪。

九月八日 晴。午前佐原篤介を西片町に訪ふ、在らず。午後野満來訪。海軍軍司令部より十、十一、十二、三ヶ月分手当を送り来る。

九月九日 晴。朝川口市之助來訪。本人大倉組へ入社を保証を為す。午後橋三郎を赤阪表町三に訪ふ、在らず。帰途同志会本部に安達謙藏を訪ひ三時歸る。熱甚。菅村夫人に致書、書類一切の送付を請ふ。橋三郎の信片至る。本日より支那に赴くと云ふ。

九月十日 陰。佐野直喜、古川権九郎に信片を發す。夜佐原來訪。

九月十一日 晴。荒賀來訪、留て中食を共にす。

九月十二日 晴。内人と上野に至り江戸博覧会を観る。旧諸侯の出品中の刀劍甲冑等の宝とすべき者甚多し。又た家康以下諸將の作に成れる書画の見る可き者多し。精養軒に中食し会場を巡覽、時を移し四時歸る。亀井陸良來訪せりと云ふ。佐原、佐野、荒賀、波多、藤森の信至る。

九月十三日 晴。終日在家。夜内人と芝神明の祭事を見る。川口市之助來訪。

九月十四日 晴。午前品川一本木に細川子爵を候す。中野に転居の事を聞き歸る。土屋台北よりの信至る。午後小越來訪。

九月十五日 陰。亀井陸良に致書す。晚芝公園の萩花を観る。夜微雨。

九月十六日 晴。菅村より証書類を郵送し来る。米原繁藏の信至る。鹿本中学を辭職せりと云ふ。米原、武藤虎太、菅村に致書す。菅村に保険解約の事を依頼す。荒賀直順、河野傳吉來訪。古閑信夫に致書す。

九月十七日 雨。頭痛。海軍より履歷書の提出を求め来る。即ち之を出し、亀井、菅村夫人に致書す。下関預金管理所に転居届を為す。夜川口來訪。

九月十八日 晴。午前同文会に山内を訪ふ、在らず。荒尾精の建碑寄附金十円を出し山田勝治と小談。正午亀井陸良と南鍋町交詢社に午食す。土屋元作に邂逅す。三時歸る。五時三河屋の牛肉会に出席す。山内、田鍋、川島、上野岩太、白岩、福迫、速水、鈴木、小越、宮坂、遠藤、何等同座たり。九時散ず。波多の信至る。

九月十九日 晴。午後二時より家族と飯田町喜多能樂堂に至り謡曲を聴く。喜多六平太の景清、栗谷の

望月二番能有り。九時散ず。守田愿、尾越辰雄来訪せりと云ふ。

九月二十日 雨。午後軍令部に伊集院、田中兩大佐を訪ひ、去て外務省に至る。四時帰る。軍令部より十、十、十二、三ヶ月分手当九百円を送り来る。西本省三の信至る。之に復す。山田勝治に信片を發す。

九月二十一日 雨。終日在家。午後田鍋安之助来訪。鳥居の信片至る。本日入京せりと云ふ。波多博の信至る。

九月二十二日 晴。午前外務省に小池政務局長を訪ひ東方通信社の拡張案を提出し、去て本郷追分高橋医院に至り鼻の診察を受け診察料五元を納め、正午帰る。松岡千寿、田鍋の信至る。

九月二十三日 半晴。午前中村海田来訪、之に孔方三枚を贈る。波多博に返信を發す。午後鳥居赫雄を佐々木に訪ふ。古城来会。古城の東道にて上野より電車田端に至り高台の天然自笑軒に投じ会食し、五時半帰途に就き鳥居を送りて帰る。

九月二十四日 晴。秋季皇霊祭。午前西田敬止来訪。昨日他出中上野岩太郎、井手照人来訪せりと云ふ。午後家族と向島百花園に遊ぶ。満庭の秋草万紅千紫甚有風致、徜徉時を移し、車を墨堤に駆り浅草雷門に帰り歩いて観音境内を過ぎ、象潟に至り古川権九郎を訪ふ。警察署長として此に在る者也。晡時辞出。帰途日比谷松本楼に洋食を吃し、月を賞して帰る。佐原来訪せりと云ふ。

九月二十五日 晴。午後細川侯を高樹町に候す、不在、蓑田喜太郎と少談。帰途高島義恭氏を訪ひ、晌午帰る。井手照人来訪。午後内人と泉岳寺義士墓を展し遺物を一覽して帰る。森岡正平来訪せりと云ふ。

九月二十六日 陰。午前郡島忠次郎来訪、留て中食す。午後共に出て赤阪に至り成田鍊之助を訪ふ、在らず。去て青山墓地に至り乃木大将、小村侯、佐々、山座、尾本寿太郎、阿部諸氏の墳を展し、郡島に別れて帰る。鳥居の信至る。之に復す。有吉領事、波多博の信至る。

九月二十七日 陰。午後外務省に小池政務局長を訪ふ。夜若杉要、森岡正平来訪。

九月二十八日 陰。朝八時半東京駅に至り細川侯の渡韓を送らんとす。時間を午後に変更されしを以て去て本郷原町に至り上野岩太郎を訪ひ小談、水道に荒賀を訪ふ、在らず。晌午帰宅。内人と目黒不動社附近の大国屋に至り栗飯を用ひ、三時帰る。四時東京駅に細川護立侯を送る。夜川口市之助来訪。

九月二十九日 微雨。上海齋藤少佐の信片至る。上海有吉領事、波多、山東大間知に致書す。野田悟資来訪。午後齒療を為す。伊集院の信至る。

九月三十日 雨。田鍋、古閑信夫、野田悟資の信至る。夜松岡来訪。

十月一日 雨。古閑、田鍋に復書す。軍令部に履歴書を出し伊集院大佐に復書す。

十月二日 陰雨。野満、牧卷次郎の信至る。牧、狩野に信片を發す。波多博より九月分外務省手当を送り来る。今井邦三来訪。

十月三日 陰。朝上野岩太郎、荒賀直順来訪。荒賀を留て中食す。午後池田良榮来訪。

十月四日 晴。終日在家。午後内人と芝公園に散歩す。同文会の信、並に白岩より案内状至る。岡幸七郎より其嚴君の訃を伝へ来る。

十月五日 晴。午前海軍軍令部に伊集院、田中、谷口三大佐を訪ひ、帰途外務省に青木新、武者小路公共を訪ひ、正午帰る。鷺澤に致書す。午後同文会の評議員会に出席す。出席者は鍋島侯、曾我子、伊集院、伊澤修二、小川、白岩、山内諸氏なり。六時散ず。鳥居の信至る。岡幸七郎に奠儀一封を贈る。升允来訪せりと云ふ。

十月六日 陰。鳥居に復書す。午前升允来訪、留て中食す。二時去る。出て理髮す。四時半山下町に門田正経を訪ひ、去て華族会館の一水会に出席す。会者、徳川慶久公、伊集院彦吉、内田康哉、床次竹二郎、門野重九郎、上泉徳弥、根岸佶、上原勇作、倉知鐵吉、山成喬六、福田雅太郎、小池張造、秋月左都夫、秋山眞之、宮島大八、白岩龍平諸氏。十一時散ず。来賓として坂西大佐出席せり。川口市

之助来訪。

十月七日 雨。熊谷直亮，鷺沢の信至る。午前東洋協会門田正経来訪。正午伊集院公使の午餐の招に東京倶楽部に赴き支那問題を商量し，二時半辞出外務省に小池局長を訪ひ帰る。五時車を賃して築地三香雪軒に白岩の招宴に列す。同座は山内崑，大谷藤次郎，森岡正平等なり。詩酒唱和九時に至り散ず。

十月八日 暴風雨。齋藤少佐恒の信片至る。昨日上海より帰着せりと云ふ。午後熊谷直亮，荒賀直順，鷺澤與四二，齋藤少佐恒前後来訪。

十月九日 晴，熱甚。郡島忠二郎来訪。夜井上清秀来訪。

十月十日 晴。日曜。午前西田敬止，名和中将を訪ふ。古川権九郎来訪せりと云ふ。上海有吉領事に致書す。夜八角少佐来訪。波多の信至る。

十月十一日 晴。午前齋藤雅方，山内崑来訪。山内を留て中食し，共に出て代々木に宮島大八の病を問ひ帰る。夜心気不舒。

十月十二日 陰雨。心気不佳。田鍋，門田正経，八角少佐三郎の信至る。田鍋，門田，菅村に復書。鷺澤に信片を發す。八角少佐に復す。

十月十三日 半晴。午前軍令部に至り別を告げ，去て参謀本部に齋藤少佐を訪ふ，在らず，白岩を訪ひ小談帰る。家族と日比谷松本樓に至り晩食し，博品館にて雜品購て帰る。川口市之助来訪せりと云ふ。

十月十四日 晴。末永一三の信至る。之に復す。狩野，鳥居，佐野，古城，荒賀，川口，松岡，田鍋列に致書す。末永一三来訪。門田正経の信至る。之に復す。夜川口来訪。

十月十五日 快晴。午前宮島大八，成田鍊之助来訪。齋藤雅方より上野堅吾氏の真蹟を贈り来る。藤瀬夫人来訪。白岩，齋藤雅方，郡島，吉田，松岡，野田悟資に致書す。午後軍令部に竹下少佐を，外務に速水を訪ひ別を叙して帰る。

十月十六日 快晴，冷氣透肌。是日家を辞し支那に向はんとす。午後三時半家を出て新橋に至り四時八分の汽車に乗ず。白岩，大谷，荒賀，郡島，川口市，鷺沢等来送。床次竹二郎と同車す。品川を過ぐる時八角少佐来送。途中鷺沢に電報す。

十月十七日 雨。午前四時起床。五時二七分京都着。天未明驅車投小川亭。朝食後佐野直喜，鳥居赫雄来会。九時大溝に至り狩野直喜を訪ひ暢談，狩子の東道にて電車南禅寺畔の瓢亭に至り会食四人寛談，二時鳥居，狩野と小川亭に帰る。佐野は途中別れて大坂に去る。五時狩，鳥二氏辞帰。白岩，大谷に詩片を發す。

小住鴨涯第一樓，望君不見憶同游，旧京風物清如許，三十六峰煙雨秋。

十月十八日 健晴。川口，荒賀，郡島に致書す。前十時小川亭を出て車站に至り，十時三三分の車に投ず。夜糸崎を過て就寢。

十月十九日 快晴。前五時五六分下関着，直に門司に度り七時半の長崎行に乗ず。午後二時半鳥栖を過ぎ早岐に達し下車休憩少時，急行車の到るを待て之に乗じ，五時十分長崎着，土佐屋に投ず。東京宅，並に菅村，古閑に致書す。

十月二十日 健晴。午前出街購物。狩野直喜，河口介男，井手三郎に致書す。松倉の信片至る。鳥居，佐野に信片を發す。長崎滞留。

十月二十一日 晴。午後二時土佐屋を出て税関埠頭より筑後丸に上る。丹下某と同室たり。四時開船。是夜月色甚好。

十月二十二日 陰。風浪頗大。朝来船量の気味有り，一嘔して臥す。午後に至て即ち癒ゆ。

十月二十三日 微雨。午前一時船揚子江口に達し錨泊す。四時起床。午前十一時上海に達す。中島少佐，鈴木大尉，島田，波多，賀来，八田，西山，西本等来迎。領事館に有吉，西田，村上，齋藤，古谷等を訪ひ，去て東和洋行の旧寓に入る。今井，安河内，波多，西本，佐原来訪。齋藤少佐，大間知，江寄眞澄，高島，佐々木武蔵，浅井正夫，島田儀市等の信に接す。

十月二十四日 雨。午前薛德樹、中村重、佐原来訪。山東大間知芳之助に泰山石摺の礼状を發す。午後鈴木大尉、佐々布、島田来訪。三時姚文藻を訪ひ升允の信書を交付し、談時を移て帰る。夜大阪毎日社長本山彦一、並に賀来来訪。

十月二十五日 雨。午前有吉、島田、鈴木、中島を訪ふ。午後八田、波多、神尾、寺中、友野来訪。夜西田、中島少佐、佐原来訪。姚文藻来談。

十月二十六日 快晴。海軍、内人、宮島に致書す。大谷是空の詩信二通至る。山成、渡辺俊郎来訪。正午本山彦一の帰国を筑後丸に送る。午後村上夫人、神崎を訪ひ、帰途弓術を修て帰る。晚神崎正助来談。

十月二十七日 晴天。朝井手三郎を近江丸に迎へ日報社に至り暢談。去て弓術俱樂部に至り射を試て帰る。大谷是空の韻に次す。

千里思君独倚楼、何時共賦汗漫游、江南景物那边好、大地茫々落葉秋。

土佐孝太郎、木幡を日清汽船会社に訪ふ。午後波多、中村来訪。三時台湾銀行に至り預金を受取り之を正金に預入る。有吉領事を訪ふ。井手、佐原在、小談帰る。松岡千寿、菅村三之の信至る。六時土佐孝太郎の招宴に月廬家花園に臨む。井手、佐原、木幡同座たり。九時散ず。井手三郎来談。

十月二十八日 陰。午前篠崎を訪ひ、去て弓術を修め帰る。午後佐々布、波多、寺中猪介、迎英輔、櫻井俊一、土井伊八等来訪。佐藤逸人、眞寫次郎来訪。佐藤は徴兵の為帰国すと云ふ。之に龍泉磁一個を托送す。神尾、波多、瀬上恕治来訪。夜獵友会の晚餐会に浜吉に臨む。同座は幡生、神崎、神津以下十余人。九時半散ず。副島綱雄の信片至る。

十月二十九日 晴天。東京竹下少将、門田正経に泰山の石刻大字を郵寄し、軍令部に発信す。東洋協會に四月至十月会費三円五十銭を送る。東京宅に致書す。正午南満会社櫻井俊一の午餐に俱樂部に列す。井手、島田、西本同座たり。散後弓術を修て帰る。鈴木大尉、岡田有民来訪せりと云ふ。夜姚文藻来訪。海軍に第二信を發す。佐原、波多を訪ふ。杭〔州〕辻定吉の信至る。柿一簍を送り来る。

十月三十日 陰天。岡幸七郎、辻定吉に致書。松岡千寿に弔詞を發す。午前理髮、去て領事館に赴く途岡幸七郎に遇ふ。本日来着せりと云ふ。領事館に有吉を訪ひ、弓術を修め、豊陽館に岡幸七郎を訪ひ小談、帰る。午後岡来訪。共に出て東方通信社、佐原を歴訪して帰る。六時平岡宅に至り立談、去て土井伊八の晚餐に赴く。福岡、井手、秦、青木同座たり。十時半帰。鳥居素川、河口介男、迫の信至る。鳥居より池辺吉十郎氏の真蹟を送来る。

十月三十一日 陰。天長令節たり。前九時領事館に至り聖影を拝し、帰途弓術俱樂部に至り射を試て帰る。午後秦、佐々布、島田、並に同文書院同県学生栗原猷彦以下九人来訪。有留重利、鶴田甲奎の信至る。六時半有吉領事の招宴に俱樂部に赴く。衆議院議員視察団十余人、並に支那側より鎮守使鄭汝成以下三十余人列席す。散後岡幸七郎の漢口行を送て帰る。

十一月一日 陰。留守宅、並に齋藤少佐恒の信至る。午前山田純三郎来訪。零時半馬車張園に至り鎮守使鄭汝成、並に楊晟、周金箴等の主催に係はる議員団歓迎宴に列す。主客合せて七十余人。四時散ず。佐原、中島少佐来訪。岡幸七郎に致書す。井手三郎の帰国を博愛丸に送る。海軍に発信す。留守宅に致書す。

十一月二日 雨。午前山田純三郎宅に陳其美に会す。近日潜行此に至る者也。午餐を共にして帰る。俱樂部に至り弓術を修、去て中島少佐、通信社、安河内、寺中、友野等を歴訪して帰る。菊池為人来り書を属す。姚文藻、神崎、波多、高木陸郎、下田文一等来訪。

十一月三日 半晴。鈴木大尉来訪。岡幸七郎の信片至る。是日有詩。

秋風淅瀝万林墜、独有黄花晚節全、人事看来百無頼、冠委泥土靴昇天。

午後弓術を修め、篠崎の病を問ひ帰る。中野二郎来訪せりと云ふ。夜植村久吉来訪。姚の信至。

十一月四日 雨。鳥居素川、古閑信夫に致書。午後姚文藻を訪ふ。俱樂部に弓術を修む。齋藤少佐、有



留に復書す。中野二郎を豊陽館松山増男の室に訪ひ小談、帰る。長沙香月の信至る。波多来訪。

十一月五日 雨。午前波多を訪ひ、去て弓術を修む。海軍に報告を發す。香月に復書す。午後鈴木大尉、波多、中島少佐、三田来訪。夜郵便局に至り、帰途中島、波多、佐々布を訪ひ帰る。

十一月六日 雨。九州日々社に通信す。午前姚文藻、汪甘卿来訪。午後出て弓術を修め、鈴木、中島、八田等を訪ひ帰る。海軍、門田正経、同文会、山田珠一、井手三郎の信至る。

十一月七日 雨。井手照人来訪。午後弓術を修む。阿部政次郎、神尾茂来訪せりと云ふ。夜神寄、神尾来訪。波多来談。

十一月八日 雨。午前有吉を訪ひ、去て弓術を修め、理髪して帰る。波多来訪。李経邁、鄭孝胥より升允に送るべき銀六百五十元を交付す。宮島大八に致書す。中島少佐来訪。内人の信至る。

十一月九日 半晴。軍令部、並に東宅に致書す。姚文藻来訪。午前弓術を修め、根津一氏を訪ひ帰る。竹下少将の信至る。午後平岡小太郎、高木陸郎来訪。

十一月十日 快晴。是日今上陛下御即位の大典を京都に於て挙げさせらる。午前八時半領事館に至り聖影を拝して帰る。十一時半領事館の祝賀式に列す。鎮守使鄭汝成祝賀式参列の途中白大橋畔にて銃殺せらる。午後二時小学校内に於ける御大典奉祝会に列し、散後六三園の祝賀会に臨み少時にして帰る。山本唯次来訪。夜公園に至り煙火を觀、九時帰る。江辺一帶電灯如不夜城、人山人海通行為に杜絶するに至る。

十一月十一日 晴。午前根津一、姚文藻来訪。岡幸七郎の信至る。午後内人に発信。弓術を修め、帰途佐々布、波多を訪ふ。清子に大典記念葉書を送る。夜福田某来訪、台湾より来滬せる者也。波多来訪。

十一月十二日 陰。軍令部、並に北京吉田大佐に発信す。篠寄彌十郎、木下賢良の紹介にて来訪。午後出て弓術を修め四時帰る。呉学廉鑑泉、姚文藻已に來り待てり。談時を移て去る。呉の談に拠れば馮は初志を守て變せず袁の帝制に反対なりと云ふ。夜賀来、波多来訪。

十一月十三日 陰。午前有吉領事を訪ひ、去て正金に至り銀八十元を受取り、帰途弓術を修め正午帰る。齋藤少佐、古閑信夫、間島、吉田寿三郎の信至る。平岡、神寄来訪。本山彦一の信至る。夜平岡、佐々布を訪ふ。明朝より蘇州に出獵せんとす。獵装を治す。

十一月十四日 晴。前七時半の汽車にて平岡と蘇州に出獵し、留園虎邱附近を獵し雉子一羽を獲、午後六時の汽車にて帰り八時上海着。山成、竹田と同車たり。

十一月十五日 快晴。留守宅に発信す。午前理髪。去て弓術を修め、篠寄を訪ひ帰る。下田文一、神寄正助来訪。上野岩太郎、軍令部、有蘭の信至る。鳥居赫雄の信に接す。

十一月十六日 雨。鳥居、上野岩太郎、有蘭に復書し、李経邁より升允への贈金六百五十元を宮島大八の処に郵送す。午前出て弓術を修めて帰る。姚文藻来訪。北京亀井陸良の信至る。

十一月十七日 晴。篠崎弥十郎来訪。海軍に報告を發し、北京亀井に復書す。午後波多、中島を訪ひ、去て弓術を修め、鈴木大尉、有吉領事、島田を訪ひ帰る。副島の信片至る。波多、島田と雅叙園に至り晩食し、終て神寄、平岡を訪ひ帰る。風邪の気味有り。領事館より十月分二百円を受取る。

十一月十八日 晴。午前弓術を修む。午後西本来訪。岡西門の信片至る。

十一月十九日 晴。東京宅に金二百円を郵送す。午前弓術を修め帰る。波多来訪。午後風邪の気味有るを以て篠寄医院に至り診察を受け帰る。民団に六月至十一月課金十八元を納む。午後就褥静養。中島少佐来訪。

十一月二十日 晴。在床上養病。八木富三来訪、新嘉坡よりの帰途なり。五年前世界一週の同行者なり。土井伊八来訪。鈴木大尉、神寄来訪。増田大佐、香月梅外、宮島大八の信至る。晚波多来訪。是夕より神寄等と平湖に出漁の約有りしも病を以て中止す。

十一月二十一日 快晴。伊集院大佐、姚文藻に致書す。加藤中佐壯太郎の信至る。増田大佐に復書す。今井邦三来訪。午後弓術を修む。是日鄭鎮守使汝成の遺骸を原籍に送る。滬寧車站に至る沿道觀者如

堵。晩食後東和影戲館に至り御大典の活動写真を看、九時帰る。西本、波多、佐々布来訪。

十一月二十二日 微雨。午前弓術を修め、中島、波多を訪ひ帰る。杉浦二郎来訪。午後有吉を訪ふ。古閑信夫、香月、同文会、狩野、井手の信至る。

十一月二十三日 雨。午前海軍に香月の湖南通信を送り、弓術を修め、島田を訪ひ帰る。午後姚文藻、有吉を訪ふ。土井、波多列来訪。

十一月二十四日 雨。山田珠一、小早川に致書。九日社に通信す。午前弓術を修む。内人の信至る。午後河野久太郎来訪、昨日北京より帰来せりと云ふ。野満四郎の信、並に大倉喜七郎列よりの案内状至る。

十一月二十五日 陰、寒氣漸催。午前根津一氏を訪ひ、去て大倉喜七郎、河野久太郎を豊陽館に訪ひ、帰途弓術を修む。神崎、波多、平岡前後來訪。六時半より大倉の招宴に六三亭に赴く。同座二十余人。九時帰る。

十一月二十六日 快晴。午前山田純三郎来訪。姚文藻を訪ひ、正午帰。福田少将雅太郎来着。其寓室にて中食を共にす。午後島田を訪ひ、倶楽部に弓術を修め帰る。同文書院生宇治田直義来訪、講演を請ふ。事を以て之を辞す。浦敬一養子浦六郎、並に保木本利治の信至る。

十一月二十七日 快晴。午前弓術を修めて帰る。大間知芳之助、松井、中島少佐、姚文藻来訪。杭州大河平隆則の信至る。浦六郎に復書す。杭州大河平に復書す。夜姚文藻、汪鍾霖、波多、賀来来訪。深更に及で去る。汪は徐州張勳の処より来りし者也。是夜平岡、神崎を訪ふ、皆在らず。佐々布の処に小談。

十一月二十八日 快晴。日曜日。朝福田少将、外一武官来訪。午後二時より日本人倶楽部に荒尾精へ贈位の奉告祭を行ふ。余友人を代表し祭文を朗読す。三時散ず。夜滬友会の根津招待晩餐会に出席。九時帰。

十一月二十九日 晴。午前中島、波多を訪ひ、去て正金銀行に至り銀百円を受取て帰る。中食後姚宅に汪甘卿と会し少談、去て豊陽館に河野久太郎、大間知を訪ひ、弓術を修て帰る。内人、並に迫良隆の信至る。十一時河野、大間知の北支那行を車站に送る。升允に沈子培の扇面を郵送す。

十一月三十日 晴。午前弓術を修め鈴木大尉を訪ふ。午後迎英輔、波多来訪。本月分外務省手当を受取る。升允に致書、姚文藻の信を送る。東京宅に金二百円を郵送す。夜姚文藻来訪。

十二月一日 快晴。海軍に報告を發す。午前弓術を修め、鈴木、中島を訪ひ帰る。午後伊集院大佐の信、並に阿部野の信片至る。晩平岡、姚、波多、中島、鈴木来訪。張勳部下の武官歩兵上校張杰念慈来訪。

十二月二日 晴。午前理髮、去て有吉を訪ひ、弓術を修め帰る。午後小池政務局長、古閑信夫に致書す。波多来訪。夜平岡宅の鯛飯会に赴く。永末、佐原、安河内同座たり。九時帰る。

十二月三日 晴。陸軍、並に外務省小池政務局長に致書す。午前弓術を修む。午後波多、中村重三郎来訪。狄楚青を訪ふ、在らず。

十二月四日 陰。朝白岩龍平を郵船埠頭に迎へ、弓術を修めて帰る。午後内人の信至る。海軍々令部より明年一、二、三ヶ月分手当、並に特別臨時機密費として金五百円を送り来る。山岡副官に致書、並に金子領収証を送る。

十二月五日 快晴。日曜日。中食後弓術大会に出席、会者二十余人。日暮に至て終はる。会員と支那料理を会食す。六時四十分機器局方面砲声大に起る。革命党事を挙げしなり。九時帰る。波多来訪。深更澤本良臣来訪。

十二月六日 晴。午前五時前龍華の西方に方りて銃砲の声頻に起る。五時半起床。朝食後中島、波多を訪ひ共に出て徐家滙に至り昨夜來の情況を探り、江南製革会社に至り小談。帰途山田純三郎を訪ひ、正午帰る。平岡、姚、西本、佐原等来訪せりと云ふ。

昨夜の変は陳其美の指揮する所にして三百の黨員中三十余人を江南製造局襲撃に向はしめ、一面軍艦肇和、応瑞を籠絡し昨午後六時肇和、応瑞をして機器局を砲撃せしめし者なり。然るに今朝に至り応瑞俄に反して肇和を砲撃し艦員をして潰走せしめ此挙をして失敗に終はらしめり。

機器局の主要人物は新到北京より来れる薩鎮冰歓迎会に赴て局中に在らず。僅に副官留守□□□、肇和艦長も同席に在て艦内に在らざりしと云ふ。初め三百の黨員に機器局進攻を命ぜしも奮て之に赴きし者僅かに三十余人に過ぎざりしと云ふ。

午後神崎、白岩、波多来訪。八木富三、西山保社の信片至る。

十二月七日 陰天。午前海軍に致書、弓術を修め、波多、島田、佐々布を訪ひ帰る。土井伊八来訪。青島中西正樹の電報至る。之に復す。中島少佐、波多、平岡来訪。

十二月八日 半晴。午前有吉を訪ひ、去て弓術を修め帰る。根津、波多来訪。午後根津、安河内、島田、佐原列を訪ふ。神尾来訪。

十二月九日 半晴。午前弓術を修む。海軍に発信す。午後迎英輔、神崎正助来訪。正金より五十元を受取る。夜賀来来訪。

十二月十日 陰。朝理髪、弓術を修め帰る。午後迎英輔、山成、安河内来訪。内人、並に大間知、伊集院の信至る。夜平岡来訪。

十二月十一日 陰。土曜日。内人に復書す。是日午前三時半の汽車にて杭州地方に出発せんとす。午前獵装を治す。宮地来訪。午後二時山成と偕に南門外車站に至り平岡と会し三時半の汽車にて発す。七時四十分開口着。恒陞棧に投宿、晩食す。十一時就寝。

十二月十二日 晴天。日曜。詰朝起床。朝食を取り五時半轎子に乗り開口を発し四郷に向ふ。錢塘江の左岸に沿て行く。暁色未分、江水無声、浙山若睡。七時半大諸橋に達し直に轎を下り山に入て獵す。午前失敗相踵ぎ纔かに雉子一羽を獲、正午大諸橋に中食、午後林家橋一帯に獵す。竹鷄一羽を獲たるのみ。六時根拠地に帰り小休、帰途に就く半途にして山成の犬失踪せるを以て本人大諸橋に折回して之を索む。余平岡と轎を停め江畔に立て其の帰るを待つ。江平にして声無く、浙山隱約寒月一彎、夜色不可名状。八時半開口の恒陞棧に帰着、食後就寝。開口より大諸橋に至る十支里。

十二月十三日 晴。前五時半起床、結束、客棧を出て七時二十分の急行に乗ず。十二時半上海着、三人馬車を同ふして帰る。岡、河口、伊集院、亀井の信に接す。鳥居の信至る。波多来訪。

十二月十四日 晴。午前片山に赴き齒を療し、去て弓術を修む。午後津田海軍大尉、中村芦舟等来訪。津田は広東より帰朝の途次なり。晩波多の処に至り杭州にて獵獲物を会食す。夜齒痛甚。

十二月十五日 晴。齒痛。朝津田大尉を豊陽館に訪ふ。昨夜出発せりと云ふ。片山齒科医に至り治療、帰て就寝。痛甚。森恪、中島少佐等来訪。

十二月十六日 快晴。加藤海軍中佐新嘉坡よりの信至る。津田大尉に致書す。高木陸郎来訪。夜神崎、波多来談。姚文藻来訪、深更に及で去る。

十二月十七日 晴天。海軍に発信す。午前弓術を修む。東京宅に金六百円を滙送す。中島、波多を訪ひ帰る。午後李維格より晚餐の案内有り、辞して行かず。夜平岡、村上、神崎を訪ふ。是夜九時亜細画報館に爆弾を投ずる者有り。

十二月十八日 晴。朝波多来訪。海軍に発信す。午前弓術を修め、佐々布を訪ひ帰る。六時中島少佐の招宴に杏花楼に赴く。八時半帰る。同座は鈴木、南里、井手某等なり。佐々布来訪。

十二月十九日 晴天。日曜。午前八時より佐々布、水谷と北郊に出獵す。獲る所無し。二時帰る。内人の信至る。山口啓三より筋子一桶を贈り来る。

十二月二十日 晴。理髪、弓術を修て帰る。中食後姚文藻を訪ひ、帰て海軍に電報を発す。西本、鈴木大尉、今井、波多来訪。四時出て有吉、中島を訪ふ。夜姚、波多来訪。佐原来訪。

蔡鐸は雲南にて陸榮廷は広西にて義を起して袁世凱を討たんとす。馮国璋、張勳も之と相呼応して

起ち討袁の師を挙ぐるに決せりと云ふ。

広東、広西、雲南、貴州、四川の五省連合して帝制反対を宣言せりと電報北京より達せり。

十二月二十一日 晴天。海軍田中大佐に発信、右の顛末を報ず。午前中西正樹を豊陽館に訪ふ。昨夜来着せる者なり。談話時を移し共に出て弓術倶楽部に至り、去て高木陸郎、多田等の帰国を送る。小池政務局長、鳥居赫雄、狄楚青に致書す。午姚、波多来訪。古閑信夫、宮島大八、升允の信、並に齋藤恒より其母堂の訃至る。山口啓三に致書。齋藤少佐に弔詞を發す。午後中西正樹来訪、拉して雅叙園に至り小酌暢談、共に豊陽館に至り小談、八時帰。姚来訪せりと云ふ。

十二月二十二日 晴。午前中西を訪ひ、去て弓術を修む。午後姚、佐々布、迎、神尾来訪。増田大佐、中村六蔵の信至る。夜中西を月廬家花園に招宴。青木、土井、中野二郎、秦、澤本等同座たり。九時半帰る。神嵩、姚前後来訪。東京宅に金五百円を郵送す。

十二月二十三日 晴。午前軍令部に報告を發す。中西を訪ひ小談、去て弓術を修め帰る。升允に致書。別に瞿鴻禨、鄭孝胥の扇子を升允に郵送す。時報館より七月至十二月分三百元を送り来る。午後秦、山成来訪。五時姚文藻宅に至り南京より来れる汪鍾霖に会晤し、去て倶楽部の小野兼基の送別会に列し、八時半帰る。

十二月二十四日 半晴。午前中西、波多来訪。田中耕太郎の信至る。外務省手当二百員を受取る。是日竹下少将、田中、山岡岡大佐、狩野直喜、東京宅に筈を送る。午後波多、中西と松井大使慶四郎をアストルハウスに訪ふ、在らず、弓術を修め帰る。神嵩、神尾来訪。晚倶楽部に於て中西正樹を招待す。同座は八九人。九時散ず。佐々布、姚、平岡来訪。是夜より南京に出帆を約せしも時局切迫の爲め中止す。狄平より建寧古磁を贈り来る。

十二月二十五日 快晴。朝中西を訪ひ共に出て中島、鈴木両武官を敲き、去て井上照相館に至り中西、波多、佐原と撮影し中西と握別す。本人は今日青島に赴く者なり。秦、波多と松井大使をアストルハウスに訪ひ小談、去て上海日報社に至り、正午小野兼基の帰国を送りて帰る。午後弓術倶楽部の納会に出席、晩に及で帰る。南京市川信也の信至る。夜姚文藻、汪鍾霖、波多来訪、十一時去る。

汪の談に拠て馮、張の竟に起つ能はざるを知り得たり。

十二月二十六日 晴。午前弓術を修む。海軍に馮国璋の起つ能はざることを電報す。鳥居、小池政務局長、中西正樹に信片を發す。東京竹下少将、山岡大佐、並に狩野直喜に信片を發す。四時半より仏租界白岩宅の招邀に赴く。澤本、波多等と晩食を共にし、八時半帰る途中姚を訪ふ、不在。十一時来訪。

支那第二艦の福建出身の軍人帝制に反対し馮国璋に結で事を挙げんとす。

十二月二十七日 晴。午前島田、波多、井手照人来訪。午後海軍に報告を發し、外に小池張造、市川信也に発信す。弓術を修め、去て有吉領事、西田を訪て帰る。平岡、佐原来訪。晡時神嵩、鈴木大尉来訪。内人の信至る。是日草場謹三郎の韻に次す。夜波多、姚来訪。海軍に電報を發す。

少年曾期第一名、俯仰今昔若為情、讀書擊劍學豪英、  
擬向滄溟斬鯨鯨、卅年遊迹老客程、氷心鉄幹欽広平、  
嗟我底事事遠征、功業未立德未成、古人遺謨莫与京、  
空留双髯白千莖、此間不作不平鳴、身与閑鷗一樣輕、  
無端憶起旧時盟、情誼奚讓弟与兄、千里思若望韓城、  
海雲漠々水盈々、何当一燈話平生、傾尽紹興酒一罍。

十二月二十八日 晴。午前姚文藻と南洋路鄭孝胥宅に李経邁と会し、時局に付き商量する所有り。晌午に及で散ず。午後中島、波多、杉坂大尉を訪ひ、去て弓術を修め、白岩、藤村、秦等を歴訪して帰る。海軍に発信す。大阪牧卷次郎の訃に接す。夜中島少佐、杉坂大尉、迎英輔、波多博来訪。

十二月二十九日 晴。午前牧卷次郎の追悼に東本願寺に列す。終て弓術を修め帰る。北京吉田大佐に報告を送り、鳥居、田鍋に致書。午後佐原を訪、牧宅への香料五元を托し、佐々布を訪ひ、波多と弓術



を修め帰る。午後西本来訪。六時中島の招邀に倶楽部に赴く。同座は杉坂大尉，鈴木大尉，西田，西本，波多，佐原等也。九時致。杉坂大尉は今夜上船広東に赴任する者也。

広西，貴州，四川の三省独立を宣布せるを以て張敬堯の兵四川に派遣せられたり。

十二月三十日 半晴。午前理髪，弓術を修て帰る。市川信也，亀井陸良に復書す。夜倶楽部に東方通信社の忘年会を催し，藤，波多，八田，賀来等と晩食を共にし，八時半帰。

十二月三十一日 晴。朝十時半公使館書記官小幡西吉を車站に迎ふ。北京より至りし者也。東京宅，菅村，河口，田中に年賀状を發し，菅村，河口，田中に金二十円を送る。朝食後弓術を修めて帰る。正午有吉領事の午餐会に月廼家花園に赴く。同座は小幡，佐原，並に領事館員なり。三時散ず。晩神寄，島田来訪。内地の知人に年賀状を發す。夜宮坂九郎，平岡来訪。九時南陽丸に至り白岩夫婦，宮坂の溯江を送て帰る。夜半下痢。